ディバインナイツ -the origin-

イーヴァルディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディバインナイツ　－ｔｈｅ　ｏｒｉｇｉｎ－

【Ｎコード】
Ｎ３７６３Ｑ

【作者名】
イーヴァルディ

【あらすじ】
これは始まりの物語。これは滅びに近づく世界の物語。これは『一人一軍（ワンマンアーミー）』の伝説。
同じく投稿する「新たな未来を求めて」よりも過去の時代でオーバーテクノロジーのものが作られた理由が書かれます。
「新たな未来を求めて」が続く間は極稀に更新する予定です。
後、「新たな未来を求めて」の内容を優先するため大きなネタバレ部分がある場合はその部分が出るまで休載する時があります。

プロローグ（前書き）

全ての始まりの物語です。レヴァンティンやアル・アジフなどオーバーテクノロジーが作られた時代の話になります。

プロローグ

――光の中の希望を
――世界を救う力を
――万能かつ全能の力を
――滅びる世界の主人公に
――大いなる宿命と
――後の世に続く因果と
――暗闇を晴らす思いと
――光を吸い込む翼と共に
――運命に抗うか
――世界に抗うか
――滅びを受け入れるか
――絶望に染まるか
――光射す道となりえるか

それは全ての始まりの物語。

世界を救うことを強要された少年と少年を支える仲間達の物語。

それが、神によって選ばれた部隊『ディバインナイツ』の始まりの物語。

序話　一人一軍（前書き）

序話として入れました。
プロローグとは別物です。

序話　一人一軍

一人一軍（ワンマンアーミー）。

それは僕につけられた二つ名だ。一人にして一軍に匹敵する戦闘能力を持つとされ、実際、いくてもの部隊をこの手で葬ってきた。

そして、今日も僕は戦っている。でも、敵は人間じゃない。

僕は開いていた手を握りしめる。

「ライド。『疾風迅雷』」

その言葉と共に僕の服装が変わる。学生服だった僕の体には緑を基調とした戦闘服に変わる。

目標は前方２５０ｍ。目標の数は２８。目標が行っている行動は補食。目標の大きさは４ｍから１５ｍ。生存者は無し。

目標地点を見つけ出し、オレは小さく息を吸い込んだ。そして、地面を蹴る。

速さは音速をはるかに超える速度。。衝撃波、所謂ソニックブームと言うべき、が目標を吹き飛ばす。ある目標は壁に激突し、ある目標は空に舞い上がった。

そして、狙った目標の体に僕の腕が突き刺さっている。狙いは心臓ではなく頭。目標の生命力は極めて高く、心臓を破壊してもしばらくは動き回る。だから、狙うは頭。頭蓋骨を貫き脳を破壊する。

もちろん、周囲には大量の血が飛び散り、目標は体をビクンビクンと痙攣している。僕の体にも鮮血が飛び散っているが気にしない。気にしていたなら死が近づくだけだ。

僕は手を抜いた。

目標が背中から倒れ周囲に血だまりを作り出す。

「一体目」

その言葉と共に僕はしゃがみ込んだ。頭があった場所に巨大な目標の腕が通り過ぎる。目標が僕を再認識した時には驚くだろう。だって、僕の戦闘服の右腕が緑から赤に変わっているのだから。

握りしめるた拳を開く。エネルギーは十分。

「ロード。焼き尽くせ」

手のひらに集められた炎を僕は放ち、目標を一瞬で焼き尽くす。まだ動けるのは後２０ほど。やはり、敵の生命力は極めて高い。これが人間なら最初の時点で死んでいる。

これが、人類の新たな敵。

「ライド。『爆炎光破』」

戦闘服が右腕と同じように赤く染まる。

残った目標が動き出す。速さはかなり速い。他の人なら恐怖で身が

竦む可能性もある。でも、こんな数なら四方八方からミサイルを打ち込まれるよりもはるかに簡単だ。

「オーバーロード。終わりだよ」

そして、小さな太陽が目標を全て蒸発させた。

僕は発動を止める。周囲一帯は今の技の余波でかなりの部分が消え去っている。でも、無事な部分もある。

僕は歩き出した。生存者がいるかもしれない。

「ライド。『地縛失星』」

赤から黒に戦闘服を変えながら周囲を見渡す。

この世を神が作り出したなら、すでにこの世には神がいないのだろう。神がいるとしたなら、誰がこの光景を許しただろうか。

道端に積み重なっている死体。そのほとんどが真新しく、そして、食い荒らされている。

みんな必死で逃げたに違いない。だが、この街の住人を襲った目標はほとんど殺したようだ。

僕が戦ったのは比較的大きな部類。殺した人を集めて補食している最中に襲いかかった。卑怯者に見えるが、この街に後何体の目標がいるかわからない。

僕は小さく溜息をつきながら歩く。その中で何かが動くのがわかっ

た。僕はすぐに駆け寄る。すると、そこには恐怖で震えている少女が一人。

「無事？」

僕は現地の言葉で尋ねた。少女は恐る恐る頷く。だけど、場所が悪い。目標はまだ殲滅していない。軍が来るまで後何時間かかるかわからないがこのままだと少女が補食されるのは時間の問題だろう。

僕は周囲を見渡す。

目標の気配は感じない。だが、この街にはまだたくさんの動く物体がある。数は２５０ほど。生き残った住人を守りつつ目標を殲滅する方法はある。

「やるしかないか。ここでじっとしていてね」

僕は走り出す。

目標の習性は何となくわかってきている。軍からの情報と今見たことでわかった。

目標は動く者を優先する。それは生きているという意味ではなく、逃走する者や戦う意志のある者であり、標的をオレに向ければいい。

「ライド。『疾風迅雷』」

拳を握りしめ、速度を上げる。音速を超える速度ではなく、秒速１００ｍほど。そして、視界に現れた目標に向かって加速した。

目標が気づくより早く、その頭を蹴って粉砕する。刹那的に音速ま

で加速した僕の足は十分に目標の頭を吹き飛ばす破壊力があった。
周囲に血が飛び散り中身が壁にへばりつく。何も知らない人が見たら確実に殺到する光景だ。でも、これくらいすれば十分。
さっきの小さな太陽も目につくが、一定距離範囲内に凄まじい速度で仲間が倒されたなら目標は僕に標準を向ける。
僕は拳を握りしめた。
「ライド。『地縛失星』」
戦闘服の色が変わる。それと同時に四方から目標がわらわら現れてくる。数は１ｍ以内の小型が２０。１ｍ以上で５ｍ以下の中型が７０。５ｍ以上の大型が１００ほど。
他の目標は向かって来ている最中か、別の場所に向かっているか。おそらく、軍の先行部隊と会ったのだろう。
僕は身構える。
敵の数は大したことはない。ここからは時間との勝負になるからだ。軍がここに来るより早くこの場にいる全ての目標を殺し、離脱する。そうしなければ、軍は確実に僕ごと目標を攻撃する。
それは、周囲に生きているかもしれない民間人も巻き込むこと。
だから、僕は地面を蹴った。速度は１００ｍを１０秒で走れるかどうか。

一番前にいる大型の目標が腕を振る。その腕をオレは簡単に受け止めた。そのまま受け流して目標のわき腹を蹴り飛ばす。目標は不自然に体がくの字に曲がって吹き飛んだ。

相変わらず、骨と内臓を粉砕する感覚には慣れない。

向かってきた小型の頭を瞬時に握り潰し、もう一体の小型に向かって投げつけた。投げつけた小型は空気との摩擦で赤くなりながら直線上にいた目標を薙ぎ倒す。

この瞬間、目標の動きが止まった。

気づいたのだろう。絶望的な戦力差に。

「ライド。『爆炎光破』」

だけど、それは僕からすればただ単なる大きな隙。

「オーバーロード。終わりだ」

僕の頭上が光ったと思った瞬間、この場にいた全ての目標の頭が蒸発した。死体が焼ける匂いが鼻につく。

「ふう。ダウン」

戦闘服が学生服に変わる。

もう生き残っている目標はいない。

「何人、やられたんだろうな」

僕は周囲を見渡しながら呟いた。

周囲にあるのは攻撃を受けたであろう死体の数々。腕が千切れ、足はもげ、腹は食い破られている。首が千切られているのもある。

全員の標準は皆同じ。恐怖に染まっている。

僕は小さく息を吐く。もう見慣れた光景だったから。

五年前、異形の存在が世界に現れた。その存在の大きさや形は様々だがとあることが共通していた。

人類の敵。

今まで起きていた人類間の戦争はあっという間に消え去り、代わりに異形との戦いが始まった。それは人類が総力戦になってようやく互角に持ち込める敵だった。

四年前には大規模な異形との戦いが起き、約１００万の兵が３０００万近い異形に呑まれた。その日に人類はアフリカ大陸とヨーロッパ大陸を捨て、南北アメリカ及びアジアに拠点を移した。

だけど、異形は西アジアの国々を滅ぼし、インドに迫ったところで壊滅的な被害を受けて撤退している。

それはヨーロッパ大陸の人々が作り出したハイゼンベルク要塞が最大限に機能したからだろう。そして、その戦いにはちょうど僕も参加していた。

「さて、軍に合わない内に撤退しますか。ライド。『疾風迅雷』」

そして、僕が地面を蹴ろうとした瞬間的、威圧的な空気が周囲に流れた。

「ライド。『地縛失星』」

すかさず戦闘服を変えると同時に路地裏から何かが現れる。

それは異形。

中型、人と同じくらいの大きさをする異形だ。中型に多いクマ型やトド型とは違う人型。

異形と戦い続けてきた僕ですら知らない形。ニュータイプとでも言うのだろうか。

異形の特徴である灰色の肌。そして、金色に光る目。

「キサマガ、コロシタカ？」

最初、目の前にいる異形が話しているとはわからなかった。だけど、僕は身構えながら尋ねる。

「そうだよ。お前は？」

異形が会話するなんて聞いたことがない。もしかしたら、異形達の中でもリーダー格なのだろうか。

「ワガナカマコロス、ユルサナイ。ムクイヲウケヨ」

こちらの言葉は聞かない。そして、動く。速さは異形にしては速い。
そして、僕からすれば遅い。
異形の攻撃を受け流して肘を全力で異形に叩き込む。だが、異形は
それを簡単に受け止めて僕の側頭葉を蹴り飛ばした。
普通な気絶してもおかしくない威力。いや、普通な死ぬ可能性もあ
る威力だが、今の僕には効かない。
体勢を立て直してお返しに同じように側頭葉を蹴り飛ばした。異形
は面白いように吹き飛ぶ。
「『地縛失星』じゃないとやばかったかな」
吹き飛んだ異形は上手く体勢を戻して壁に足をつける。着壁という
べきか。
「キカナイ。ナゼキカナイ」
「敵に教えるほど甘くはない。それに、お前達異形は僕達の敵だ。
この場で殲滅する」
「リカイデキナイ。リカイデキナイ。ホロビノシュクメイハカエラ
レナイ」
この時、僕はようやく異形と会話出来ることがわかった。
「滅びの宿命だと？　どういうことだ！」

とりあえず尋ねてみる。

「アワレ。コレガカトウセイブツ。ダケド、オマエノツヨサハイジョウ」

「だろうね。これでも一人一軍（ワンマンアーミー）と名乗っているんでね、人間最強だ」

一人一軍（ワンマンアーミー）。

それは異形達が出てくる以前も有名だったらしい。本格的に有名になったのは異形が出て来てからだけど。

ハイゼンベルク要塞での攻防において一人一軍（ワンマンアーミー）がいたから勝てたとも言われるくらいだ。僕は大したことはしていないけど。

ただ、ヨーロッパでは命を救えなかったから。

「ツヨイ。ヒク。ツギハコロス」

異形が消える。

僕は握りそうになった拳を抑えつけた。

音が感じない。動けばあらゆる音がする。それは、地面を蹴る音。それは、空気を揺らす音。だけど、一切の音がしなくなった。

例え、『疾風迅雷』を纏ったとしても追いつくのは不可能だ。

「ダウン。とりあえず、撤退」

「いたぞ」

言葉が聞こえる。言語はここの言葉ではない。もちろん脳内変換。それと共に何人かの兵士が僕を取り囲んだ。

「白百合京夜様とお見受けします。無駄な抵抗はせずに着いて来てください」

日本語に直せばこんな感じになるだろう。ただ、銃を向けながら着いて来てくださいというのはおかしい気がする。

「軍本部に向かえばいいんだよね。大丈夫だよ。一人で向かえる。今は生存者の救出が最優先のはずだよ。異形の気配は見当たらないから」

「わかりました。すでにあなたの正体は分かっていますので」

兵士達は生存者を探すために一気に散らばった。

僕は小さく溜息をついて拳を握りしめる。

「ライド。『疾風迅雷』」

とりあえず、最速で向かえばいいよね。

あの街から軍本部というより前線基地と言うべきだろうか。そこに

向かって走ること約二秒。あっという間に到着した。

確か、前線基地には約1万人の兵士がいるはずだ。人類がハイゼンベルク要塞から打って出たのは約二年前。着実に軍が定めた聖都に向かって進んでいる。自分達を十字軍とでも言うかのようだ。

その前線基地に僕は普通に正面から入ろうとする。だけど、入り口で早速兵士に止められた。

「ここは軍の前線基地だ。民間人が入っていい場所じゃない」

まあ、僕の服装は学生服だしね。

「ライド。『地縛失星』」

そういうわけで僕は戦闘服に着替えることにした。これを見ればここならわかるだろう。

「まさか、一人一軍（ワンマンアーミー）。何故、ここに」

「本部に向かうように言われたからね。魔術師リズィはいる？」

「前線基地にはいますが、リズィ殿に何か用ですか？」

兵士が銃に手をかける。

というか警戒されすぎだよね。確かに、昔は軍部隊の一軍を壊滅させていたけど、異形が出てからは精力的に闘ったはずだよね。

僕が小さく溜息をついた時、誰かがこっちに向かって来るのがわか

った。服装は魔術師という存在を知らしめるようなマントやら尖り防止やら。ただ、小さい。

「リズィ。相変わらず小さいね」

「余計なお世話じゃ。というか、久しぶりに会ったと思えばいきなりそれか」

「いつもやっているからね」

そんな僕達の会話を兵士達はポカンとしながら見つめている。それに気づいたリズィはコホンとわざとらしく咳をした。

「そなたが逃げる前に見つけて良かったわ。一応、前線の兵から連行されたのかの？」

「いや、一人で来たよ。今は生存者の救出が優先だしね。だったら、前線基地の場所を知っている僕が一人で行けばいいし」

「賢明じゃな。こやつを我の権限で通すがよいかの？」

ポカンとしていた兵士が慌てて背筋を伸ばして胸に手を当てた。それに対してリズィも胸に手を当てる。

僕は兵士に向かって軽く頭を下げた。

「紛らわしいことをしてごめんね」

「いえ、リズィ殿の客人なら我らの味方です。今度は証明書を発行してもらってください」

「そうするよ」

僕は笑みを浮かべながら頷いて歩き出した。横にリズィが並ぶ。

「戦果は？」

「異形２３８体撃破。一体は逃げられたよ」

「珍しいの。お主が逃がすとは」

リズィは僕の実力をよく知っている。どれだけ知っているかと言えば、一人一軍（ワンマンアーミー）の名をもらった戦いでその軍を率いていたからだ。当時からリズィが率いる軍は世界でもトップクラスと言われていたほどだったのに。

「初めて見る異形がいたよ。形は人型。そして、言語を話す」

「言語を？　何の言語じゃ？」

「レイルー語ってわかる？　日本に来たばかりの外国人みたいな話し方」

「レイルー語を知っているのはそなた一人ぐらいではないかの？」

アフリカの地方民族が使っていた言葉だ。でも、今ではその言葉を話す人はいない。アフリカは異形の土地だから。

僕が知っているのは、世界を旅していて立ち寄った村がその地方民

族だったからだ。みんな優しくていい人達だったのに。

「他に特徴は？」

「今の力を受け止められた。後、蹴りは即死級」

「『地縛失星』でじゃと？　それよりも上じゃと言うのか。異形を超えておるの」

僕の一人一軍（ワンマンアーミー）としての実力が人間を超えているとするなら、あいつは異形の中ではそういうポジションなのだろう。

だけど、僕と対抗出来る力があるということは一人一軍（ワンマンアーミー）として戦えるということ。リズィとしたらかなり頭の痛い案件だろう。

「下手をすればハイゼンベルク要塞が落とされかねん。あそこが落ちればインドは落ちるぞ」

「だね。ハイゼンベルク要塞の次はバングラデシュの要塞。でも、そこは完成しているとは言えない」

「中国が行った万里の長城を要塞化したような場所なら良かったんじゃが」

本来、北からの脅威に対抗して作られた役に立たなかった万里の長城だが、今では冗談抜きで北から来る異形に対しての要塞と化している。

異形がアジア地域の西に押し込められているのはハイゼンベルク要塞と万里の長城、そして、天然の山脈があるからだ。どれかが無く

なれば異形がアジアを蹂躙する。

「魔術器の完成速度は？」

「８０％じゃな。我が開発したアル・アジフ。そして、そなたの能力をヒントに得たレヴァンティンと隼丸。後２ヶ月ほどで完成するぞ」

「２ヶ月か。凡庸性を極めて高めたレヴァンティン。魔術書の最高峰に位置するアル・アジフ。バランスの高さを求めた隼丸。今の魔科学で実現出来る最高のデバイスを完成させてやっとだな。後は、使えるかどうか」

異形に対抗するためには今の科学の力では上限がある。

異形が中東にいるため石油はメキシコ湾から回収しないといけないし、鉄の価格もだんだん高騰している。

このままでは後五年で経済が破綻すると言われている。

「魔術器開発は我が母国と日本もやっているからの。アルタミラか北アイルランド研究所さえ残っていれば」

リズィが言う二ヶ所は魔科学が極めて発展した魔科学都市として有名だった。だけど、ヨーロッパを捨てることになり、どちらも爆破させて機密保持を図った場所でもある。

リズィが研究していた場所はアルタミラなのでよく分かっているのだろう。

「でも、北京郊外とキャンベラ郊外の軍事研究所でも新しい兵器の開発が始まっているって聞くけど？」

僕が耳にしたのは噂の範囲内であることだ。噂の範囲内だからこそ作っているものには笑ってしまう。日本では真剣に信じている人も多い。

リズィが呆れたように溜息をついた。

「人型機械兵器のことじゃろ。我が作った精神感応システムを応用するものじゃ。理論的には作ることは可能での、魔科学とは恐ろしいものじゃ」

「機動戦士参上か？　って騒がれているけどね。でも、異形に勝つなら何だって使うべきだと思う」

ネット上だと騒がれ方が凄まじいらしいけど。どんなフォルムになるかが特に。

「そうじゃな。今は攻勢に出ているとは言え、異形がいつ大反攻を起こすかわからないからの。今は魔術器の開発を急がねば」

「じゃ、少しの間はリズィに任せていいかな？」

「我にか？」

リズィはテントの中に入った。

テントの中には三つの装置がある。大きさはリズィと同じくらい。

それぞれに本、剣、弓が装置の上に浮かんでいる。
アル・アジフ、レヴァンティン、隼丸だ。隼丸は可変システムを搭載して剣にも変形出来る。
「むしろ、何をじゃな」
「そろそろ日本に帰ろうと思ってね」
キーボードの上に指を走らせかけたリズィが止まり、振り返る。
「確かに、そなたが前に帰ったのは半年前じゃな。そなたのおかげで異形が少なくなったからの」
「つか、なんでリズィが僕の行動を知っているのかな？　異形を少なくしたのは民間人の被害を抑えるためだよ。でも、今回は」
たくさんの人が死んだ。ハイゼンベルク要塞の近くに位置していたことから警備も厳重じゃなかった。
僕が到達した時にはすでに手遅れ。
「我がハイゼンベルク要塞の拡大を進言しておく。そなたは安心して帰るがいい」
「お願いね。もし、危なくなったら連絡をちょうだい。１０分で駆けつける」
「了解じゃ。それと」
リズィは机の引き出しからペンダントを取り出した。そして、それ

を僕に渡してくる。

「御守りじゃ。本当なら、もっと前に渡したかったのじゃが、そなたがここに寄らぬからなかなか渡せなかった。我は、そなたの幸せを願っているぞ」

「じゃ、僕はリズィの成長を願っているよ」

「うう、京夜は意地悪じゃ」

僕はリズィからもらったペンダントを首にかけた。そして、リズィに向かって笑みを浮かべる。

「ありがとう」

「ど、どういたしまして」

日本に帰ったら確実に麻耶に怒られるだろうな。後、高校はまた留年が確定したんだよな。僕っていつになったら卒業出来るのだろう。というか、休学って何年まで可能？

僕はそんなことを考えながら恥ずかしさで顔を赤らめたリズィの頭を撫でていた。

序話　一人一軍（後書き）

こんな感じで物語を進めていきます。
京夜の名前やリズィの話し方。そして、リズィが開発する魔術器に人型機械兵器など「新しい未来を求めて」とリンクする部分がたくさんあります。
京夜は一応人類最強です。ただ、最強にしては弱点が極めて多く、本気を出して普通に負けることもあるので主人公最強？としました。
ポイントは「新しい未来を求めて」の周とは真逆の存在であること。
真逆の力を持つこと二人を楽しんでください。

第一話　白百合京夜（前書き）

「新たな未来を求めて」が加筆修正期間に入ったのでしばらくの間、こちらを進めます。加筆修正と言ってもほとんど加筆ですが。
一話一話長いですが、駄文を読んでください。

第一話　白百合京夜

深呼吸をする。

息を吸い、そして、吐く。この動作を何度繰り返しただろうか。

息を吸って、吸って、吸って吐いて、

「やっぱり無理だ」

僕が振り返った瞬間、そこには出会いたかったけど出会いたくない人がいた。

髪の毛は長く腰ぐらいまである。さらには身長は平均的だろう。そして、十人中十人が必ず美少女と言う少女。その少女を見て僕の頬はひきつっている。対する向こうもひきつっている。

僕は恐怖から。少女は怒りから。

思わず戦闘服を纏いたくなるけど、少女はそれより早く僕の服をつかんだ。

「会いたかったよ、お兄ちゃん」

「あのさ、麻耶、一ついいかな？」

「何かなお兄ちゃん？」

僕は乾いた笑みを浮かべる。

「手を放してくれないかな？」

ちなみに、僕の体はこの時点で宙に浮いていた。もちろん、麻耶に持ち上げられて。白百合家の人間がこうではない。麻耶が人間離れしているだけだ。

麻耶は小さくため息をついて手を離した。

「久しぶり、麻耶」

「半年ぶりだね。さっきまでお兄ちゃんが帰ってきたらどうやって嬲り殺すか考えていたところ」

「お、お手柔らかに」

僕は顔をひきつらせながら答える。

そんな僕を見て麻耶は小さく溜息をつくけど、何か諦めたようにっこり笑った。

「本当にお帰り。お兄ちゃん」

「義母さんは？」

家の中に入った僕はあまり変わっていない部屋の内装を眺めながら

お湯を沸かしている麻耶に尋ねた。

麻耶は台所から顔だけだす。

「仕事だよ。で、お兄ちゃんは今までどこにいっていたのかな？」

「主にハイゼンベルク要塞。防衛戦の時には強く感じられなかったことがいろいろとわかったよ。でも、救えなかった」

僕の言葉に麻耶が視線を落とす。

今の言葉がどこのことを言ったのかわかったのだろう。

異形によって街が一つ壊滅した。生き残った数は約３０人。それ以外が完全に死んだ。身元が分からない遺体はかなり多いらしい。

その話をニューデリーにある空港で聞いて僕は唇を噛み締めたのは少し前のことだ。

「何が人間最強の称号なんだよ。それで守れるものが無ければただのお荷物じゃないか」

「お兄ちゃん」

「強くなったと思ってた。１０年前に紛争に巻き込まれて、ハイナを救えなかったあの時から強くなったと思ってた。でも、僕は強くなってすらないんだ」

あの光景が思い浮かぶ。

紛争に巻き込まれた僕を助けてくれたハイナが僕を庇って死んだ光景を。思い出すだけで手足が震える。

「お兄ちゃん」

僕はいつの間にか近づいてきていた麻耶によって抱きしめられていた。麻耶が僕の背中を優しく叩く。

「お兄ちゃんはたくさんの人を救ってる。私はそう思っているよ」

「でも、僕は」

「お兄ちゃんが全てを救おうとしているのは私も知っている。でも、家の中だけは私のお兄ちゃんでいてて欲しい。一人一軍（ワンマンアーミー）としてじゃなくて、私の恋人として」

麻耶が目を瞑ってゆっくり近づいてくる。僕も目を瞑って、

「昼からお盛んね」

「うわっ」

「わきゃっ」

その言葉に僕達は距離を取っていた。

声のした方を向くと麻耶を２０くらいまで成長させたような女性がいる。

「か、義母さん、驚かせないでよ」

「だって、久しぶりに我が子が帰って来たんだもん。驚かせなくて何が親か」

親の認識が間違っているとしか思えない。

義母さんはにっこり笑って麻耶を見た。

「麻耶、ベッドの上でしてもらうのよ」

その言葉に麻耶の顔が真っ赤に染まった。そして、声にならない悲鳴を上げて二階への階段を駆け上がる。

「半年前にはしたんだから恥ずかしくならなくても」

「なんでそんなことまで知っているの？」

確か、あの日は義母さんはいなかったはずなのに。ちなみに義母さんは意味ありげに笑っている。

後で盗聴器とか調べておこう。

「おかえり、京夜」

「ただいま」

オレは久しぶりに義母さんにただいまと言っていた。

「麻耶、入るぞ」

オレはドアをノックした後部屋に入った。ベッドの上では麻耶が枕を抱きしめている。

部屋の中は整理整頓されており、パソコンは最新型で最新の映画のＤＶＤが置かれている。

ちなみに、ここは麻耶の部屋ではない。僕の部屋だ。自分の部屋があまりに汚いからと言ってよくここに来るのだ。僕が覗く限り普通に綺麗なんだけどな。

「お兄ちゃん、なんでお母さんがあのことを知っているのかな？」

「ちょっと待って。ライド。『水破氷結』」

戦闘服を身にまとう。色は純白。汚れなき白。

僕は目を瞑った。瞑って小さく溜息をつく。

「この部屋、盗聴器が７個ある」

「義理の息子の部屋に盗聴器が７個って。あっ、私じゃないよ。私はそんなことはしないから」

「わかっているよ。多分、義母さんは心配なだけだと思う」

僕は麻耶の横に座って麻耶の手を握った。

「僕は麻耶とは血が繋がっていないけど、世間はそういう風に見てくれないと思うんだ。だから、心配だと思う。僕達二人がちゃんとやっていけるかどうか」

僕は麻耶と血が繋がっていない。それは、義母さんによって拾われたからだ。話によると生まれたくらいの時に捨てられたらしい。義母さんはそれなのに必死で育ててくれた。そして、麻耶を義母さんは産んだ。

だから、血の繋がりはない。でも、義母さんには本当に感謝している。今の僕がいるのは義母さんがいるから。

「麻耶、少しだけ甘えていい？」

「えっ？　でも、盗聴器が」

「お願い」

「うん」

僕は麻耶の胸に顔をうずめた。別にやましい気持ちからやったわけじゃない。それに、麻耶は胸が無いし。

ただ、麻耶がさっき言ってくれた言葉から、家の中では恋人としていたい。ただ、それだけだった。

「僕は、守れてないのかな」

ポツリと呟く。

あの街もヨーロッパも、アフリカも、全て僕の行動は遅かった。到着した時には異形が街を蹂躙し、生存者は皆無。いたとしても助けることが出来ない状況だった。

何もかも手遅れになってから僕はやって来る。手遅れにならなかったのはハイゼンベルク要塞くらいだ。

あの日、ハイゼンベルグ要塞は要塞としての価値を失っていた。門が開け放たれたまま異形が入り込み、要塞内での戦闘。その指揮を執っていたのがリズィだ。ただし、リズィはちょうど来たばかりで戦死した指揮官の代わりに指揮していたらしい。

ちょうどその時に僕がハイゼンベルグ要塞に到着した。焼き払い、薙ぎ払い、吹き飛ばし、ハイゼンベルグ要塞全てから異形を消すと惨状がよくわかった。たくさん死んだ兵士。でも、侵入は阻止できた。そのことを喜ぶ兵士。でも、自分一人が場違いな感覚になったのは違いない。そして、僕はリズィと出会った。

アメリカの若き指揮官であるリズィとの面識はそれからだ。

「お兄ちゃんの活躍は時々耳にするよ。前線のことを中継するテレビでよく噂になっているから。お兄ちゃんがいたからたくさんの人が今も暮らしている。もし、お兄ちゃんがいなかったら今頃日本も異形に喰らい尽くされているかもね」

それは冗談ではなく事実だろう。ハイゼンベルグ要塞と山脈と万里の長城があってようやく異形の進行を止めることが出来た。そうしなければ異形は止められなかったということだ。

「お兄ちゃんは確かに守れなかった。それは私も思う。でも、お兄ちゃんが守った人もたくさんいるから。守れなかった以上に守っているから。だから」

僕は麻耶の頭を撫でた。そして、額にキスをする。

「ありがとう。後、ごめん」

「私達は家族だから愚痴は聞くよ。でもね」

麻耶がにっこり笑みを浮かべた。そして、僕の腕を掴んだかと思うとそのままベッドに押し倒された。

こういう状況なのに何故か嫌な予感しかしない。どうしてだろうか。

「でもね、半年の間、手紙も電話もなーーーんにも無かったのはどうしてか説明してくれるよね？　遠距離恋愛でもそんな酷いことはないはずだよね？　だよね？」

麻耶が笑みを浮かべながら近づいてくる。

「いや、あのさ、そのさ、僕だって戦場を駆け回っていたんだよ。アフリカの調査とかヨーロッパの調査とか」

「ふーん」

そういう風に答えてくる麻耶の目は全く笑っていない。ちなみに、僕は麻耶には勝てない。妹だし、恋人だし。

「じゃ、リズィさんと一緒に食事をした日とかは手紙を書く隙も無かったのかな？」

「どうして、そのこと知っているの？」

リズィと話した時もリズィに僕の行動が筒抜けだった。まさか、

「私、リズィさんと仲がいいんだよ。毎日メールのやり取りをするくらい。本当に仲がいいの。だから、リズィさんからお兄ちゃんの動向を教えてもらっていたの」

「どうやって知り合ったのさ」

麻耶がどれだけ一般人を超越した存在であってもアメリカで若手エリートの中でトップを爆走するリズィと関わる機会なんて普通はない。

リズィの友達の大半は科学者か僕みたいな前線で戦うことが可能な同年代の兵士ばかり。日本人の友達は僕一人のはずだ。

麻耶と知り合うなんて無いにも等しいのにどうやって知り合ったのだろうか？

「不思議そうだね。だって、お兄ちゃんがいない間に再ブームになったものがあるんだよ。囁いたら答えてくれただけだけどね」

「なるほど」

確かにあれなら知り合うことは不可能じゃないけど、僕に関する事柄で何か合致することでもあったのだろうか。

「他にもいろいろ知っているよ。リズィさんと一緒の部屋で寝たり、リズィさんが甘えたら頭を撫でてくれたりリズィさんが」

「すいませんでした！」

僕はすぐに謝っていた。全部リズィから聞いたのだろう。確かに全部したことがある。弁解の余地はない。

「で、でも、本番はしていないよ」

「それは知っているよ。お兄ちゃんに迫ったらお兄ちゃんは『麻耶がいる。僕には麻耶がいるから』って言って拒んだって聞いたから」

ちなみにそんなことは言っていません。恋人がいると言ったら愛人でもいいと言われて麻耶の名前を出したことはある。でも、そんなことを言った覚えはない。

麻耶の中ではすでに確定事項なのか頬に手を当てて嬉しそうに微笑んでいる。僕はゆっくり起き上がった。

「麻耶、ごめん。連絡しなかったことは言い訳出来ない。実際に連絡出来た時にしなかったから。だから、ごめんね」

「うん、全く気にしてないよ」

その言葉に僕は思わずずっこけていた。だって、絶対に怒っていると思っていたから拍子抜けした。

「代わりに、お兄ちゃんはいつまで日本にいるの？」

「どうしようか考えているところ。今は異形の動きも沈静化しているし、長い間いることが出来るかな」

ちなみに、異形が沈静化しているのには理由がある。異形自体の数が少なくなっているからだ。

僕がアフリカ大陸やヨーロッパ大陸に言った時に視界に入った異形は全て倒したから絶対的な数が減っているということである。まあ、倒した数が数十億にも達するからだけど。

リズィから聞いた話だと、一人一軍（ワンマンアーミー）がいれば世界は救えるのではないかという話がある。もしそうなら、僕はすでに世界を救っている。

いくら倒したところでも、いくらでも復活するのが異形だからだ。倒してもどこからか湧き出てくる。このままだと、世界が滅ぶ方が早い。

「お兄ちゃん」

真剣な顔をした麻耶が僕の手を掴んでいた。

「考え事？」

「ごめん。麻耶がそばにいるのに」

「ううん。お兄ちゃんはずっと戦っているから。私に出来ることは、世界は戦いだけじゃないことを教えるだけ。私は、世界の邪魔をしているだけだから」

「でも、僕は感謝しているよ。麻耶がそばにいたら安心するから。これからについて考えていたんだ」

「これから？」

僕は頷いた。そう、これからだ。

今のままでは経済が破綻して戦えなくなる方が異形の全滅より早いとされている。それに、兵の数も少しずつだが減っている。

「うん。世界は完全に総力戦だよ。主な戦場がアジアだから南北アメリカはアラスカや海岸に陣地の形成と兵器の開発。アジアも全力で開発している。リズィだってね。それらが完成したら、きっと僕達は攻めるはずだよ。異形達の現れる場所に」

異形はどこから湧いてくるわけじゃない。アフリカ大陸にあるヴィクトリア湖近くから出てくるのだ。五年前に現れた巨大な城から。

僕もそこに侵入しようとしたけど、あまりの異形の数に撤退した。まるで、倒した矢先に増えるように出てくる嫌な感じだった。

「そこの内部に突入して本体を攻撃する。そうなると思う。その前に中東の奪還かな」

「だったら、それらが完成したら、お兄ちゃんは」

「うん。出るよ。今度は最前線よりも前で異形を倒す。それが、僕の役割だから」

麻耶はぎゅっと僕の手を握ってくる。麻耶は優しいから止めはしな

い。でも、心の中では止めたいと思っている。

僕は麻耶の頭を撫でた。

「事態が動くまで、僕は日本にいるつもりだよ。麻耶のそばにいるから」

「本当？」

「うん。久しぶりに高校にも行かないと。人間最強の人物が高校中退なんてしゃれにならないしね」

とは言っても、高校は長い間行っていない。リズィが仲介してくれたから本来出来る在学期間よりも長い間いられるようになっているけど、やっていく自信がほとんどないんだよね。

「本当？　お兄ちゃんと私は同じクラスだから私がサポートするね」

「そっか。麻耶ももうそんな年か」

むしろ、よくそこまで留年出来たと自分を誉めたくなる。学校に行ってもクラスメートの反応はわかるけど。

「そう言えば、お兄ちゃん、その服装はなんなの？」

麻耶の言葉に僕は戦闘服を着たままであることに気づいた。まあ、これなら話しても大丈夫かな。

「これが一人一軍（ワンマンアーミー）である理由。僕はこの服装、戦闘服を変えて臨機応変に戦っているんだ。例えば、ライド。『疾風迅雷』」

僕の戦闘服が緑を基調としたものに変わる。

「すごーい。魔法少女みたい」

「せめて魔術青年って言ってよ」

僕は思わず溜息をつきながら返していた。

魔法少女みたいという回答が返ってくるのは日本だけだろうな。リズィはスーパーマンみたいと言っていたけど。

「特徴は加速。最速でここからインドまで１０分で到着出来る速度かな。ただ、防御力はほとんど無いけど」

「防御力がないならスピードを上げることは難しいんじゃないかな？　ほら、風圧で」

「そういう意味じゃなくて、攻撃に対する防御力。パラメーターで言うなら攻撃と速度が５で後は１」

ちなみに他のパラメーターは防御、魔術攻撃、魔術防御の全てで五つ。まあ、あくまで指針だけど。

『疾風迅雷』は加速したまま攻撃するためその威力はただのパンチでも桁違いに高い。弱点を言うなら市街地戦では使いにくい。下手に使えば加速をして壁にぶつかって死ぬ可能性があることだ。実際に一回死にかけた。

「スピード型か。使い勝手は良さそうだね」

「まあね。使い方によったら最強になるし」

例えば、異形の群れの周囲を最速で駆け回ると人為的に竜巻を起こして吹き飛ばすことが出来る。ちなみに、それをした場合は異形を撒き散らすだけだけど。

他の使い方は最速で駆け抜けて衝撃波で異形を殺すやり方。最速で使えば確実に即死になる。

その速度で何かとぶつかれば僕も即死しそうだけど。

「他には何かあるの？」

「うん。ライド。『爆炎光破』」

僕の服装が変わる。すると、麻耶は戦闘服をぺたぺた触ってきた。

「どうかしたの？」

「あっ、うん。何か熱そうな気がしたから思わず。熱くはないよね」

「『爆炎光破』は熱量を操る力があるんだ。例えば」

僕は右の手のひらに炎を作り出した。そして、左の手のひらに氷を作り出す。これは一連の動作で行ったものだ。炎を作り出す熱量を手に入れた場合、必ず差が出てくる。簡単に熱量だけが手に入るわけじゃない。

「炎を作り出す熱量は空気中から奪う。その代わり、その奪った熱

量で氷を作り出す。こういう芸当も可能なんだよ」

「すごい。これって攻撃力は高そうだね」

その言葉に僕はすごく気まずそうな顔になる。それを見た麻耶は首を傾げた。

「これ、魔術攻撃力が高いだけでそれ以外はなんらただの服と変わらないんだ」

つまり、魔術攻撃力だけが5で他は1というむちゃくちゃな戦闘服でもある。ただし、その魔術攻撃力の高さが凄まじい。

学校の視力検査が2．0までしか計れないように、魔術攻撃力も5のランクに収まっているだけ。もし、『爆炎光破』の魔術攻撃力を5の基本とした場合、『疾風迅雷』は速度が4だが攻撃は2になってしまう。それほどまでに強力。

だって、射程距離が半径１００ｋｍになるから。

「だから、対異形にはかなり使えるんだよ。他にもいろいろあるけど」

「お兄ちゃんのことだから知りたいけど、今はいいよ。今は、お兄ちゃんと話がしたい」

今していると言えば麻耶はもっとして欲しいというだろう。それくらいに寂しくさせていたのだとわかるから。

僕は麻耶の頭を撫でる。本当はそばにいてあげないとダメなのに。

「僕だけが話しているから麻耶の話が聞きたいな。高校の話。同じクラスになったんだよね」

「うん。えっとね、委員長が委員長って人で、女子のみんなは私に優しいよ。でも、男子が私のことが嫌いらしくてよく嫌がらせされる」

「そいつらを殺せばいいよね」

僕は『爆炎光破』のままにっこり笑みを浮かべた。シスコンと言われようがなんだろうが、僕は麻耶のことが好きだ。だから、嫌がらせする奴らを根絶やしにする。

立ち上がって部屋の外に出ようとする僕を麻耶が必死で止める。

「大丈夫。女子のみんなが助けてくれるから。それに、お兄ちゃんが入ってきたらそんな嫌がらせもすぐに止むと思うし。お兄ちゃんは強いから」

「わかった。嫌がらせしているのを見た瞬間に殺せばいいよね」

「何もわかってないよね。そこまで心配してくれるのは嬉しいけど、お兄ちゃんが人殺しにはなって欲しくないな」

その言葉に僕は動きを止めていた。人殺しはしたことはない。でも、人殺しと言われたことがあるから。

その時を思い出すと、どうしても拳を握りしめてしまう。

「お兄ちゃん？」

「ごめん」

僕はベッドに座り込んだ。本当ならもっと麻耶と話をしたい。でも、僕は考えてしまった。あの時のことを。

「僕はもう、人殺しだよ。僕のせいでたくさんの人が死んだことがある。僕が到着しなかったからじゃない。それを考えたら」

考えるだけで手が震える。あの時の光景を思い浮かべるだけで気分が嫌になる。

「もしかして」

「うん」

麻耶には話したことがある。あるからこそ、麻耶は何も言わずに僕の横に座って手を優しく握ってくれる。

「僕に麻耶がいなかったら、今頃死んでいたかもね」

「冗談でも言わないでよ。お兄ちゃんが死ぬなんて、考えたくない」

でも、この世で一番危険なことをしているのは僕だろう。

単身でヨーロッパ大陸やアフリカ大陸に飛び込んで異形を倒したりしているから。だから、麻耶は心配なのだろう。

僕は麻耶の手をしっかり握った。

「一人一軍（ワンマンアーミー）なんて呼ばれているけど、僕はこんな力は欲しくなかったな」

「お兄ちゃんもそんなことを思うんだ。お兄ちゃんならもっと力が欲しいとか言うと思ったのに」

「間違っちゃいないけどさ。もし、この力がなかったら何をしていたんだろうなって考えてしまうんだ」

もし、なかったとしたなら僕は麻耶とずっと一緒にいれたのだろうか。幸せに暮らせたのだろうか。そして、僕は麻耶と出会ったのだろうか。

この人間離れした力はどうしても何か理由があるとしか思えないから。

「私は思うけど、もしかしたら、お兄ちゃんにその力がなかったら、恋人になっていないと思う」

「えっ？」

その言葉に僕は驚いていた。もしかして、麻耶に愛されていると思っていたのは自惚れだったのかな？

「あっ、嫌いになるって意味じゃないよ。もし、義理の兄としてずっと一緒にいたなら、私はお兄ちゃんとして、兄としては好きになったかもしれないけど、異性としては見ていないと思う」

聞いたことがあるけど、身近にいる異性はあまりに身近すぎて恋愛

対象にならないと聞いたことがある。それと同じ原理なのだろう。

麻耶は頬を赤く染めながら話を続ける。

「お兄ちゃんは優しいし、かっこいいから、嫌いになるわけがない。でも、お兄ちゃんがなかなか帰って来ない時、私は最初寂しいとだけ思っていたから」

それは告白された時に聞いたことがある。

僕がいなくなってから、麻耶は寂しいと思っていた。でも、月日が経ち、僕が世界を股にかけて戦っているという話を聞いて誇らしく思えたらしい。

民間人を守る英雄としての僕を。

そして、一人一軍（ワンマンアーミー）の名前が定着してから、麻耶は僕のファンになったらしい。

異形が現れてから、僕はちょくちょく帰るようになったが、久しぶりに会う度に恋心が大きくなっていったと聞いた。

「次第にお兄ちゃんが好きになって行った。久しぶりに会うからだと思う。久しぶりに会う度にかっこよくなっていたから。もし、ずっとそばにいたならそうはならない。ブラコンには変わらないけど」

僕は麻耶の頭を撫でてやる。シスコンとブラコンの兄妹か。僕達にとってはお似合いかもしれない。

「そういえば、お兄ちゃんって勉強出来るの？」

「ノーコメント」

はっきり言うなら出来ないけど。

だって、１２歳から頻繁に戦場に出ていてまともに義務教育を終わらせれると思える人は少ないだろう。

僕が中学を普通に卒業出来たのも政府がいろいろとしてくれたからだけど。

学校に行きだしたなら必死に勉強しないと。

「放課後に一緒に勉強しない？　私でもお兄ちゃんにいっぱい教えられると思うから。どうかな」

「お願いしようかな。あっ、でも、日々の鍛錬はどうしよう。もしもの時を考えて訓練しておかないと。えっと、メニューから考えて、あう。時間がない」

１日が２６時間あったら大丈夫な計算になってしまった。このままじゃ衰えるだけだ。

「待てよ。寝る時間を削ったら、大丈夫だ。麻耶、お願いしていい？」

「その前に、睡眠時間は何時間？」

僕はどうしてそのことを聞くのかわからず首を傾げた。

「2時間だけど？」

「2時間って。お兄ちゃん、もっと寝ないとだめだよ。成長期は過ぎたと言っても、健康に悪いから」

「大丈夫だよ。戦場なら2時間寝れるだけで」

そう言った僕の唇に麻耶の人差し指が触れた。おそらく、その話はして欲しくないのだろう。

「ここは日本だよ。戦場じゃない」

「ごめん。もう、職業病かな。麻耶がいなければ、僕は絶対に戦場でしか生きていけないかも」

冗談めかしてそう言って僕は麻耶を抱きしめた。

「だから、ずっと一緒にいてね」

「あらあら。プロポーズ？」

その言葉と共にドアが開いて義母さんが現れた。全く気配が無かったけど、義母さんって一体何者なのかな？

麻耶の顔は完全に真っ赤なまま固まっている。

「ふふっ、お邪魔だった？　でも、京夜に渡さないとだめなものがあるから」

義母さんがそう言って渡してくれたのは通帳だった。僕はその通帳

を開けてみると、最後のページには目を疑う額が大量に書かれていた。

麻耶が真っ赤な顔のまま通帳を見てまた固まる。

そこに書かれている額は大体２０億ほど。貯まっている理由が全くわからないけれど。

「政府からの援助金を全て貯金しているの。京夜が使うために」

これくらいがあるならいろいろと出来ることが多そうだな。とりあえず、

「麻耶、買い物に行こう」

「はえっ？　どうして買い物？」

「買いたいものが出来たから」

僕は立ち上がって麻耶の手を引っ張る。手を引っ張って歩き出した。麻耶もすぐに立ち上がって一緒に歩き出す。

とりあえず、麻耶に何かプレゼントをしてあげよう。今までの感謝と、これからの約束のために。

第一話　白百合京夜（後書き）

京夜はすごく精神が不安定であるので同じような悩みを何度も繰り返します。

第二話　狭間学園（前書き）

学園生活始まりますが、いきなり凄いことになっています。

第二話　狭間学園

狭間学園高校。

それが僕の通っている高校の名前だ。ただ、長い休学をしていたけれど。

久しぶりに、約二年ぶりに通う高校への道を、僕は麻耶と一緒に歩いていた。一緒に手を繋ぎながら。

「ねえ、麻耶。これは何の公開処刑かな？」

周囲を歩く同じ学校の学生からの視線が痛い。特に男子。

「私とお兄ちゃんはラブラブだということをみんなに知らしめるため」

「あのさ、あまり注目されたくないんだけど」

「多分、無理だと思うよ。だって、お兄ちゃんは半年後には戦場に出るんだよね。最後の戦いのために」

最後の言葉は小さな声だった。僕にしか聞こえないような声。

最後の戦いのためということは麻耶には言ったことがない。それに、リズィも誰にも話さないように約束したのに。

「あのね、私はお兄ちゃんの恋人だよ。わからないと思った？　半年間、一緒にいたい。だから」

「わかった」

仕方ない。半年ぐらいなら学園生活を楽しんでいいだろう。

「麻耶？　横の男の人は？」

その言葉に僕達は振り返った。そこにいるのは明らかに殺気だった女子高生の集団。その殺気は全て僕に向いている。

多分、麻耶のクラスメートだろうね。

「ちょうど良かった。みんなにも紹介するね。白百合京夜。私のお兄ちゃんで恋人だよ」

その言葉に周囲が固まる。そして、誰かがポツリと呟いた。

「一人一軍（ワンマンアーミー）」

僕の異名はかなり有名だから、名前を知っている人はいると思っていたけど、まさか、このタイミングでバレるとは。

すると、女子高生の面々がゆっくり近づいてきて、そして、一斉に頭を下げた。その下げ方もすごい。

一番前は土下座。次は膝立ち、中腰、立ったままという順に段になるように頭を下げている。

しかも、僕に向かって全員が色紙を出していた。

「麻耶？」

「えっとね、みんなに言っていたんだよね。今日、お兄ちゃんが来ることを。だからね」

「だから？」

麻耶がにっこり笑みを浮かべる。

「今までの借りを返すためにって、お兄ちゃんはどこに行くのかな！？」

僕は麻耶の言葉が終わるのを待たずにスタスタと歩いて行く。その後ろから慌てて麻耶が追いかけてきた。いや、麻耶だけじゃない。見事な段差を作り上げていた女子高生の面々も。

「ああ、もう、勘弁してよ！」

とりあえず、この場から逃げ出そう。そうしよう。

「お兄ちゃん、待ってよ。別に悪気はないんだから」

「悪気はなくても僕は嫌なの。はぁ、僕の夢見た高校生活がいつも崩れていくよ」

夢見たと言ってもまともに高校生活を送った記憶はないけれど。仕方ないよね。ほとんど学校に来ない生徒だし。

あの先生はまだいるだろうな。気が重い。

麻耶が僕の手を掴んだ。僕は振り払うようなことはしない。そんなことをしようものなら『地縛失星』で対抗しないと出来ないだろう。

「ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。麻耶は僕が学校に溶け込めるようにしてくれているから。感謝することはあっても怒ることはないから」

ただ、この光景だけは勘弁して欲しい。男一人に対して周囲にたくさんいる女子。うん、嫉妬で死ねそう。

「麻耶、彼女らはクラスメート？」

「うん。私達のクラスメートだよ」

だったら挨拶しないのはダメだよね。

「仕方ないか。初めまして。僕は白百合京夜。麻耶の義理の兄をやってるよ」

そう自己紹介した瞬間、女子の面々が我先にと自己紹介を始める。つまり、たくさんの人が同時に言うので何を言っているかわからない。

僕は聖徳太子じゃないぞ。

「失礼しまーす」

麻耶が元気よく職員室のドアを開けた。開けて中をキョロキョロと見渡す。

僕もその後ろから中を見渡すが、知らない顔が多い。新任の先生が多いみたいだ。

「どうした？　おっ、後ろにいるのは」

ドアの近くにいた先生、というか、オレが前に来た時の担任だった人。いきなり会うとは。

「白百合じゃないか。おっと、今は白百合兄か」

まあ、白百合は二人はいるからそうなるかな。僕は小さく溜息をつきながら先生を見る。

「ちょっと落ち着いたので戻って来ました」

「まあ、お前は政府から休学扱いにしろと言われているからな。教室とかは白百合妹に聞いておけ。一時間目の授業は？」

「武術訓練だよ」

「よし、帰ろう」

そう言って回れ右をした僕の腕を麻耶が掴んだ。

言いたいことはよくわかる。ただ、一人一軍（ワンマンアーミー）と呼ばれる僕にとって

武術訓練なんていらない。
その考えがわかっているのか麻耶が小さな息を吐く。
「お兄ちゃんと一緒に授業を受けたい」
「だけどさ、オレが武術訓練受ける意味が」
「単位の取得」
そんなものがありましたね。
僕は小さく溜息をついた。仕方ないけど武術訓練を受けるしかないみたいだ。まあ、のらりくらりとしていればいいよね。
僕の溜息に麻耶がギュッと手を握りしめてくる。
「じゃぁ、教室に向かおう。体操服は持ってる？」
「持っていると思うか？　まあ、戦闘服ならあるけど」
「おっと、白百合兄は少しだけ残れ。白百合妹は外にいとくこと」
その言葉を聞いた僕は麻耶を職員室の外に出して扉を閉めた。最初から残すつもりだったのかいつの間にか手が離されている。
先生が溜息をついた。
「まあ、お前がどこで戦っているか俺達は知っているからあまり言わないけど、今回はどれだけいれる？」

「よくて半年。異形の進行によって大きく変わります」
異形が攻めてきたなら僕は最前線より前に立って敵を滅ぼさないといけない。そうしなければ、人類が滅びる。
半年の間に何が出来るかわからない。でも、何か出来ると僕は思っている。
「そっか。なら、俺からは一つだけ。楽しめ。この生活をな。以上だ。行ってよし」
その言葉に僕は頷いて職員室から出た。ドアの近くで背中を壁に預け、麻耶が悲しそうな表情で床を見ている。
僕は麻耶の手を握った。
「麻耶、案内してよ」
「うん」
麻耶が頷いて歩き出す。その表情は少し暗い。
「お兄ちゃんはさ、どうして高校に入ったの？　どうして、最前線でいないの？」
麻耶が考えているのは今の世界についてだろう。未だに僕達は完全に染まっていない。
僕は普通の高校生活を送りたいという気持ちがある。麻耶は僕がここにいるのは自分という枷があるからと思っている。

それが、世界の滅亡に近づくとわかっていても。

「僕は、自分が何かしたいか未だにわかっていないんだ」

一人一軍（ワンマンアーミー）としての力を発現した時だって僕はがむしゃらだった。

自分が生まれた意味がわからず、生きる意味がわからず、家出をして海外に渡った。それは当時からすれば暴挙だったと思う。でも、何かしたいと思っていたことは確かだ。

「高校生活を過ごせば、何か見つかるんじゃないかって。戦いだけじゃない僕の何かを」

「そうだね。私も手伝うから。お兄ちゃんの道を」

「諸君！　今日から一年間、武術訓練の教官となる岩城だ！　一年間で貴様らを最低限の戦闘が出来るように鍛えてやる！　返事は！」

『ありがとうございます！』

僕以外の全員の声が響き合う。

完全に忘れていたけれど、もうそんな時期か。戦場にいたらわかることもわからないかな。

「声が小さい！」

『ありがとうございます！！』

十分に声は大きかったと思うけど、どうやらこれがこの授業の特色らしい。ただ、戦場でそんな大きな声を出せば敵に見つかるから意味がない。

「現在、世界は大きな脅威と立ち向かっている。もし、そいつらと日本が戦うことになれば、国民総動員で奴らを倒さなければならない。この意味がわかるな！？　この武術訓練が日本を救うのだ！」

わかっていないのはこの教師だろう。

国民総動員で異形達を倒せるなら、今頃、異形は駆逐されて存在していないだろう。

特に、人口の多い中国で壊滅させられるに違いない。それが出来ないから脅威に立たされいるのだ。国民総動員でどうにか出来る敵でもないのに。

「そこのお前、俺の言葉に不満そうだな。唯一の学生服の分際で。武術訓練を受けるつもりはないのか！」

どうやら表情に出ていたらしい。教師が僕を指差している。

とりあえず、僕は小さく溜息をついた。

「国民総動員で異形が倒せるなら、今頃世界は平和になっているよ。こんな無駄なことをするくらいなら銃器の練習をした方がよっぽど

ましだよ」

武術だけで勝てるほど甘くはない。僕が戦えるのは圧倒的な力を持つ僕のスキルだからこそ。

異形は並大抵の動物じゃない。それを知っているから僕は言う。

「そうか。貴様は校庭を走ってこい。トラックを１００周だ！　わかったか！？」

「速度は？」

「全速力に決まっているだろうが！」

トラックは一周３００ｍほどだから３０ｋｍか。そんなに長いというわけじゃないか。

僕は軽く呆れたように息を吐いて武道館から外に出た。校庭には誰もいないから走りやすい。

「ライド、『疾風迅雷』」

全速力で走れば天変地異を巻き起こす上にトラックをまともに走れない。だから、速度は大体秒速３ｋｍほどでいいだろう。

大気を操り衝撃波で校舎が気づかないように気を配る。そして、僕は地面を蹴った。

『疾風迅雷』特有の時間が引き延ばされる感覚。一秒が何十分にも変わったような感じだ。ただ、息の速度や足の速さは変わらない。

あくまで、知覚する時間が伸びているだけ。

『疾風迅雷』の力でトラックを走り回る。感覚が引き延ばされるのはとても便利だ。ただ、上限があって、秒速５ｋｍが限界。時速に直せば凄まじいことになるが、それが限界だ。

ただ、それをすれば止まることはほとんど出来ない。実際に、それを使った時は海を走る時くらいだ。もちろん、頑張って波を立てないようにするのが大変だった。

他人の目から見ればどう動いていたかわからないだろう。だから、僕は足を止めた。

「ダウン。よし、終了っと」

１００周が終わって僕は武道館に向かって歩き出した。戻ったら何を言われるかわかるけど、走ったものは仕方ない。

僕は小さく溜息をついて武道館に入る。そこでは、麻耶が先生に投げ飛ばされていた。

「ライド。『疾風迅雷』」

無意識に拳を握りしめていた。そして、地面を蹴る。

床に叩きつけられそうになった麻耶を受け止めて僕は投げ飛ばした相手を睨みつけた。

「お兄ちゃん」

「貴様！　１００周を終わらせたのか！？」

「ああ。麻耶に何をした」

麻耶を床に下ろして睨みつける。拳を握りしめて。

「その小娘が刃向かってきたからだ！　武術訓練の教官に刃向かえばどうなるか体験してもらおうと思ってな！」

確かに教師の実力は只者じゃないだろう。だが、麻耶が投げ飛ばされるわけがない。つまり、不意をつかれたに違いない。

僕は小さく溜息をついた。

「別に僕が何を言われても我慢出来る。だけど、麻耶に危害を加えるつもりなら容赦はしない」

「お兄ちゃん、私が先生に文句を言ったからだよ。だから、私が」

「そうだとしても、投げ飛ばしたのは許せない」

僕は一歩を踏み出す。

「力で押さえつけても何も解決しない。それに、無駄な授業でそんなことをする意味がない」

「子供の分際で。戦場を知っているか？　最前線を知っているか？　そこで行われている地獄を知っているか？　知らないだろ？　なら、黙れ」

戦場は知っている。一人一軍（ワンマンアーミー）になってからよくいたから。
最前線は知っている。僕は最前線より前でよく戦っているから。
それらで行われている地獄は知っている。守れなかったたくさんの人達と一緒に。

「わかった。一度、ぶん殴ってやる」

「出来るとでも思っているのか？」

そう先生が笑みを浮かべた瞬間、僕の拳は先生の頬を殴りつけていた。先生が床に倒れて転がる。

「ライド。『地縛失星』。お前が知っている世界はまだ生ぬるいよ。本当の地獄を知らないくせに語っているんじゃないよ」

「貴様。教官に手を上げるとはいい度胸じゃないか。上下関係を教えてやる」

僕は小さく溜息をついた。溜息をついて、

「だったら、実力の差を思い知らせてやるよ」

「前代未聞だよね」

僕は隣に座っている麻耶に向かって尋ねた。

「前代未聞通り越していると思うよ。戦場返りの教官を瞬殺のフルボッコにするなんて。お兄ちゃんの強さが見れたから良かったけど」

「あれでも手加減したけどね」

むしろ、手加減しなければ確実に殺していた。『地縛失星』はそれほどに強力だ。高層ビルを投げ飛ばせたこともあるし。

確かにあの教師は強かった。スキル無しなら勝てるかどうかは五分。戦場返りもだてじゃない。ただ、相手が悪かった。

「停学で済むと思う？」

「退学だと思うよ」

今期初登校初授業で不祥事を起こすなんて、確実に怒られるよね。うん、絶対に怒られる。

はあ、ついに高校も退学か。

僕は今いる学園長室を見渡した。狭間学園の学園長室だからかかなり豪華だ。あまりに豪華すぎて虫酸が走る。

学園長室のドアが開き、そこから学園長と多分高校の校長が入ってきた。そして、僕達の向かいの椅子に座る。

「白百合京夜君。君は我が校始まって以来の不祥事を起こした」

でしょうね。

「しかし、君の保護は政府から通達されていてね、人類のためにと言われているよ。だけどね、私達は君を甘やかさない。白百合京夜君は武術訓練の教官になってもらい」

「ちょっと待った」

今、何て言いました？

「教官？　僕が？」

「ああ。君のせいで武術訓練の教官が病院送りになったのでね、その代わりだよ」

その代わりと言われても、僕は武術訓練自体に疑問を持っている。持っているからこそ、一番武術訓練の教官に相応しくない。

「武術訓練は無意味なもの。最前線に出て異形と戦っていたらわかるけど、武術訓練はいらないと思います」

「君は国民総動員という言葉を聞いたことがないのかね？」

こいつも国民総動員か。何度も考えるが、国民総動員が出来て真っ正面から戦えて異形を撃退出来るならいろいろな国がそうしている。

正直に言って、国民総動員自体が間違っている。

「国民総動員は意味のないものです」

「君は非国民というわけか」

こういう戦争中ではよくある話だ。国の方針に従わないなら非国民として差別する。そうすることで味方をたくさん作ることが出来る。

僕は小さく溜息をついた。

「国民総動員する隙があるなら、ハイゼンベルク要塞でも万里の長城でも救援部隊を送ればいい。今の戦線が崩壊すればアジア、オセアニアの人類は確実に滅亡する。アメリカも危ないだろうな」

「人類が滅亡する？　何をバカな話を。君がいれば世界を救えるのだろう？」

「僕の力で世界を救えるなら、もう救っている」

救えていないから今の世界がある。こいつらは世界の情勢が何らわかっていない。

平和な場所にいるからこその言葉は今の僕からすればただイラつかせるだけだ。あの惨状を知らないくせに。

いつの間にか握りしめていた拳の上に麻耶の手が重ねられる。そして、麻耶は小さく首を横に振った。

「お兄ちゃん、大丈夫だよ」

「ごめん。学園長。武術訓練の教官の件はお断りさせていただきます。今の僕が武術訓練をやったところで何の価値のないものにしかなりません」

「退学になりたいのかね？」

「覚悟は決めています」

僕は真っ直ぐ学園長の目を見た。すると、学園長がフッと笑みを浮かべ、校長と視線を合わせた。

「噂以上の少年ですな」

「さようで。この状況なら処分はあれで決定かと」

僕と麻耶は完全に固まっている。そして、学園長が立ち上がり、ドアを開けた。

「えっ？」

そこにいた人物を見て僕は固まっていた。だって、ここにいるはずのない人物がそこにいたのだから。

リーズイット・エレナント。僕のような親しい人はリズィと呼ぶ。

「なんでここにいるのさ」

「軍本部からの命令じゃ。魔術器の開発が大詰めじゃから安全な場所で開発しろと。まあ、他の若手を育てたいというところじゃな」

そう言えば、リズィってノンキャリアだっけ。戦場であっという間に戦果を上げて、嫌がらせのような最前線での左遷でもすぐにトンボ返りしたって噂があるし。

科学者としても優秀なんだよな。まさに天才だよ。僕が言うのもおかしいかもしれないけど。

「白百合京夜君はエレナント先生の補助をして欲しい。エレナント先生は新しい武術訓練の教官だ」

その言葉に麻耶の手に力が入るのがわかった。リズィは最前線で指揮するぐらいのエリート。しかも、ノンキャリア。この年齢でここまで上がったということは様々な訓練に耐えたということだ。

武術訓練のレベルが跳ね上がる。そう感じるだろう。

「というか、前任は？」

「岩城のことか？　大丈夫じゃ。昔に一緒に戦ったことがあっての、その貸しを返してもらっただけじゃ」

世界って狭いよね。

「エレナント先生は半年ほどここにいるつもりらしい。エレナント先生、困ったことがあれば白百合京夜君と白百合麻耶さんの二人に相談してください。二人なら年も近いので」

年が近いと言っても、近いのは僕だけだ。麻耶とは１０以上離れているし。

「了解じゃ。二人とは知己じゃから相談もしやすい。二人を借りてよいか？」

「はい。白百合京夜君と白百合麻耶さんはエレナント先生の話が終わったら教室に向かうこと」

「はい」

僕と麻耶が返事をして立ち上がる。そして、リズィと一緒に学園長室から出た。

「なんでいるのさ」

「駄々をこねたら行かせてくれたのじゃ」

駄々こねたって。まあ、リズィはマスコットとして人気があると言っていたけど、おそらくはあれだろう。

「麻耶、先に教室に行ってくれないかな？」

「えっ？　うん。すぐに来てね」

事情を察知してくれたらさい麻耶が先に教室に向かって歩き出す。

僕は小さく溜息をついた。

「共同研究の依頼？」

「そうじゃな。この狭間の地にある研究所からじゃ。開発中の二つのデバイスである運命と七天の完成じゃな」

この二つは噂で聞いたことがある。

処理能力を極めて高めることがコンセプトのリズィのデバイスと違って、演算能力を極めて高めたことがコンセプトのものだ。

リズィは凡庸性で日本は特殊性を求めたということである。

「魔術器がこの地に5つか。アメリカが許可したのはやっぱり僕がいるから？」

「多分。万が一、デバイスが盗難にあったとしても、そなたの能力ならばすぐに犯人を見つけ出すことが出来る。それがわかっているからこそ共同研究を許可したのじゃろう」

でも、アメリカの本心は違うはずだ。あの国は一番であることを求めている。つまり、リズィと日本のコンセプトを合体させたデバイスを作るための技術が欲しいということだろう。

特殊性に凡庸性を高めたらどうなるかはわからない。

「やっぱりか。わかった。僕は教室に戻るよ。じゃ、また」

僕は歩き出した。歩き出して足を止めた。

「あれ？　僕の教室ってどこだっけ？」

「はぁ。私に先に言ってって言ったのはお兄ちゃんだよね」

結局、教室に辿り着けたのが次の休み時間。学校で迷っている僕を麻耶が見つけたからだ。

「誰だって迷うと思うよ。この大きさなら」

僕は小さく溜息をついて壁に張られている学園の地図を見た。

日本最大の敷地面積という謳い文句があるけど、実際は世界最大。異形が出るまではアルタミラにある研究所に併設されていた学園が世界最大だった。狭間学園が二番目。

だから、今は世界最大。もちろん、校舎だけでかくれんぼが普通に出来る。

「そうだよね。私も迷ったことがあるよ。でも、お兄ちゃんは探知も得意って聞いたことがあるけど」

「僕の場合はかなり特殊なやり方だから。こういう状況だと使えないよ。ところで、麻耶はどうやって僕を見つけたの？」

すると、麻耶はにっこり笑って、

「迷ったから」

その言葉に僕は完全に固まった。麻耶は笑っている。

「てへっ」

「てへっじゃないよ。迷ったっておかしいよね。麻耶はこの学園に所属しているし」

僕は小さく溜息をついて地図を見る。でも、そこに書かれている地図は全く知らない場所だ。

確か、冗談を抜きにして新入生の一部が学園内で遭難するらしい。僕も麻耶のその一部になったか。

「というか、あまりに広すぎだよね。この学園は。もう少し小さくても良かったのに」

「うん、それには賛成だね。地図を見る限り、ここは特殊棟かな」

全く聞いたことの無い名前だ。麻耶は生徒手帳を取り出して、学園の地図を見ている。

「ふむふむ。多分、あっちに行けばいいと思うよ」

「それで遭難したんだよね」

「そうなんだよね」

麻耶が遭難するのは無理もない。この場所はどうやら地図を見ながら移動すれば迷う場所らしい。そうでなければ地図を見る麻耶が迷うわけがない。

僕は小さく溜息をついた。溜息をついて拳を握りしめる。

「ライド。『零落白夜』」

僕の服装が戦闘服に変わる。色は白を基調として淡いピンクが波打

っている。

僕はしゃがみ込み、手のひらを床につけた。そして、目を瞑る。

見えて来たのは黒い空間。そこに描かれているのは巨大な魔術陣。通常の円形魔術陣ではなく球形魔術陣。それが黒い空間の中に鎮座している。

道を調べるための波長が飛ばないからなんとなくわかってはいたが、ここまで複雑怪奇な魔術陣が描かれているのを見たのは初めてだ。もしかしたら、何かの隠し部屋が存在するかもしれない。

『零落白夜』は僕の戦闘服の中では一番使い道のないものだ。有効に使う時の手段は、地雷原で地雷全てを見つける。

戦闘に関しては一番使えないけど、地球上に存在していた地雷原を全て見つけて破壊することをした以上、隠している者を見つける時にしか使わない。探偵向きの能力。

「お兄ちゃん、何かあったのかな？」

「うん。隠し部屋というより、封印された部屋かな。球形魔術陣が描かれている」

僕は目を瞑りながら答える。『零落白夜』の能力をさらに使用して魔術陣を細かく見ていく。魔術陣を構成する文字や線の特徴から自分の記憶の中にある知識と照らし合わせて行く。でも、これは、

「球形魔法陣じゃなくて、魔法球かな」

「魔法球？」

「先の時代。科学時代に存在した神の力を使えるとい言われる救世主達。その人たちが使った物が魔法であり、魔法球はその中でも一番ランクの高い者。世の理をも覆し、天変地異を鎮めるくらいの能力がある。そう伝えられているよ」

魔法というのはそれほどまでに強力なものだ。実際に魔法使いと戦ったことはないけれど、リズィのような魔術師と戦ったことはある。魔法の劣化能力。それでも、銃を相手にするよりもはるかに強い。もし、魔法使いがいるとしたなら、それこそ本当に救世主になるだろう。

僕のような力があったとしても。

「天変地異ということは、先の時代が終わる原因になった最終戦争のことかな？」

今の時代は俗に魔科学時代と呼ばれている。銃が主戦力にはなるが、魔術師も戦場では役にたつため、魔術と科学が戦場を支配するという意味で魔科学と呼ばれている。実際に、今の科学技術のほとんどは魔術の恩恵があるためあながち間違ってはいない。

今の時代の前にあった科学時代。その頃には戦車と呼ばれるものが存在し、戦場を蹂躙していたらしい。でも、今は銃の攻撃を防げるほどの装甲が確保できないため存在していない。戦闘機なるものも、サイズの関係から輸送機ぐらいしか引き継がれていない。旅客機はそのままらしいけど。

その科学時代が滅んだ理由が最終戦争と呼ばれる戦いだ。これは文

献にしか残っていないが、黒い大きな存在があらゆる国家が集まった軍隊を魔法で消滅させたらしい。それを倒したのが救世主と呼ばれる人達だ。

現在ではユーラシア大陸とヨーロッパ大陸を隔てるチェルノブイリ海峡が出来た理由が最終戦争の爪痕らしい。

救世主の魔法と各国が核兵器が黒い大きな存在にぶつかり、黒い大きな存在は救世主もろとも消滅した。この時に、黒い大きな存在の攻撃でチェルノブイリ海峡が出来上がったとされる。

だから、ユーラシア大陸を割るような力を魔法が持っているとも解釈が出来る。天変地異を起こせるなら天変地異を鎮めることもできると考えられたのだろう。

あっ、面白いものを発見した。

「かもね。実際に、最終戦争の後は、日の光が地上に届かなくなって、夏なのに冬が到来し、たくさんの人が餓死をしたと聞くよ。そこに現れた新たな救世主が新たな世界を作り出した。それが今の魔科学時代。でも、僕はそれが少し違うと思うんだ」

「何が違うの？　私はその話が本当だと学校で教えられたけど」

「最終戦争後の救世主の存在。今の世界の経済を握っているのはどことどこの国？」

「えっと、中国とアメリカ」

この二つの国は経済の中枢を握っているとされ、三番目に位置して

いる日本を大きく突き放している。そこから僕はふと思ったのだ。

「救世主の存在が、衣食住を提供した者なら？　人々は救世主とあがめてもおかしくない。何せ、あらゆる文献で世界の終わりと囁かれたくらいだからね。だから、救世主の存在は中国とアメリカの人だと思っている」

「ふと思ったんだけど、ここでその話をする理由は？」

僕は小さくため息をついて床から手を離し、目を開けて生徒手帳を取り出し、ページをめくる。そして、とあるページを開いて麻耶に向けた。そこに書かれているのは学園の成り立ち。

「狭間学園を作り出したのは日本だけど、出資をしたのが中国とアメリカ。これは、あまりに不自然じゃないかな？」

「もしかして、お兄ちゃんがこの学園を選んだ理由って」

「さあね」

僕は軽く肩をすくめて生徒手帳を返してもらう。そして、そのまま壁に手をついた。

「とりあえず、面白い部屋は見つけたからそれをお披露目するよ」

僕は拳を握りしめた。

「ライド。『地縛失星』」

そして、掌に力を込める。すると、壁がもろく崩れ落ちた。そこに

あるのは奇妙な空洞。真っ暗な空洞だ。

「ライド。『光翼天破』」

服の色が変わる。『地縛失星』から『光翼天破』へ。黒から鮮やかな青へ変わる。水色というべきだろうか。そこまで見事に鮮やかな色。

「入ってみよう」

「あう。先生に怒られないかな」

多分、怒られるだろうな。今度こそ退学かも。でも、ここに僕が一番求めているものがあるなら。それが存在するなら僕は見つけたい。

この世界を救える可能性だってあるから。

「さてと、光よ。なっ」

僕の掌に光が生まれて部屋全体を照らし出す。そこにあったものを見た瞬間、麻耶が悲鳴をあげそうになった。だけど、その声を何とかとどめている。

そこにあったのは、骨の山。見る限り、確実に人の骨ばかりしかない。ただ、そのほとんどが何かによって喰われている。

「お兄ちゃん」

「麻耶、僕の手をしっかり握って」

僕は周囲を見渡す。だが、何も見当たらない。最初から何もいなかったかのように。あるのは骨の山。

僕は骨の山に近づいた。麻耶は必死に手を繋いでくれているがやはり抵抗があるらしく、若干の抵抗がある。そして、僕はその一つを手に取った。

「この骨。麻耶、ちょっと見て」

「ううっ。わ、わかったよ。えっと、あれ？　人の骨ってこんなに空洞があるの？」

「ない」

僕達が知るような教科書の内容では絶対に書かれていない骨の薄さ。ここにはそれがある。まるで、栄養失調の人達を放り込んだように。又は、何らかの病気か。

確実にわかるのは、何かによって喰われていたことだけ。

「この部屋の中なるのは骨だけ見たいだね。天井には、何もないや」

「お兄ちゃん、早くここから出ようよ。こういう時って大抵入り口が閉まるし」

「大丈夫大丈夫」

例え、どんなに頑固な要塞になったとしても、僕の本気ならそんな障害物は苦にならない。簡単に破壊できるとわかっているから。

「とりあえず、リズィには連絡した方がいいかな」

「そ、そうだよね。お兄ちゃん、早く」

「はあ、了解」

僕は麻耶の手を引っ張って歩き出す。確か、こういう状況って昔にあったっけ。泣いている麻耶の手を僕が握って境内を歩いている記憶。懐かしいな。こういう風に歩くことが。

「お兄ちゃん」

「ん？　何？」

「なんでもない」

そういう麻耶の声はどことなくうれしそうだった。でも、一つ忘れている。

どうやってこの迷宮から脱出しよう。

外に出た時、そこには夕日が燦々と輝いていた。

もちろん、僕達二人は呆然としながらその夕日を見ている。

「夕日だね」

「うん。赤いよね。お兄ちゃんの言うように赤いよね。ところで、今何時かな？」

僕は近くにあった時計を見た。時計を見て、小さくため息をつく。

「午後五時」

「帰ろうよ」

「そうだね」

僕と麻耶は同時にため息をついて歩き出した。

今日の教訓。常に誰かと一緒にいよう。もう、迷いたくない。

もちろん、骨の山を発見した現場がどこかなんてわからないから存在だけでも知らせておかないと。

とりあえず、帰ったら寝よう。

第二話　狭間学園（後書き）

次の話から普通に学園生活です。いつ更新するかわかりませんが。

第三話　悠遠の翼（前書き）

かなり久しぶりの投稿です。悠遠の翼について「新たな未来を求めて」で出してから書きたかったのでこうなりました。

第三話　悠遠の翼

僕は本当にぐっすり眠った。

迷宮探索はかなり疲れたし、脱出するのに凄まじい時間がかかったからもある。結局は、いくつかの壁をぶち破ったけど。

ぐっすり眠った。本当にぐっすり眠った。こんなに眠ったのはいつ以来だろう。うん、眠りすぎて、

「そなた、聞いておるのか？」

麻耶共々遅刻した僕達は武道館の床の上で正座をしていた。ありがたい話をしてくれるのはもちろんリズィだ。

「聞いていないよ」

「一度燃やされたいのかの？」

リズィの手のひらに炎が生まれる。リズィのレベルだとこれくらいは簡単だ。でも、普通は難しい。

麻耶が小さく溜息をつく。

「リズィさんが怒っているのは、あの部屋を見つけたことをすぐに報告しなかったから。お兄ちゃんも怒られているんだから、ちゃんと話を聞いてよ」

「ごめん。あの後は疲れていて」

「そなたが疲れるとなると、よっぽどのことだったのじゃな。まあ、よい」

リズィは小さく溜息をついたままポケットからペンダントを取り出した。そして、それを僕に向かって放り投げてくる。

僕はそれを受け取ってペンダントを見た。

「これは？」

「そなたをここに連れてきたのはこれが理由じゃ。アメリカで作られた魔術器の試作一号。形態はナックル。そなたに使って欲しくての」

僕はペンダントを軽く握りしめて小さく息を吐いた。

「確か、ライド」

ペンダントが一瞬にして消え去り、代わりに僕の腕にナックルが身につけられていた。見た目はただのナックルだけど、手の甲にペンダントが付けられている。

重さは軽く、使い易さはある。

「材質は？」

「８６魔鉄じゃな。魔術器試作一号器。名前はそなたが」

「ダウン。そうだね、栄光」

僕はナックルをペンダントの形態に戻しながら小さく頷いた。

「栄光はどうかな？」

「ふむ。まあ、よいじゃろ」

一応、リズィも納得してくれたらしい。というか、８６魔鉄のものが今の状況で用意出来るなんて。

「お兄ちゃん。それは何？」

「ん？　そっか。麻耶は知らないのか。魔術器だよ。人類側の最終兵器の一つ。実戦で調整したいところだけど、最前線に行く気にもならないか」

魔術器は基本的に魔術をサポートするものだ。僕の場合は魔術のカテゴリーに入るかわからないけど、魔術の理には少なくともかすっているはずだ。だから、能力の増加が見込める。

麻耶が珍しそうにペンダントを手に取りながらよく見つめる。

「リズィさんはこれを作っているの？」

「そうじゃな。試作型ではなく本物をの。しかし、少しだけ行き詰っているといころじゃ」

「そうなの？」

その話は初耳だ。今まで話を聞いている限り、そのような感じは全

くなかった。むしろ、順調に進んでいたようにしか思えない。だから、その言葉に僕は純粋の驚いていた。

リズィは腕を横に振る。たったそれだけで空中に画面が現れた。確か、投影魔術だよね。

「今躓いているのは魔術器のコアとなる部分じゃ。隼丸はもうほとんど完成なのじゃが、アル・アジフとレヴァンティンがの。出力と処理能力がどうしても理論値を叩き出せぬ。理論上ならノルマはクリアしているはずなのじゃが」

レヴァンティンの出力機関はかなり特殊だから出力という点では十分に可能なラインに入っているはずだ。それはアル・アジフも同じ。隼丸は扱いやすさをコンセプトとして設計しているため、出力は言うほど高くない。高くはないが、扱いやすさはかなりのレベルに達すると考えられている。しかし、レヴァンティンとアル・アジフは使いてを選ぶ。アル・アジフはリズィが持つと思うけど。

「確かにね。あの異次元機関なら出力という点では十二分の威力があるから問題は処理能力。ＡＩのレベルを上げたらどうかな？」

「それは難しいの。技術も時間もない。どうすればいいかわからぬ」

「人の人格を付けてみるとか？」

麻耶の何気ない一言にリズィの動きが止まった。

確かに、それは盲点だ。人の人格を付けることは技術的には難しくないがコスト面が半端なく高く、一からＡＩを作り出して使った方

が費用対戦果で圧倒的な答えを出すことが出来る。

こんな状況でなりふり構っていられないから確かにありだ。

「ありじゃな。研究所に連絡を取る。少し待っておれ」

その言葉と共にリズィが武道館の外に向かって歩いていく。僕は正座を解きながらその場に座り込んだ。

「やっぱり、一般人から出る考え方は僕達の考えの斜め上をいく時があるよ」

実際に麻耶が言うまで人の人格を植え付けるという行為は研究者の誰も考えなかった。

理由としてはやはり費用がかかること。そして、一部の人権団体から起きた反対運動だろう。そのため、それは考えることはなかった。

リズィだって同じだ。魔術師としても指揮官としても研究者としても優秀だが、そのことは考えていなかった。

「役に立てたら嬉しいんだけどね、なりふり構わずやるってことは、情勢はまずいってことを再認識することになるから」

情勢が悪いということは直接的には話していない。でも、麻耶なら何となく察しているだろうとは思っていた。

一人一軍（ワンマンアーミー）として出る半年後の決戦。それに負ければ完全に後がない。いや、後がないというほどじゃない。アジアから人類は滅ぶ。

そして、アメリカでもだんだん蹂躙されて近い将来消えてなくなるだろう。

「一人一軍（ワンマンアーミー）として最後に何が出来るか、考えておかないとね」

僕のその声は本当に小さかった。麻耶が不思議そうに首を傾げたくらいだ。

一人一軍（ワンマンアーミー）として最後に何が出来るか。この栄光と共に世界を救えるかどうか。

「人一人が背負うには重すぎるよ」

でも、背負わないといけない。いくらリズィ達が開発しているとはいえ僕のような一人一軍（ワンマンアーミー）みたいな戦闘力は出ないだろう。

出たなら冗談抜きで世界を救える。でも、それはありえない。

「お兄ちゃん」

「ごめん。ちょっと考えていた」

戦場のことを。テレビが逐一に戦線を放送してくれているから正直に言って悠長にここにいられる。でも、決戦が始まればここにはなかなか帰って来られない。

今は今だけを考えよう。麻耶と一緒に暮らす生活を。

「京夜、少しいいかの？」

武道館の入り口からリズィが顔だけ出して僕を呼んでくる。僕は頷いて立ち上がった。

「ちょっと行ってくるよ」

「うん」

心配した表情の麻耶の頭を撫でて僕はリズィのところに軽く走っていく。そして、武道館から出た。

「手短にね」

「相変わらずのシスコンじゃな」

リズィが呆れたように言うけどこれだけは変えることは出来ない。僕にとって一番大事なのは麻耶だから。

「人質に取られたら何も出来なさそうじゃな」

「多分、犯人達が酷い目にあうよ」

これは冗談ではない。麻耶の戦闘能力をリズィは知らないからこそ首を傾げているが、本当の戦闘能力を知ればそんな冗談すら言えない。

「まあ、よい。本題じゃ。そなたに研究所の方から見て欲しいものと会って欲しい人があっての。メンバーも揃っておるから今からついて来て欲しいのじゃが」

「今から？　放課後はダメかな？」

「出来れば今から。もしかしたら、第二の一人一軍（ワンマンアーミー）になるかもしれないのでの」

「わかった」

僕は頷いていた。もし、そんな存在が本当にあるとするなら僕は見てみたい。一人一軍（ワンマンアーミー）として活躍出来るかどうかを。

でも、一つの問題点がある。

「麻耶、どうしようか」

僕は小さく溜息をついて武道館に戻った。麻耶に殴られることを覚悟して。

「麻耶は一体どのような体をしておるのじゃ？」

車の中、後部座席に座るリズィの横で僕は窓に頭を当てたまま真っ白に燃え尽きていた。リズィは呆れたように僕を見てる。

あの後、麻耶に事情を説明した瞬間に僕は麻耶に投げられた。柔道で使うような投げるという意味じゃない。文字通り投擲だった。襟元を掴まれてそのまま勢いよく走って全身の力で僕を投げた。おかげで僕は真っ白に燃え尽きている。

「そなたの言った犯人が大変なことになるというのはあながち間違ってはおらんみたいじゃな」

「うん。麻耶は昔から力持ちだったから。僕なんて未だに麻耶に刃向えないよ」

「そなたが本気を出せばいいのではないかの？」

つまり、一人一軍（ワンマンアーミー）としての実力。ただ、それは一回やったことがある。

「義母さんにフライパンで殴られて止められた」

リズィが何とも言えない表情になる。麻耶も十分に化け物なのだが、義母さんも十分にすごい。何が凄いというなら気配が全くしない。本当にいつの間にかいるのだ。

そのおかげで何度思春期男子の大切な宝物集を見ている時に覗かれたことか。

本音を言うなら本気で自殺したくなるレベル。だって、義母さんも見た感想を言うのだから。

「白百合家は有名じゃからな。本家の方は異能の持ち主が多いと聞くしの」

「僕も白百合家の血が通っているとも言われるし」

このことに関しては科学的に否定されている。麻耶が隠して僕と血縁関係がないか調べたからだ。結果は白。完全な赤の他人だと僕に

言った時はどう反応しようか困ったくらいだ。

確かに、白百合家は異能の力がある。でも、その中身を知ったなら正直に言って反吐が出るくらいだ。

「どうやれば異能の力を増やせるか」

「一人の特異児を使った一家による近親相姦。白百合家はそれでそこまでになったよ」

これは僕が知る真実。

僕がいる家、義母さんは麻耶は白百合本家からは勘当された身分らしい。名を名乗ることは許されるが分家であると言う感じだ。その理由は白百合家以外の男と義母さんが結婚したから。

「正直に言って、僕が養子になった時、白百合家本家に戻る話が出たくらいだからね」

「一人一軍（ワンマンアーミー）を確保して子孫をより強くするためじゃな」

「うん。そうだと思う」

僕ははっきり否定した。力づくで従わせようとする奴らも力づくでねじ伏せた。一人一軍（ワンマンアーミー）の力は無敵に近い。

もし、白百合家によって僕が買い殺しにされたなら、白百合家は世界を手に入れる可能性だってあったはずだ。

「あの家は狂っている。自分達のためなら他人を不幸にしてもいい

と平気で思っている。僕も麻耶も絶対に反対だ。あんな家にいるのは」

「そうじゃな。我も、そなたと出会える時間が減るのは少し惜しい」

リズィが顔を赤らめて言う。どう反応すればいいか全く分からない。

「そろそろ着くみたいだね」

僕は話を変えるために周囲の風景を見て言った。すでに周囲には警備員の姿がある、その武装は最前線さながらだ。

この研究所がどれだけ大切なものであるかがわかる。

そして、車が止まった。

リズィが車を降りて手を差し伸べてくる。

「ようこそ。人類を救う希望の研究所に」

狭間研究所。

日本にある最大の研究所で半年後に向けた決戦兵器の開発が極めて活発な場所だ。実際、中に入ってみるとたくさんの技術者や科学者が躍起になって動き回っている。

期間は半年。なんとしてでも兵器を作り上げないといけないから。

「こっちじゃ」

僕はリズィに案内されてエレベーターに乗った。すると、リズィが操作盤のところにあったカード認証機にカードキーを認証させる。すると、階のボタンを押すことなくエレベーターが動き出した。

リズィがカードキーをポケットの中に無造作に入れる。

「上の階層では一般兵が使う武器が開発されていての、資源の少ない中でどうすれば出来るか試行錯誤中じゃ」

「そうなんだ。上の階層ってことは下の階層には」

「そうじゃ。魔術器及びフュリアスの開発を行っておる」

「フュリアス？」

確か、英語で怒り的な感じの意味だったはずだ。でも、そんな名前のものは聞いたことがないけど。

そして、エレベーターが開く。開いたその先には巨大な人型の機械があった。

ずんぐりとした巨大な体。相撲取りを想像した方が説明が早いかもしれない。その体型を真似て機械で作ったならこうなるであろう姿。腰には下を向いた砲。肩には巨大な戦車砲みたいなものがついている。そして、その背中にある箱状のものはおそらくバッテリーだろう。

「これ、は？」

「ストライクバースト。移動要塞をコンセプトに作り上げたフュリアス一号機じゃ」

「冗談抜きで機動戦士だったんだ。でも、どうしてそんなネーミング？」

確か、それによく似た名前のものがあったはずだ。まあ、それが関係するかどうかは知らないけれど。

「ストライク。打つや叩くと言う意味じゃな。バーストは爆発する。これは聞いた話じゃが、強力な砲撃で敵の戦線に穴を空けるために作られたものじゃ」

「敵の戦線を打ち、爆風によって穴をあける。だから、ストライクバーストね。なんだか納得できたよ。でも、これって使えるの？」

「システム面もほとんど完成しておる。後は動作訓練だけじゃ。まあ、そなたに見せたかったのはこれじゃないのだがの？」

リズィが歩き出す。僕はその後を追って歩き出した。リズィの向かう先にあったのはこれまた人型の機会。ただし、ストライクバーストとは違い、こちらは文字通り巷で騒がれている言葉を体現したようなものだ。

ただ、それ以外に武装はない。その横に五本の棒が立てかけられている。

「リズィ、あれは？」

「あれがそなたにみせたかったものじゃ」

なんだろう。どこかで見たことのある形だ。確か、

「オーバーテクノロジー」

「正解じゃ。知っておろう。沖縄沖で見つかった年代不明のエネルギー体のことを」

テレビで取り上げられていたのを見たことがある。沖縄県沖で見つかった謎の棒状の物体。それは莫大なエネルギー、それこそ原子力発電程度じゃ桁違いとなるエネルギーを生み出すものが見つかった。それも、五本も。

科学時代の遺産とされ、アメリカ、中国、ロシア、インドにそれぞれ一本ずつ提供されたはずだった。でも、ここにそのずべ手がある。

「どういうこと？」

「各国から返してもらったものじゃ。日本が開発しようとしている最強のフュリアス。一人一軍（ワンマンアーミー）ならぬ一機一軍（ワンマンアーミー）になる可能性のある機体。名前は悠遠」

「どういう意味？」

そんな言葉聞いたことがない。一応、これでも日本語はちゃんとやっているはずだ。多分。

「空間的、時間的に遠いことを表す言葉じゃな。五つのエネルギー体。その全てを使う贅沢な機体じゃ。そのエネルギー体が生まれた時代から取って悠遠」

「遠い過去に作られたもの利用した機体、というわけね。でも、どうして一機一軍（ワンマンアーミー）？　そんなに強いものなの？」

「そうじゃな。これはまだ分かっておらぬ部分が多いのじゃが、それぞれのエネルギー体には特殊能力があるのじゃ。我らはそれを悠遠の翼と呼んでおる」

特殊能力ということは、五つあるのか。その五つを上手く利用して戦うとするなら、確かに一機一軍（ワンマンアーミー）を名乗る理由にはなる。

僕はたくさんの戦闘服を瞬時に変えることで無敵に近い戦闘能力を出せる一人一軍（ワンマンアーミー）なのだから。まあ、その分、それぞれの弱点が一杯だけど。もし、器用に全てをこなせる人がいるなら、もしかしたら、僕は簡単に負けるに違いない。

「その悠遠の翼を積み込めば、悠遠は最強のフュリアスとして大空を舞うはずじゃ」

「そうだね。確かに、そんな凄いものを使っているなら僕が苦手な空の戦いでも主導権が握れそうだよ。これが見せたいものなんだよね。会わせたい人って？」

「京夜」

リズィが真剣な表情になる。僕は思わず喉を鳴らした。

「そなたが」

そこで一回言葉を切り、僕の目をまっすぐ見つめてくる。一体何を言われるのだろうか。

「ロリコンでないことを祈っておる」

「僕をなんだと思っているのさ！」

期待して本気で損をした。というか、僕はシスコンではあるけどロリコンでは断じてない。絶対にない。絶対にあり得ない。年の差は、まあ気にしないけど僕は純粋なシスコンだ。

はっ、暴走してしまった。

「そなたはシスコンじゃろ。もしかしたら、ロリコンだと」

「シスコンは認めるよ。麻耶のことが大好きだからね。でも、その扱いはあんまりだと思うんだけど」

「そうじゃな。まあ、よい」

「よくないけど、もういいや」

僕は諦めてため息をついた。リズィがクスッと笑って歩き出す。その後を追いかけるように僕はゆっくり歩き出した。

周囲の光景を見ながら歩く。

ストライクバースト、悠遠の他にもう一機のフュリアスが開発され

ているようだった。ただ、それはほとんど未完成らしく、足しか出来上がっていない。

「気になるかの？」

「まあね。だって、下半身だけだよ」

「淫らな想像はするのではないぞ？」

「リズィって本当に僕より年上？」

本気で疑いたくなってきた。というか、今の発言のどこにそんな要素があったかわからない。

僕が小さくため息をつくと、リズィがちょうど立ち止まっていた。ちょうど、部屋の前で。どうやらノックしていたらしく、中から「はぁーい」という女の子の声が聞こえる。

そして、ドアが開いた。

「リズィさん。あれ？　そちらの方は？」

ドアが開いた先にいたのは女の子。というか、幼すぎないか？

年齢は大体１０歳を超えたくらい。髪の毛は黒で長さは肩にかかるくらい。瞳も黒。肌は黄色人種特有の色をしている。身長はリズィとあまり変わらない。リズィの背が低いだけだけど。

確かに可愛らしいけど、ロリコンではない僕にとってはその程度だ。僕はロリコンじゃない。

「優奈、こやつが白百合京夜。一人一軍（ワンマンアーミー）じゃ」

「一人一軍（ワンマンアーミー）！？」

優奈と呼ばれた女の子が部屋に戻る。僕がポカンとしていると扉が開き優奈が色紙とペンを僕に向けて差し出していた。

「サインください！」

僕は苦笑しながらサインに応じる。学校の中でもこういうことがあったからね。

リズィはサインに応じている僕を意外そうな顔で見ている。

「慣れた手つきじゃな」

「昨日さんざん書いたからね」

主にクラスメートから。まあ、教室にはほとんどいなかったけど。

「わぁ、一人一軍（ワンマンアーミー）のサイン。自慢出来るな」

優奈は嬉しそうに色紙を抱いている。僕はリズィを見た。

「この子が？」

「そうじゃ。悠遠のパイロットである真柴優奈じゃ」

「真柴優奈です。今年で13歳です」

「パイロット？」
僕は目を疑った。まだ、１３歳なのにパイロットなんて普通はありえない。どうして彼女がパイロットなんかに。
「パイロットとしては理由が」
その瞬間、周囲がけたたましい音と共に周囲が真っ赤に染まった。
僕は拳を握りしめる。
「ライド、『地縛失星』」
すかさず服装を変える。赤いということは緊急の何かのはずだ。この研究所は兵器が大量に開発されているから襲撃されてもおかしくない。
世の中には反体制派なんていくらでもいるから。
「優奈は部屋に入っておれ。我と京夜は上に上がる」
「わ、わかりました。か、隠れていますね」
優奈が部屋の中に戻る。それを確認した僕とリズィはエレベーターに向かって走り出した。
「警備員というより防衛隊の数は？」
「基本的には自衛隊じゃ。アメリカ陸軍もおる」

「そっか」

自衛隊は戦力としてはあまり頼りにならない。全ての国家で一番異形との戦いに関わっていない。だから、心配だ。

エレベーターに到達したリズィはカードキーを認証機に通そうとした瞬間、地面が激しく揺れた。

リズィが体勢を崩し倒れるけど、僕は慌ててリズィを受け止める。

「大丈夫？」

「すまぬ。じゃが、今のは」

リズィの言葉を遮るように前方の天井一部が崩れた。

そこから現れたのは異形。ハイゼンベルク近くのあの滅びた街で出会ったヒト型の異形。

僕は地面を蹴った。そして、その異形に飛びかかり側頭葉に振り上げたかかとを叩きつける。確かな手応えと共に異形を頭から床に叩きつけ、大きく跳ねる。

さらに飛び上がって跳ねた異形にかかとを落とす。　異形の体が床にめり込んだ。

「これなら」

「後ろじゃ！」

リズィの声。振り返る隙はなかった。
強烈な衝撃と共に僕の体が吹き飛ばされる。『地縛失星』の上からダメージを与えられたことに僕は驚愕していた。
すぐに体勢を戻した僕の目の前に掌が迫っていた。力任せにその掌を上に弾き、肘を叩き込む。
だが、肘は受け止められた。床にめり込ませたはずのヒト型の異形によって。
「ヤハリ、キカナイ」
膠着状態になった僕に異形が話しかける。僕は大きく後ろに下がった。
「どうしてここにいる!?」
「ミツケタ」
だが、異形は僕を見ていなかった。見ているのはストライクバーストではなく悠遠の体。
いや、悠遠の翼の方か。
異形が動く。『地縛失星』の速度では追いつけない速度で。僕は拳を握りしめた。
「ライド、『疾風迅雷』」

だから、最速で異形を追いかけ、最速で肘を異形のわき腹に叩き込んだ。

「ライド、『地縛失星』」

そのまま速度を大きく原則させず拳を叩きつけた。異形の体を地面に叩きつけ、僕の足が天井につき、天井を勢いよく蹴った。

『地縛失星』の必殺技。全ての力を拳に集める。

「オーバーロード！」

全ての力を異形に叩きつけた。地面が大きく陥没する。

『地縛失星』のオーバーロードで砕けないものはない。そう思っていた。

異形の腕が伸びる。まだ生きていたことに僕は驚いて反応が遅れた。

異形の腕が僕の首を捉える。そのまま首を絞められる。

「かはっ」

『地縛失星』の弱点は締め技。いくら強力な攻撃力や鉄壁の防御を持っていてもこれには弱い。

「ジャマダ」

その言葉と共に僕は投げ飛ばされた。気づいた瞬間には何かにぶつ

かる。痛みはない。だけど、ぶつかったものは、悠遠の体だ。
僕が地面に落ちると同時に同じように落下している。悠遠の体の砕けた部品が。
「くっ、やられた」
僕は立ち上がった。異形は僕なんて見ていない。見ているのは悠遠だった。
異形は僕を、見ていない。ストライクバーストでもない。見ているのは部屋。優奈が隠れている部屋。
そこを見た異形が笑ったような気がした。
「ライド、『零落白夜』！」
僕は叫んだ。戦場では最も使い道のないもの。だけど、この時には使える。
一瞬で優奈が隠れている場所を探し出す。そして、僕は拳を握りしめて地面を蹴った。
「ライド、『地縛失星』！」
異形が動くより早く、僕は部屋の前に立った。異形はこの時ようやく僕を認識したようだった。
『ジャマヲスルナ』

ほとんど歯牙にもかけない様子からここまで持ってきた。後は完全に僕に注意を向けるだけ。

「そっちの都合には付き合ってられないからね。お前はここでたお」

視界から異形が消えた。僕は視線を下に向ける。そこにいたのは異形の姿。

『地縛失星』じゃ異形の姿を追えない。でも、

僕の体が異形の力に吹き飛ばされる。

異形の力には『地縛失星』にしか対処出来ない。

僕の体が壁を砕き、部屋の中を転がる。すぐさま立ち上がって優奈の位置を確認した。優奈は部屋の隅にある家具の影に縮こまって固まっている。

「後はないか」

僕は小さく呟いて拳を握りしめた。それと同時に部屋に入ってくる。

「ミツケタ」

その言葉に優奈の体がビクッと震えた。やはり、異形が狙っているのは悠遠とそのパイロットだ。

「ライド、『疾風迅雷』！」

『疾風迅雷』に変えた瞬間、全速力の膝蹴りが異形の頭を捉えた。

異形の体が吹き飛ぶ。

ここで気を抜いたらいけない。

「ライド、『炎熱光破』。オーバーロード！」

『炎熱光破』の最大出力。熱量を限界まで高めながら収束させプラズマ化した炎を一点に叩きつけるオーバーロード技。

熱量の塊が異形に突き刺さり爆発した。

周囲に漏れる熱量をさらに収束させ異形に叩き込む。

「これで」

終わったと思っていた。今まではあらゆる大型でも『炎熱光破』のオーバーロードで焼き尽くせなかった敵はいない。

でも、僕が気づいた時、異形の姿が横を駆け抜けていた。一直線に、優奈に向かって。

「ライド、『疾風迅雷』！　オーバーロード！」

振り返って加速した先には腕を振り上げた異形の姿。優奈は頭を抱えている。間に合わない。いや、間に合わせる。何のためのオーバーロードだ！

時間がゆっくりになる。周囲がスローモーションになる中、僕は加速しながらポケットのものを取り出した。

魔術器である栄光だ。

今日、リズィからもらったばかりのペンダント。それを使う。

「ライド！」

ペンダントを握りしめ、栄光を呼び出した。腕に身につくナックル。それを振り上げながら駆ける。

間に合え。間に合え。間に合え！　間に合え！！

振り下ろされた異形の腕を栄光で間一髪で弾き、そのまま異形に栄光を叩きつけた。

異形の体が後ろに下がる。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。間に合った」

栄光を身につけた拳を握りしめ、僕は異形を睨みつける。異形の視線は栄光に向いていた。

「キサマ、ナゼ、ジャマヲスル？」

「邪魔するさ。僕は守る」

もう、あんな悲劇を繰り返さない。

「一人一軍（ワンマンアーミー）の力があるからこそ、僕はみんなを守る。そのための力だ」

僕がそう言うと異形はフッと笑った。そして、背中を向ける。

「キサマニ、ツバサヲマカセル」

そして、異形の姿が忽然と消えた。まるで、元からそこにいなかったかのように。

「一体、何なんだ？」

僕は呆然と立ちつくした。その姿はリズィが援軍を連れて来るまでそのままであった。

第三話　悠遠の翼（後書き）

しばらくは一週間一話ペースで書いて行こうと思います。

第四話　謎

麻耶は一人で椅子の上でふてくされていた。

最初は先生も昨日いなくなったことを怒ろうとしたのだが、麻耶の態度が全く変わらず結局は諦めていた。

クラスメートの大半も麻耶に目を向けず机を微かに離している。唯一近づいているのは麻耶の前に座っているクラスメートだけだった。

「麻耶ちゃんは相変わらず兄さん大好きっ子だね」

「ぶー、お兄ちゃんがいない学校なんて楽しくないもん。ゆとりじゃない教育と一緒だよ」

「ゆとり教育はもう終わってるよ？」

ゆとり教育の期間を考えても、麻耶がそのゆとり教育の範囲には入っていない。

でも、今の麻耶にはそんなことは関係ないらしい。

「せっかくお兄ちゃんと一緒に学校だと思っていたのに」

「お兄さんかっこいいもんね。みんな噂をしているよ。もちろん、のんちゃんも」

麻耶が小さく溜息をついて前にいるクラスメートを見る。

「いい？　お兄ちゃんは私の恋人なんだよ。血は繋がっていないから、ちゃんとセックスだって出来るんだよ。だから、のんちゃんでもお兄ちゃんのことを思うのは許さないから」

「なはは。のんちゃんは百合少女だから男の人には興味がないのでした」

「ならいいや」

クラスメートの大半はいいのかよとツッコミを入れたい気分だったが、麻耶が未だにふてくされているため入れることが出来ない。

麻耶がキレたら誰も対処の方法がないからだ。多分、麻耶の目の前にいるクラスメート、柿山シノンを除いて。

麻耶は頬を机にくっつけた。

「ああ、愛しのお兄ちゃん。私なんかよりもリズィさんの方がいいんだ」

「そんなことはないと思うな。もしそうなら、のんちゃんのテクニックでメロメロにして捨ててあげるよ」

「のんちゃんのテクニックはすごいから本当にそうなりそう」

またクラスメートがツッコミを入れそうになるが、上記の理由から誰も入れることが出来ない。それは先生も同じだった。

授業中に平気で会話をする二人に先生は何も言えない。正確には一度口を出したのだが、麻耶の睨みつけによってカエルのごとく震え

たのだ。そして、完全に許している。

「でも、お兄さんがかっこいいのは本当だよね。あんなお兄さんがいたらのんちゃんもメロメロになるかも」

「うん。お兄ちゃんは本当にかっこいいんだよ。でも、精神的に弱いところがあって、疲れた時とか抱きついてくることがあるんだ。それを慰めてあげたら可愛い笑みでありがとうって言うんだよ。守ってあげたいと思わない？」

「ほうほう。そればのんちゃんの母性本能をくすぐりますね。今度お兄さんがいる時にのんちゃんはお邪魔していい？」

「いいよ。あっ、でも、お兄ちゃん忙しいからなかなか予定が合わないかも」

その言葉になははとシノンが笑う。それに対して先生も笑っていた。不気味な笑みで黒板につけているチョークをカタカタ鳴らしながら。クラスメートの大半は慣れている。慣れているが、今回はツッコミを入れたくてうずうずしていた。

「せっかくだからのんちゃんはお兄さんを誘惑しよう」

「むっ、駄目だよ。お兄ちゃんは私のものなんだよ」

「仕方ないな。だったら三人プレイでも」

「「「お前ら何の話をしているんだよ！」」」

我慢が出来ず何人かのクラスメートが声を揃えて尋ねていた。

「死者は無しじゃが、怪我人が多いの」

リズィがお茶を飲みながら報告書に目を通している。僕は隣に座っている優奈を見た。

優奈は僕の手を握りしめたまま僕に寄りかかって眠っている。さっきまで体が震えていたけど、安心したのか眠ってしまった。

「そなたのおかげじゃな。そなたがいなければ確実に死人が出ていた」

リズィの視線は優奈に向いていた。確かにそうだ。あの異形は優奈を狙っていた。それを僕が何とか食い止めた、ことになっているだろう。

でも、リズィにはちゃんと何が起きたかを話している。

「異形の狙いは何なのかな？」

「わからぬ。ハイゼンベルク近くで出会ったものと同じらしいの？」

「うん。ただ、今回は僕を歯牙にもかけなかったけど」

おかげで食い止めるのが精一杯だった。

『地縛失星』の弱点がもろに出た敵でもあるし。

「しかし、最後にそなたに言った言葉、翼を任せる、じゃったか？」

「うん。何も知らない人が訳せばね」

レイルー語はほとんど外国人が習いだした日本語にしか聞こえない。でも、その本来の意味はかなり難しい。

「基本的に名詞以外は日本語と同じなんだ。とても不思議なことにね。でも、名詞だけはもう一つの意味を持つことが多い。例えばツバサ。翼という意味でもあるけど、レイルー語でよく使われる意味は、希望」

僕の言葉にリズィが不思議そうに首を傾げた。

「つまり、異形はそなたに希望を任せると言ったのじゃな」

「うん。レイルー語ならね。そうだとしたら、奴の立ち位置がよく分からないんだ」

「ハイゼンベルク近くではそなたを狙い、今回は優奈を狙った。じゃが、そなたに阻まれて、希望を任せる、と」

「うん」

もし、あの異形が同一人物だとしたなら筋が通らない。僕を狙った時は、僕がたくさんの異形を簡単に、赤子の手をひねるように倒していたから危険だと判断されたのかもしれない。

でも、優奈を狙ったのは分からない。悠遠を狙ったなら理解出来るが、ストライクバーストが残されたのかが分からない。共通するのはワンマンアーミーくらいだけど。

「わけがわからぬ。異形が何をしたいのか、何をしようとしているのか」

「ところで、悠遠はどうなったの？」

「完全に壊された。まるで、巨大なハンマーに殴られたかのように の」

僕が勢いよくぶつけられたからって言えないよね。

「まあ、悠遠に関してはもう一つ作っておったからの」

「どういうこと？」

「最初はストライクバーストと同じ人型じゃったが、機動力を極めて高めた形にしようという話があっての、悠遠はもう一つ作られていたのじゃ」

「みんなが聞いたら大激怒だよね」

ただでさえ高価な鉄をふんだんに使うなんて贅沢すぎる。

まあ、おかげで助かった部分もあるけど。

「そなたが気にするほどではない。我ら技術陣が総力をあげればフユリアスの一機や二機は1ヶ月で作ってやるぞ」

「欠陥機体は止めてね」
本気でそうなりそうだ。
「わかっておる。ところで、そなたは学校に戻らなくていいのかの？　警備は二倍に増やしたから何とか時間は稼げると思うぞ」
「戻りたいのは山々なんだけどね、ほら」
僕は優奈が繋いでいる手を上げた。
がっちり繋がれて離れそうにもない。
「そなた、やはり、ロリコン」
「誰がロリコンだよ！　僕はシスコンだけどロリコンじゃないって言ってるよね！」
「しかし、しっかり握りしめて」
「握りしめられているの！　リズィの目は節穴だらけだよね！」
「嬉しいの」
「えっ？　そこ喜ぶところ！？」

休憩時間になった瞬間、教室中にいたクラスメートの大半が飛び出すように部屋を出て行く。ただ、昼休みというわけじゃない。

教室の中央にいる人物が怖いからだ。もちろん、麻耶のことである。

麻耶は小さく溜息をついた。前にいるシノンも苦笑している。

「お兄ちゃんが来ないよ〜」

「あっ、気にするところそこなんだ。ちなみに、のんちゃんは私達を悪魔のように見てくるクラスメートの視線を気にするのでした」

ちなみに、そんな視線で見ているのは麻耶一人なのだが、前にいるため否応なくその視線に晒される。

現在、二人以外に教室にいるのはクラスの委員長一人だけだ。

「視線なんてどうでもいいよ。お兄ちゃんさえいれば例え世紀末でも生き残れるから」

「それが比喩でも何でもないのがすごいよね」

麻耶は溜息をつき、ずっとくっつけていた頬を上げた。

「嫌な予感がする」

唐突に放たれたその言葉にシノンがポカンとする。それを気にせず麻耶は立ち上がった。

「お兄ちゃんに悪い虫がつこうとしている。ちょっとお兄ちゃんのところに、ぐえっ」

走り出そうとした麻耶の襟を勢いよく引っ張り、シノンは無理やり椅子に座らせた。

麻耶が非難の目でシノンを見ている。

「これこれ若人よ。そなたは学業があるではないか」

「そんなのお兄ちゃんよりも順位は低いよ。地球が滅ぶくらいに些細なことだよ」

「地球が滅んだらお兄さんも死ぬからね。のんちゃんも」

「うう、お兄ちゃんやのんちゃんが死ぬのは嫌だな」

麻耶が反省したように縮こまる。ただし、反省する場所はかなり間違っているが。

麻耶は小さく溜息をついた。

「でも、別の女の気配が今したんだよね。あれは一体なんなんだろう。のんちゃんはわかる？」

「のんちゃんに聞かれても答えられないからね。まあ、研究所に行ったということは、今頃、綺麗な研究者とお茶でもしているかもね」

麻耶の体がピクリと動き、徐に立ち上がった。そして、シノンが麻耶の体を椅子に座らす。

「まあまあ。多分、リズィ先生のことだと思うよ。ほら、若いし」

「ロリババァなだけだよ」

「それはそれでどうかと思うよ。あっ」

シノンが何かに気づいたように口を押さえた。その視線が気になって麻耶は後ろを振り返る。そこには、修羅がいた。

怒りに髪を逆立てて手にする杖を構えている。

「誰が、ロリババァじゃと？」

そこにいたは修羅はリズィ本人だった。麻耶の顔が引きつるのがわかる。

リズィは身長から麻耶達よりも下に見られやすいからそう例えたのだが、どうやらリズィにとっての禁句らしい。

「そなたに京夜のことを教えて」

「すみませんでした！」

京夜の名前が出た瞬間に麻耶は椅子から飛び上がって床にジャンピング土下座をしていた。あまりの速度にリズィもシノンも目をパチパチとしている。

リズィは小さく溜息をついた。

「京夜なら家に帰った。ちょっと預かって欲しい者がおっての、幼女、と一緒に家に帰ったぞ」

麻耶の体がピクリと動き、ゆっくり起き上がった。その姿はまさにゾンビというのに相応しいものでもあった。

リズィが一歩後ろに下がる。

「本当？」

麻耶の背後でシノンが頭が痛そうに手で押さえていた。こうなったら麻耶を止める手段は存在していない。

リズィは唾を飲み込みゆっくり頷いていた。

「お兄ちゃん、シスコンは許すけどロリコンは許さないよ」

「なはは。麻耶、のんちゃんの家の車で向かう？」

「うん」

麻耶が頷くのを見てシノンは携帯を取り出した。

リズィが小さく溜息をつく。

「先生の前でサボることを宣言するとはの」

「サボりじゃないよ。これはお兄ちゃんの魔の手から幼女を守るためだよ。あえて言うなら人命救助」

「本音は？」

「幼女の魔の手からお兄ちゃんを守るため」

リズィは溜息をつくしか行動を思い浮かべることが出来なかった。

「というわけだから」

僕は義母さんに隣で座って寝ている優奈の事情を話していた。一応、命が狙われている可能性もあると付け足して。

多分、麻耶が鬼の形相で詰め寄ってくるけど、ちゃんと説明をすれば理解してくれるよね。多分、だけど。

義母さんは頬に手を当てたまましきりに頷いている。

「誘拐は犯罪よ」

「話を全く聞いてなかったよね！」

思わず寝ている優奈が隣にいるのに叫んでしまった。叫んでから優奈が起きないか確認すると完全に熟睡している。

まあ、今までも全く起きなかったしね。

「聞いていたわよ。京夜の殺陣とか」

「うん、全く聞いていないのがよくわかったよ」
「ところで、その女の子といつからお付き合いしているの？」
「冗談はほどほどにして欲しいな！」
というか、いつ僕がそんなことを言った？　一言も言った記憶がないのは僕だけなのかな？
多分、僕だけじゃない。絶対に。
「あら？　私に紹介しに来たのよね？」
「正しいけど義母さんが思っているような紹介じゃないからね！」
どうしてこんなにも疲れないといけないのかよく分からない。
僕が小さく溜息をつくと、優奈が身じろぎした。そして、ゆっくり目を開ける。
「ここ、は？」
「起きた？」
目を覚ましたばかりの優奈が僕を見ると、一瞬で顔を真っ赤にして僕から距離を取ろうとする。だけど、そこに座る場所はない。
「危ない！」

僕は無我夢中で体を動かし手を伸ばした。そして、優奈の体を抱き寄せて背中から落ちる。

背中に軽い衝撃とお腹に軽い物体。僕は一瞬だけ息を詰まらせるけど、すぐに優奈を見た。

「無事？」

「あっ、ごめんなさい！　私、ひゃっ」

勢いよく立ち上がり後ろに下がろうとして優奈な僕の体に足を引っ掛けた。僕は慌てて手を伸ばして優奈を掴んで引き寄せる。

傍目から見れば僕と優奈が抱きついているように見えるだろう。

麻耶がいなくて良かった。

「あらあら、騎乗位？」

「あんたがいるのを忘れていたよ！　というか、他人の前でそんなことを言わないで！」

「きじょう、い？」

「優奈も尋ねないで！　お願いだから探索もしないで」

「へぇ～、お兄ちゃんはロリコンだったんだ」

その言葉に僕の体温が急激に下がったような感覚があった。恐る恐声のした方向を見ると、そこには鬼の形相をした麻耶の姿があった。

今、授業中だよね？

「そんな幼女に騎乗位って、お兄ちゃんは鬼畜だったんだ」

「ま、待って。これには理由が」

「お兄さん、今の状況でその言い訳は火に油を注ぐだけだとのんちゃんは思うな」

どうやら味方はいないようだ。というか、いつの間にか麻耶の後ろにクラスメートの姿があるし。

確か、麻耶と一番仲がいいのんちゃんだったはず。

麻耶がゆっくり近づいてくる。そして、拳を振り上げた。

「言い訳は？」

「事故！」

麻耶は全力で拳を振り下ろしてきた。少し理不尽じゃないかな？

麻耶の理不尽から少し経ち、僕の前で麻耶が見事な土下座を決めていた。

「ごめんなさい。でも、お兄ちゃんが悪いんだよ！」

「反省する気は全くないよね」

とりあえず、溜息をつくしか方法がないという悲しい事態。というか、どうして僕が殴られないといけないんだろう。

「まあまあ。のんちゃんが思うに、麻耶はお兄さんのことが心配だったんだよ。許してあげてね」

「事故だって言ったのに」

麻耶は土下座をしたまましゅんとしている。優奈も自分が起こした行動からこうなったことにしゅんとしていた。

僕は小さく溜息をつく。

「もういいよ。一応、優奈は今だけ預かっているだけだから」

「うん。研究所が襲われたんだよね。あれ？　私はいいとして、のんちゃんは聞いていてもいいの？」

「のんちゃんの口は堅いから大丈夫なのです」

「後でリズィに魔術をかけてもらうよ」

それなら話すことはまず有り得ないはずだ。だから、大丈夫だろう。

口が堅いという人物ほど信用にならないのは今までの経験でわかっているし。

「とりあえず、優奈は自己紹介を」

「は、はい。真柴優奈、です。ふつつかものですがよろしくおね」

「自己紹介の仕方が完全に間違っているからね！」

ふつつかものってどうしてここでそのチョイス？

「お兄ちゃんはやらないよ」

「さ、サインだけで充分です。それに、私は迷惑をかけてますから」

そう言いながら優奈が僕の手を握ってくる。一応、そのことについて理由は話しているから麻耶は額をピクリと動かすだけで済むけど、十分に怖い。

研究所のことがよほど怖かったらしく、優奈は僕から離れないのだ。

「麻耶、そんなに怒らないよ。のんちゃんだって命を狙われたらそうなると思うよ」

「わかっているからこうして怒っているんだよ。命を狙われた時のことはよくわかっているから」

麻耶の最後の声は本当に消え入りそうだった。

麻耶は命を狙われたことがある。だから、不満ではあるが強く言うことが出来ない。僕は麻耶の頭を撫でてやった。

「大丈夫だよ。僕の恋人は麻耶だけだから」

「お兄ちゃん、恥ずかしいよ」

「のんちゃんは今更だと思うな」

その言葉に麻耶の顔がさらに赤くなる。僕は笑みを浮かべながら前にあったコップを手に取った。

中に入っているのは緑茶。ただし、色がいろいろとおかしい。ほとんど緑色だ。青汁という表現が一番近いかもしれない。

それを懐かしく思いながら口に含む。口の中に広がる苦味と苦味。さすがは特濃緑茶。誰も手をつけない。

「京夜さん、一つ聞いてもいいですか？」

優奈が震える手で尋ねる。

「あの、私の命を狙った相手はなんなんですか？」

「あれは異形だよ」

その言葉に麻耶ものんちゃんも驚いていた。当たり前だ。未だに日本は異形の脅威にさらされたことがないのだから。だから、こんなにも日常が静かだ。

一部の過激派は参加しろとか義務を果たせとかうるさいけど、気にするものじゃない。

「お兄さん、嘘はダメだよ。こんなところに異形が出るわけないって」

「信じたくない気持ちはわかるよ。でも、あいつは異形だ。ハイゼンベルク近くの街で戦ったことがあるから」

あれが異形であると僕ははっきり言うことが出来る。だけど、異形なのに言葉を話す理由は分からない。

後は、異形とは少し違うような気もするところはある。

「つまり、もう日本まで異形が来ているってことだよね？　ハイゼンベルクはもう」

「ハイゼンベルク要塞も万里の長城もちゃんと健在だからね。現れた異形は特殊なタイプ。僕も、まさか日本で異形が出るなんて思わなかったくらいだし」

「良かった。ハイゼンベルク要塞が落ちたと思ったら心配で心配で。でも、お兄ちゃんは異形を倒せなかったのかな？」

「うん。あの異形はもしかしたらあらゆる異形の中でトップ。向こうの一人一軍（ワンマンアーミー）だからね」

僕のことである一人一軍（ワンマンアーミー）と同程度の実力。平均的な高さが極めて高い相手。負ける気はしないけど勝てる気もしない。

ただ、そいつが僕に目を向けなければ裏技を使うしか方法がなくなるからあまりやりたくない。

「お兄さんと同じなんだ。でも、そんなのが日本の各地に出たらす

ごいことになるよね」

「そこまですごいことにはならないと思う。相手は僕みたいに広域殲滅は出来ないと思うし」

出来るなら今頃優奈を焼き尽くしているだろう。それに、あいつは多分、日本にはいないような気がする。

気がするだけで実際は分からないけど、最後の言葉を考えても僕に任せて戻っている可能性だってある。

そうなると、ハイゼンベルクの方が危ないか。

「京夜さん、異形ってどうして私達を襲うんですか？　どうして、人を殺すのですか？」

それは未だに解明されていない分野だ。

異形がどうして襲いかかってくるのか。その理由がわかれば困ることは少なくなるだろう。

それに対してどうにかすればいいから。

「のんちゃんは捕食だと習ったけど？」

「私は領地を広げるためって聞いた。お兄ちゃんは？」

「多分、どっちも正しいんじゃないかな？　実際に異形が捕食をしている場面は見たことがあるけど、異形自体が捕食をするのは人間だけだしね。もしかしたら、異形は別に捕食をする必要がないかも

しれない」

捕食や領地を広げるだけが全てじゃないように僕は思える。もっと別な何かがあるような気もする。

「あれ？　どうして人間だけなのかな？　のんちゃんはそんな話、聞いたことはないけど」

「アフリカに行けば色々な動物がいるよ。チーターと追いかけっこになった時は泣きたくなったけど」

あれは本気で早かった。疾風迅雷の最速を出せば確実にたくさんの動物が死ぬからスピードを抑えていたけど、いつの間にかチーターがもう一体狙ってきたし。

逃げ切った時にはいつの間にかキリマンジャロに登っていた。

「うわ、のんちゃんは初めてそんな大嘘を吐く人を見たよ。アフリカなんて異形の溜まり場だよね？」

「のんちゃん、お兄ちゃんはこれでも一人一軍（ワンマンアーミー）だから。普通の異形じゃ勝負にならないよ」

そういうこと。まあ、アフリカ探索で一番大変だったのは食料の確保なんだけどね。寝る場所も木の上で、朝起きたらキリンと目が合ったとかもあったし。

信じられないのは無理もない。アフリカの様子を見に行った全員が未だに帰って来ていないから。

「そうなの？　でもさ、一人一軍（ワンマンアーミー）って胡散臭いよね。のんちゃんはあまり信じていないよ」

「ライド。『地縛失星』」

僕は『地縛失星』を身につける。そして、持っていたサバイバルナイフをのんちゃんに渡した。

「これで全力で斬りつけてきて」

そう言いながら僕は首を叩く。のんちゃんはサバイバルナイフを見つめ、一直線に首に向かって突いてきた。その動きは洗練されていて僕は微かに目を見開く。

慌てているのは優奈だけ。麻耶は『地縛失星』の性能を知っているから騒がない。

そして、のんちゃんが突いたサバイバルナイフは僕の首に当たり止まった。のんちゃんは驚いてまた突くけど、僕の首には刺さらない。

「えっと、のんちゃんはバカだから原理が理解出来ないんだけど」

「安心して。僕も理解していないから。『地縛失星』は絶対防御と強力な筋力を扱えるんだ。異形との近接戦闘じゃ、よくこれを使うしね」

使うと言っても言うほど使うわけじゃない。実際は『疾風迅雷』が一番多いし、数が多いなら『爆炎光破』を使う場合が多い。『地縛失星』を使うのは相手のスピードはそこそこ早い時とか、殴り合いになる時とかだ。

でも、『地縛失星』が一番、一人一軍（ワンマンアーミー）の中で信用されやすい能力でもある。

「ほうほう。とりあえず、凄いということだけのんちゃんは理解できました。それ以外はちょっと理解できません」

「そうなるよね。ダウン」

服装を変えてサバイバルナイフを返してもらう。そして、それを収納場所に直した。上着の中だ。微妙なふくらみだけど、ものを入れていたらなにかと気づかれないレベルでもある。

「お兄ちゃんっていつもそれを携帯しているんだ」

「まあね。昔からずっと使っている奴だから。一種のお守りかな」

そう言いながら僕はサバイバルナイフを手の上で回す。ペン回しの様にナイフを回し、元の鞘に戻した。

「あっ、今更なんだけど、学校は？」

「お兄ちゃんに悪い虫がつくと思ったらいてもたってもいられなくて。のんちゃんはどうして？」

「のんちゃんは親友のことが心配だったから。まあ、サボりたかったのもあるしね。でも、先生に報告するために一度戻ることにするよ。怒られるのはのんちゃんが引き受けるから、麻耶は優奈ちゃんを監視すること」

「監視ですか？　わ、私は別のそんなことは」

「オッケー。お兄ちゃん、のんちゃんを外に見送れる？　私は優奈と話があるから」

僕は小さくため息をついた。そして、麻耶への恐怖で震えている優奈の頭をなでてやる。

「大丈夫。麻耶は優しいから」

「京夜さんが言うなら」

麻耶の顔が少しむっとなるのは気にしないでおこう。

僕が立ちあがるとのんちゃんも立ち上がった。そして、二人揃って玄関に向かう。

「ごめんね。麻耶につき合わせて」

「のんちゃんは大丈夫だよ。お兄さんも大変だね」

「そうかな」

軽く苦笑しながら僕は靴を履いて玄関を開けた。そのまま外に出る。のんちゃんも靴を履き外に出た瞬間、僕は家の中から見えない角度でサバイバルナイフを抜いていた。

「ところで、本当の目的は何かな？」

のんちゃんがほんの一瞬だけ動きを止めて、そして、動き出す。

僕はサバイバルナイフを直して玄関を閉じた。

「あらま。さすがののんちゃんでも一人一軍（ワンマンアーミー）を騙すことはできないのでした」

「これでものんちゃんよりも長く生きているからね。サバイバルナイフの扱い方、どう見ても熟練の動きだったよ。普通じゃあの速度は出せないし」

「うーん。長年の動きが出ちゃったか。失敗失敗」

口はそうは言っているけど全くそういう雰囲気は出していない。多分、僕には正体を言うつもりだったのだろう。

僕は小さくため息をついた。

「で、君はどこの組織所属？」

「のんちゃんは日本なのですよ。日本と言っても裏部隊だけどね」

「日本国特殊機動部隊（ファントム）だね」

「知っているんだ」

日本国特殊機動部隊。通称ファントム。

その実態は世界のあらゆる組織が掴んでおらず、その規模すらも定かではない。ただ言えるのは、隠密行動に関しては世界でもトップクラスであるということ。

日本が唯一異形に対して戦闘をしていないのは日本国特殊機動部隊(ファントム)が掴んだ様々な裏情報によるところが多いと聞く。

「のんちゃんからの真剣なお願いです」

「ありがとう」

僕は真剣な表情になったのんちゃんの言葉を遮ってお礼の言葉を言った。

「麻耶を僕がいない間に守ってくれたんだよね」

「の、のんちゃんは別に」

「だから、ありがとう。のんちゃんのことはリズィにも話さないよ。だから、これからも麻耶の大切な親友でいてくれるかな？」

のんちゃんは一瞬だけ視線を落とした。そして、僕の顔を不安そうに見つめてくる。

「のんちゃんはいつか裏切るかもしれないよ？」

「麻耶を絶対に裏切らない」

「日本国特殊機動部隊(ファントム)の隊員だよ」

「もしもの時は僕の部下にするよ」

のんちゃんが嬉しそうに笑みを浮かべた。そして、僕に近づいて抱

きしめてくる。

「あるがとう、お兄さん。日本国特殊機動部隊（ファントム）に入った情報は出来るだけリークしてあげるよ」

「のんちゃんが危険にならない？」

「うん」

のんちゃんは普通に頷いた。頷いて笑みを浮かべる。

「お兄さんのためなら頑張れるよ。それに、最近の日本国（ファン）特殊機動部隊（トム）はどこかおかしいから」

「おかしい？」

のんちゃんは頷いた。頷いて僕から離れる。

「新人が多く入っているような気がして。多分、のんちゃんの気のせいだと思う。お兄さん、ではまた。明日の学校で」

「うん。またね」

のんちゃんがそのまま学校のある方向に向かって歩き出す。僕は小さく息を吐いて携帯電話を取り出した。

「あっ、朴？　久しぶり。うん、うん。元気だよ。あのね、ひとつお願いがあって、調べて欲しいことがあるんだけど。うん、うん。えっと、ランクはAくらいかな。・・・・・・。ははっ、高いね。でも、大丈夫。ちゃんと即金で用意できる。調べて欲しいのは」

第四話　謎（後書き）

女性比率が多い気もしますが、これから男性も増えて行きます。少ししたら、多分。

第五話　日本国特殊機動部隊（前書き）

ようやく男が増えます。

第五話　日本国特殊機動部隊

まだ春に近いからか朝の寒さはかなりのもの。でも、僕はその寒さを体に感じながら家の近くにあった公園で体を動かしていた。戦場の感覚が出来るだけ鈍らないようにするための訓練。実戦とは程遠いから鈍ることには鈍るけど違いはある。

足を動かし腕を振り、素早く振り返りながら攻撃の型を確認していく。

そして、いくつかし終わった後、僕は小さく息を吐いて動きを止めた。

「そろそろ家に戻ろうかな。あれ？　のんちゃん？」

公園から出ようとして歩いていると視界の中に見知った顔が入ってきた。麻耶の親友ののんちゃんだ。のんちゃんが知らない男の人と歩いている。

のんちゃんもこちらに気づいて駆け寄ってきた。

「やっほー、お兄さんは公園で一人遊び？　のんちゃんがかまってあげようか？」

「軽く体操かな。体が少し鈍っていて。そっちの人は？」

「のんちゃんのバイトの上司。あっ、学校にバイトのことは秘密だよ」

バイトということは日本国特殊機動部隊（ファントム）の隊長クラスか。バイトとぼかすのは僕が日本国特殊機動部隊（ファントム）にのんちゃんが所属していることが知らないことになっているため。

男の人は僕をつま先から頭のてっぺんまで見渡した。そして、開口一番、

「君が、一人一軍（ワンマンアーミー）か」

僕は身構えていた。いつでも地縛失星になれるように準備をする。

「そう身構えなくてもいい。のんちゃんから聞いていてね。昨日、戦場の英雄である一人一軍（ワンマンアーミー）と友達になったって。私は黒川五郎。とある派遣会社の部長だ。のんちゃんとは先ほどまで仕事の話をしていてね」

僕は構えていた体を解いた。でも、拳は握り締めたままだ。

「最近学業に専念しないと成績がなかなかとれなくて。中間テストが終わるまで少しの間休みをもらおうかと思いまして。のんちゃんはバイトをやめるつもりはありませんよ」

「わかっている。君はとても優秀な人材だからな。止めてもらってはとても困る。友達もいることだし私はそろそろ行かせてもらおう。また、携帯に連絡する」

その言葉と共に黒川さんが背中を向けて歩き出す。

その背中を見ながら僕は周囲の気配を探った。こちらを見ている数は大体４くらいか。でも、気配だけじゃなくて視線はもう少し感じ

るからもっといる。部長というよりももっと上の人か。

警戒されていることはのんちゃんはわかっているのだろうか。

「よく、あのバイトの人が僕が一人一軍（ワンマンアーミー）だってわかったね」

「のんちゃんが詳しく説明したからね」

そういうのんちゃんの顔は笑っていても目は全く笑っていない。つまり、ほとんど説明していないということか。僕は小さくため息をついた。

こういう状況で言葉に詰まったら疑われる。間髪いれず何かの動作か言葉を挟まないといけない。

「あまり有名人になりたくないんだけどな」

「後の祭りですな。お兄さんは一人一軍（ワンマンアーミー）なんだからしっかりする。ところで、三角関係どうなりました？」

にやにや笑って尋ねてくるのんちゃん。僕は日本国特殊機動部隊（ワンマンアーミー）のことを話してやろうかと一瞬思いつつ止めた。

利点があまりないし、下手したら麻耶に殺される。

「結局、家に優奈を置くことになった。優奈が麻耶に懐いてね、麻耶もまんざらじゃなくて義母さんなんて、『これで妹を産む手間がはぶけた。グッジョブ』って優奈に言うくらいだし」

「相変わらず白百合家のお母さんはどこか吹っ飛んでいるよね」

吹っ飛んでいるで表せれるのだろうか。懐いた経緯を簡単に話すとしたなら、

麻耶がお菓子を優奈に上げる。→優奈が麻耶に懐く。

優奈の将来が不安になってくる懐き方だった。麻耶もそのこと話した後同じことを言っていたし。

「でも、学校とかはどうするの？　お兄さんがロリコンでも学校には連れていけないよ？」

「僕をどんな犯罪者に仕立て上げるつもりなのかな？　僕はロリコンじゃなくてシスコンなんだから」

「ここで言うのもどうかと思うけど」

僕と麻耶が付き合っているのは周知の事実だ。多分。おそらく。そうだよね？

だから、他人の目は気にしない。近所の目も気にしない。気にしないつもりでもきっと痛いんだろうな。しくしく。

「お兄さん泣いているの？」

「世の中の理不尽さに嘆いているだけだよ。のんちゃんの家はどこ？　そこまで送るよ。これでも男の子だから」

「あそこ」

のんちゃんが何気なしに指さした方角。そこには、巨大な邸宅があった。そいうより、少し離れた位置にある小高い丘全てを敷地とする豪邸。確か、青山という人が住んでいる土地だったはずだ。

僕はのんちゃんが指さした方角を見た。そして、またのんちゃんを見て、また、指さした方角を見る。

「青山さん宅？」

「うん。のんちゃんは柿山シノンと名乗っていますが本名は青山シノンなのでした。ちなみに、麻耶ちゃんだけ知っているから秘密だよ」

「はいはい。あの距離だったら、最速コースか普通コースか近道コースのどれがいい？」

「ちなみに聞くけどどう違うのかな？」

のんちゃんが不思議そうに尋ねてくる。まあ、そうなるわな。

「最速コースが『疾風迅雷』で駆け抜けるコース。普通コースが普通に大通りを歩いていくコース。近道コースが歩いて近道するコース」

「あれま。思っていたよりも普通だった。お兄さんのことだから、『ぶち抜いて行くぜ！』とか言いながら直進すると思っていたのに」

「それは誰のものまねかな？」

僕はそんな言葉づかいをしたことがない。今までで一度も。

「にゃはは。のんちゃんとしては送ってもらいたいのはやまやまなのですが、そろそろ麻耶が起きる頃だと思うのでお兄さんはそっちに行った方がいいよ。浮気だと言って殺されたくないなら」

「本当にそうなりそうだからか怖いんだよね」

麻耶に冗談は通じない。それは今まで麻耶と暮らしていて嫌と分かっている。というか、体が覚えているくらいに。

僕は小さくため息をついた。こういう状況で女の子を一人にするのは心ないけど、のんちゃんなら大丈夫かな。

「何かあったら叫んでね。すぐに助けに行くから」

「お兄さんなら本当に飛んできそうだよね。何かあったら叫ぶよ。そんな必要はないと思うけどね」

のんちゃんが歩き出す。それと同時に周囲を警戒していた人達も動きだした。のんちゃんを監視していたのか、それとも、

「ただならぬ敵に目を付けられちゃったな」

人質を取られないことを、うん、あの二人なら例え日本国特殊機動部隊がやってきても全員撃退しそうだよね。冗談抜きにして。

朝食の席。四人座れるテーブルに僕と麻耶、優奈は座っていた。ただし、二人はまだ寝ぼけているのかほとんど目を閉じたままゆっくり箸を動かしている。その光景を見ながら義母さんは嬉しそうだった。

まあ、何を思っているかわかっているけど。

「そうだ。義母さん、今日は僕、学校休むから」

「何で！？」

椅子をガタッと音を立てて倒しながら麻耶が詰め寄ってくる。本当に怖いんですけどどういうことかな？　というか、さっきまでほとんど寝ていなかった？

麻耶がまだほとんど寝ている優奈を指さす。

「もう麻耶の体に飽きたの？　こんな幼女がいいの？　やっぱりお兄ちゃんはロリコンだったんだ！」

「人聞きの悪いことは言わないでよ。僕はただ、リズィと」

「ロリコンは犯罪よ？」

「そこ！　話を聞いていないふりをしないで！　僕は全くロリコンと言ってないよね！？　というか、ロリコンは犯罪者じゃないから！」

まあ、白い目で見られると思うけど。

こんな騒ぎの中、優奈は目をほとんど覚ましていない。というか、寝ている。

「お兄ちゃんがロリコンだったなんて。もう、私なんて捨てられるんだ」

「もしもーし。麻耶、聞いてる？」

「うう、お兄ちゃんなんて嫌いだよ。もう、会いたくないよ。肌も合わせたくないよ。吐き気がするよ」

「夜は一緒にベットで寝る？」

「お兄ちゃん大好き！」

本当に変わり身が早いよね。少し怖いくらいに。

僕は小さくため息をついて話を再開することにした。

「優奈のこれからのことをリズィと話すために優奈を連れて研究所に向かうから。午後からは出られたら出るよ」

「出席日数は大丈夫？」

「もう、気にしない方針で」

来年こそは、来年こそは卒業したいな。うん、来年こそは。

「もう、京夜ったら、そんなに優奈ちゃんが可愛いからってリズィさんにお嫁にくださいっていいに行くなんて」

「どうして義母さんは話を聞かないのかな？」

「それに関してはお兄ちゃんに同意するけど、まあ、お母さんだし」

それで片付けたら本末転倒な気もするが、義母さんのことだからそれで片付くのが恐ろしい。

「ところで、挙式はいつにするの？」

「頭の中は大丈夫！？」

一人で未来計画を作っていた義母さんに僕は思わずつっこんでいた。

朝食が終わり、優奈と一緒に麻耶を見送った後、優奈と一緒に研究所に向かっていた。ちなみに、タクシーは使わない。あんなバカ高いものを使っていられないというのもあるけど、優奈に周囲の街を案内するためだ。ちなみに、僕が再確認するためとも言っていい。

ここら辺の街並みはだいぶ変わったから。

五年前から日本にやって来る資源はかなり少なくなった。それでも唯一の安全国としてかなりの量の資源が集まっている。でも、それは研究用の資源だ。おかげで、街並みから工具店などの金属を扱う店や娯楽のゲームセンターなどは姿を消している。

僕は小さく溜息をついた。

「ここも、大きく変わったね」

「そうなんですか？　私には普通の光景にしか」

「優奈が物心ついた頃はそうだったからだと思う。でも、昔はもっと色々なものがあったな」

友達と一緒にゲームセンターに遊びに行き、どこかのバーガーチェーン店で安いものを注文し話しながら食べる。そんな光景がよくあった。

でも、今はほとんど見られない。学校があるからでもあるけど、街に活気が見当たらない。

「大きく変わったよ。異形が出てから。ここに来るたびにそう思ってしまう。僕もここでよく遊んだから」

「何年くらい前の話ですか？」

「12年かな。ちょうど、戦争が始まる前だったよ。その頃は本当に色々あった」

だから、こういう街並みを見ていれば少し悲しさを感じてくる。でも、仕方がない。そうでもしなければ今頃日本も異形に呑みこまれていた可能性だってある。

僕達はそのまま街並みを歩く。ただ、少し気になることが。

「ちょっとストップ」

僕が立ち止まったのはとある空き地の前。優奈も不思議そうに首をかしげている。

「ここがどうかしましたか？」

「懐かしいなって思って。ここに、ゲームセンターがあったからさ」

１２年ほど前にここにはゲームセンターがあった。友達と一緒によく遊んだものだ。

まあ、立ち止まったのはもう一つ理由があるんだけどね。

付けられている。数は視線が８。

一時期戦場で暮らしていたから視線や殺気には敏感になったけど、まさか、こんな平和な日本でそれを感じるなんて。振り返ることはできないし、どういう方法で話を聞いているかわからない。ただ、猛攻は僕が気づいていることに気づいていない。このまま研究所にいければいいけど。

最悪は強行突破か。

「京夜さん、どうかしました？」

「ちょっと懐かしかったからつい。物思いにね」

僕は歩き出す。その後を追って優奈も歩き出す。

問題は今いる大通りから抜けた研究所に向かう道に抜けた時、人気

は一気になくなる。もし、そこで待ち構えられていたならかなり大変だろう。

僕は小さく息を吐いた。

「変わらないものなんてないから仕方ないんだけどね」

「そうですね。でも、それがいいんじゃないでしょうか？　変わらないものもあればいいですけど、変わらないものばかりでは日常が停滞しますし」

「13歳なのによく考えるね。そう言えば、優奈の両親は？」

「えっと、言わなくちゃだめですか？」

優奈が尋ねてくる。もしかしたら、優奈にとっては触れて欲しくないことかもしれない。

僕は首を横に振った。

「話したくないならいいよ。僕はそこまで無理強いするつもりはないしね。ただ、一つだけ。どうしてパイロットに？」

「えっと、内閣総理大臣が来て、『君は世界を救う力がある』と言いまして」

「どうしてパイロットに選ばれたかは分からないか」

「はい」

理由がわからない以上どうしようもないけど、優奈が選ばれた理由をリズィにもどことなく聞いておかないとな。こんな子がパイロットになるなんて普通じゃないからは。

まあ、戦場なら普通なんだけどね。

「京谷さんはどうして戦場に？」

「義母さんに無理言って世界を旅させてもらっていたんだ。そして、戦争に巻き込まれた。そこで、大事な人を失ってね、僕の力が覚醒した」

それからが一人一軍（ワンマンアーミー）としての戦いの歴史だ。もし、それがなかったなら僕は今頃ここにはいないかもしれない。いや、もしかしたら、人類自体がいないかもしれない。

それが無かったらどれだけよかったことか。

「それからは戦いの連続かな。人と戦っていた僕は異形との戦いに変わって今に至る」

「そうだったんですか。京谷さんも大変な人生を歩んでいるんですね」

「そうなんだよね。あっ、あの路地に入るよ。あそこが一番近い道だから」

この道に入れば大体１０分は時間を短縮できる。問題が、短縮できる時間は襲われる時間が速くなる。一番の利点は地元しかわからないほど複雑になるから待ち伏せの可能性が少ないということかな。

追手も振り切りやすいし、近道だからその目的が悟られにくい。
地図で最初から確認されているだろうけど。でも、こんなところを地図を持って歩いていたら完全な不審者だ。

「わかりました。でも、ここに入って大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫。大々的に道を塞ぐ手段なんてないからね。それに、昨日、道が繋がっていることを調べてきたし」

それに、昔からの土地勘もある。迷うことはない。もしもの場合は調べればいいだけだ。

「さてと、このまま研究所に」

その瞬間、後方からの気配が消えた。いや、別の気配によって塗り替えられたと言うべきか。後方からの視線がなくなって思わず言葉を止めてしまう。

「そうかしました？」

「なんでもないよ。あっ、思っていた以上に道草くってる。ちょっと早足で行くよ」

「はい」

僕の言葉に応じて僕達は歩く足の速度を速めた。実際に時間はかかっているのだから理由としてはおかしくない。

だけど、言葉を止めたのはかなりマズかった。こういう時は普通に

しなければ気づかれる。相手には悟られたと判断していいだろう。
僕を狙っているには数が少ないから、狙っているのは多分優奈。どういう理屈でどういう部隊が狙っているかわからないけど、今は周囲に視線を向けながら、

「よう、京夜じゃん」

その声に僕は立ち止まっていた。目の前に信じられない奴がいたからだ。優奈を後ろにやって身構える。

「白百合、大和」

「奇遇だな。まさか、お前と出会うなんてよ」

そこにいたのは腰に刀を提げた男。年齢は確か３０歳。白百合家で最強と言われている。
僕の本気とどっちが強いかはやりたくない。

「京夜さん、この方は？」

「白百合大和。麻耶の親戚」

「おいおい、戸籍上は京夜とも親戚だろ。さてと、会った試しに一つ聞いていいか？」

僕はコクリと頷いた。そして、手を握りしめる。

「真柴優奈を渡してくれないかな？」

「ライド。『地縛失星』！」

すかさず地縛失星に服装を変える。やはり、優奈を狙ってきたか。

大和は頭をポリポリとかき、

「やっぱり無理か。クライアントの話じゃそんなに難しくないって聞いていたんだけどな。まあ、いいか。京夜を倒して奪っていけばいい」

「僕を倒して？　冗談も程ほどにしない？　ロード」

僕は地縛失星の力を微かに引き出した。それと同時に足下のコンクリートにひびが入る。

本来なら使わないけど、大和相手なら使わないとヤバい。

「ほぉ、そんな力でほざくのか。くっくっくっ。ガキが喚くな！」

大和が刀を鞘から抜く。あの刀の一撃はかなり痛い。地縛失星でも幾らかはダメージが抜かれる可能性がある。

異形と違って鎧通しがあるから。

最悪、優奈だけでも逃がさないと。

「囲まれているこの状況で余裕だな、おい」

「囲まれている？　そんな状況、アフリカじゃよくあるからね。そ

れに、雑魚が何匹集まろうとも、この前では虫けらにしかならない」

「おうおう、よく言うわ。だったら、斬ってやるよ。このオレが直々にな！」

大和が動く。鎧通しの技は見切るしか、

「はいはい、ストップ」

その声に僕も大和も完全に止まっていた。隙を丸出しで。

だって、そこには拍手をしながらニコニコしている義母さんの姿があったから。気配を全く感じなかった。

「これ以上は、めっよ」

「可愛く言っても年齢が合わないと思うよ」

「いいじゃない。若作りは楽しいから」

そう言いながら義母さんがニコニコ笑う。ただし、さっきまでとは違い周囲に気配を放って周囲の気配に対して牽制しながら。

こういう状況で相対したらわかるけど、麻耶のお母さんだなとわかる。今戦ったら勝てるかどうかわからない。

「ちっ、お前か。ここは引くぞ」

周囲の気配が慌てるのがわかった。数は8。気づけたのが4だから隠れるのがかなり上手いみたいだ。

「あれ？　大和ちゃんは久しぶりに私と手合わせしないの？」

「誰がやるか。だがな、覚えておけ。俺達は」

「日本国特殊機動部隊（ファントム）が何をするつもり？」

義母さんが不思議そうに首を傾げる。その言葉に周囲が完全に固まった。もちろん、僕や大和も。

日本国特殊機動部隊（ファントム）を義母さんが知っていることにも驚いたし、大和達の勢力を日本国特殊機動部隊（ファントム）だと断定したのも驚いた。

大和が口をパクパクさせるほど驚いている。

「麻耶と京夜に手を出すつもりなら止めた方がいいよ。二人共、私より強いから」

「日本国特殊機動部隊（ファントム）の話をどこで聞いた？」

大和が義母さんを睨みつける。それに対して義母さんはにっこり笑って、

「内閣総理大臣から」

「何で日本政治のトップから！？」

僕は思わずつっこんでいた。いや、普通はこうなるだろう。秘密とか言われた方が納得出来る。

「だって、総ちゃんは私の子分だから」

聞けない。これ以上は全く何も聞けない。もちろん、何か怖くて。

しかも、義母さんに子分がいてもなんら不思議じゃない自分がいる。

「ちっ、内閣総理大臣からなら仕方ない。京夜は驚いていないみたいだな」

「これでも戦場暮らしは長いからね。日本国特殊機動部隊（ファントム）の名前はよく耳にするよ」

「そうかよ。なら、言っておく。俺達は真柴優奈を狙っている。その女の子は外国の圧力によって奪われた存在だ。大人しくここで」

「なら、優奈は僕が守る」

僕は優奈の手をしっかり握った。

「日本国特殊機動部隊（ファントム）だろうがアメリカだろうが中国だろうが僕は優奈を守る。優奈の意志に反することがされるなら、僕は国すら敵に回して見せる。一人一軍（ワンマンアーミー）を甘く見ないで」

「言うじゃねえか。ガキが粋がっているんじゃ」

「ライド。『爆炎光破』」

地縛失星から爆炎光破に服を代える。そして、一言呟いた。

「オーバーロード」

その瞬間、熱線が大和の持つ刀を消し去った。正確には鞘を残して蒸発させた。

爆炎光破のオーバーロード技の一つだ。鉄程度なら一瞬で分解して蒸発させることが出来る。

「おいおい、生身に食らえば洒落にならねえぞ」

「そうだね。人間に向けたことはないけど異形に使ったことはあるよ。貫かれた血も流さないで一瞬で死ねるよ」

あまりの温度の高さに周囲を焼き固めるからだ。まあ、あまりの温度の高さに血が沸騰した可能性もありえる。

「ちっ。引くしかないか。クライアントからは穏便に取り返して欲しいと言われているんでね。じゃ、またな」

大和が背中を向けて歩き出す。僕は小さく溜息をついて爆炎光破を解いた。

「優奈、大丈夫だった？」

「京夜さん、本当に私を守ってくれるんですか？」

「それくらいなら簡単だよ」

そんなに難しいことでもない。ただ、目を離していられないからそこをどうにかしないといけない。

すると、義母さんがニコニコして、

「京夜がプロポーズするなんて驚いたわ」

「はい？」

どうしてプロポーズに飛躍するのだろうか。

「だって、優奈をあらゆる勢力から守るんでしょ？　つまり、ずっといるってことじゃない。それってプロポーズでしょ？」

「飛躍しすぎだから！　僕はそんなつもりで言ってないし」

「プロポーズじゃないんですか？」

「優奈も泣きそうな顔をしないでよ。僕は優奈を守るけど、それは妹みたいだから」

「そっか。優奈を私の養子にすれば全てが解決ね」

「京夜さんはロリコンでシスコンだから」

「人の話を聞けー！！　というか、僕はシスコンだけどロリコンじゃないからね！！」

近所迷惑になることに関係なく、僕は大きな声で叫んでいた。本当にいいかげんにして欲しい。

「ふむ、京夜はやはりロリコンでシスコンじゃな」

「予想していたとは言え、真っ正面から言われると辛いね」

僕は小さく溜息をつきながらカップの中にあったコーヒーを口に含んだ。ちなみに、目の前で同じようにコーヒーを飲んでいるリズィはコーヒーに角砂糖を五つくらい入れている。

優奈は別の部屋で検査中らしい。

「それにしても、日本国特殊機動部隊(ファントム)が本当に存在していたとはの」

「僕も驚いているよ。日本国特殊機動部隊(ファントム)は本当に幻影(ファントム)のごとく姿が掴めない存在だったのにね」

一応、これは演技だ。リズィにのんちゃんのことを悟られるわけにはいかないのだから。

リズィは小さく息を吐いた。

「日本国特殊機動部隊(ファントム)の存在はあらゆる国家にとってタブーじゃ。噂では、日本国特殊機動部隊(ファントム)によって日本が戦わない条約を結んだと言うしの」

「そのことはリズィが詳しいんじゃない？」

その噂は聞いたことがあるが、その条約の内容は聞いたことがない。本当に噂で終わるのか、それとも。

「そうじゃな。我が知るのは中国じゃ。噂では聞いたことがあるじ

ゃろ？」

「中国政府は自国民より日本国民を大切にする。それは日本によって脅されているから」

「そうじゃ。実際に、日本人をリンチにしただけで関係者どころか親戚一同最前線に連れて行かれたからの。老若男女関係なく」

その話は有名だ。実際に新聞沙汰になったくらいに。

中国というのは自国民に圧政を敷くのは得意だとか皮肉られていたっけ。でも、それが脅されているなら同情してしまう。

それが日本国特殊機動部隊（ファントム）の仕業だったなんて。

「日本国特殊機動部隊（ファントム）は世界から恐れられておる。それが優奈を狙ったとなると」

「目的は悠遠の翼」

「そうなるの。日本に提供されたとは言え、技術者は世界各国から集まっているからの」

「日本が利益の独占するためだね。パイロットさえ確保すればそれ自体が日本の主導になる。世界を救ったことが日本の主導だったなら」

「異形との戦いが終わっても日本が国際政治の中でトップに立てる、じゃな。そもそも、何もしなくても日本はトップに立てるじゃろうに」

異形との戦いが終わったなら唯一の戦いに参加していない日本が主導になるのは当たり前だ。戦いが起きていなくても日本は様々な援助をしているのだから。

僕は小さく溜息をついた。

「大人達の都合に巻き込まれるのが子供とでも言うかのような図式だね」

「そうじゃな。優奈の力はそれほどまでに強力じゃろう。そう言えば、そなたは優奈の力を知らぬかったの？」

「うん。優奈はそんなにすごいの？」

リズィは頷いた。頷いて、真剣な表情になる。

「そなたなら、優奈の力を理解出来るかもしれぬな。そなた、それを知る意志はあるかの？」

その真剣な表情に僕はハッとする。この表情はそれを貫き通さなければ殺すという表情だ。多分、受け入れているのがリズィ一人くらいなのだろう。

「あるよ。それは僕が化け物の一種だから。僕は受け入れる。例え、どんな力でも」

「化け物ではない。そなたの力は何ら化け物ではない。そなたは普通に」

「ありがとう」
僕は身を乗り出してリズィの頭を撫でた。そして、立ち上がる。
「案内して。優奈が今、何かをしている場所に」
「そうじゃな。そなたなら、優奈の力を許容出来るかもしれぬ。ついて来るのじゃ。優奈がこんなにも特別扱いされている理由を。そして、優奈が何故、大人の都合によって弄ばれているかを知るのじゃ」

そこは真っ白な空間だった。そこにいるのは光の翼を出した優奈。その優奈が真っ白な空間、周囲がまるで、ひしゃげ、砕けたかのようになりながらも平然としている。
それを離れた所で見ている研究者達。
「レベル８クリア。レベル９に移行します」
「前回はレベル９で失敗したからな。今回こそは成功して欲しいものだが」
「そうですね。世界のために」
研究者の顔には笑みが浮かんでいる。ほとんど感情を宿さない目をした優奈を見ながらだ。

京夜やリズィの前で見せていた年相応の顔じゃない。暗い感情を乗せた何か。

「レベル9、開始します」

その瞬間、優奈の体がビクッと震えた。そして、顔を歪ませる。何かを堪えるように。

「さあ、覚醒するのだ。悠遠の乗り手に相応しい、悠久の翼をもつ力を！」

「ライド。『疾風迅雷』」

その声が響いた瞬間、優奈はその場に崩れ落ちていた。そして、優奈の体が何かにぶつかる。

「大丈夫？」

「京夜、さん？」

「大丈夫だね。良かった」

優奈を受け止めた京夜は優奈を抱きしめた。そして、京夜は研究者達を見る。だが、研究者達は笑っていた。

「このままレベル10に移行しろ。一人一軍（ワンマンアーミー）と一緒ならさらなる覚醒を遂げるはずだ」

「わかりました」

京夜の耳にそのような研究者達の声が聞こえる。だけど、その発言をしたことは間違いだったと気づけたのは数瞬のことだった。

目の前に京夜と優奈がいる。それだけで思考がついていかない。

「ロード」

京夜が小さく呟いた瞬間、周囲の機器が同時に全て爆発した。京夜が研究者達を睨みつける。

「優奈をここまで傷つけるなんていい度胸だよね？　あなた達にとって優奈は何者？」

答えれた研究者はいなかった。だが、研究結果を書いていた事務員らしき人は答える。

「世界のためだ。たかが女の子一人を天秤にかければ世界の方が」

その瞬間、事務員の顔に京夜の拳が振り抜かれていた。事務員がそのまま後ろに倒れる。

「たかが一人？　世界のため？　あなた達が考えているのは自分達の研究でしかない。世界は一人の力じゃ救えない。そして、無理やりやらされて救えるものじゃない。優奈は連れて行く。邪魔をするなら全員潰すよ」

「き、貴様がやろうとしていることを理解しているのか？　この研究が成功すれば、世界を制する力が手に入るのだぞ！」

「それが本望なんだね。異形から世界を守る力じゃなくて、世界を制する力。あなた達は神にでもなったつもり？」

「神はその女の子だ。神の力さえ理解出来れば」

「そう」

京夜は拳を握りしめた。そして、小さく呟く。

「傲慢で、取り返しのつかない集団だ」

その言葉と共に京夜は優奈の手を握って歩き出した。優奈は背中の翼をどこかに消して京夜の後をついて行く。その顔はどことなく嬉しそうでもあった。

「世界の敵になるつもりか？」

京夜は振り返った。そして、

「世界でも神でも、僕が守ると決めたものに手を出すなら、戦うだけだよ」

第五話　日本国特殊機動部隊（後書き）

大和は京夜のライバルです。

第六話　特異点（前書き）

久しぶりの投稿です。展開はちょっと早めにしています。

第六話　特異点

麻耶は一人で椅子の上でふてくされていた。

最初は先生も昨日も途中でいなくなったことを怒ろうとしたのだが、麻耶の態度が全く変わらず結局は諦めていた。

クラスメートの大半も麻耶に目を向けず机を微かに離している。唯一近づいているのは麻耶の前に座っているクラスメートだけだった。

「どうしたの？　のんちゃん、相談に乗るよ？」

前の席に座っているシノンが麻耶に話しかける。だが、麻耶はふてくされたままだった。

シノンが小さくため息をつく。

「そっか。麻耶ちゃんって毎月あるあの日なんだね」

「それは先月から来ていません」

「ならいいや」

クラスメートの大半はいいのかよとツッコミを入れたい気分だったが、麻耶が未だにふてくされているため入れることが出来ない。

さすがに麻耶もこれはダメだったのか諦めてため息をついている。

「いいの？」

「だって。麻耶ちゃんはお兄さんのことが心配で心配で来なくなっただけなんだよね？　でも、麻耶ちゃんって本当に軽い方だよね」

「のんちゃんには負けるよ」

授業中にもかかわらずシノンは笑う。さすがにこの授業の担当先生は不謹慎だと思ったのか二人を指さした。

「そこ、授業中は静かに」

「「黙ってて！」」

「イエスマム」

二人の怒鳴り声に先生が一瞬で負けて縮こまる。周囲の机がさらに離れたように感じた。

「お兄ちゃんが今日も学校に来ないんだよ。多分、いや、絶対に何かに巻き込まれている。そうに違いない。行かないと」

「これこれ若人よ」

立ち上がろうとした麻耶をシノンは机を麻耶の方に押すことで物理的に阻止した。ちなみに、結構危険な行為だ。机か椅子がひっくり返る可能性がある。

麻耶は仕方なく浮かしていた腰を完全に落とした。

「のんちゃんはそのことを許さないのでした。というか、授業中だよ」

お前が言うなという言葉が周囲から洩れそういなるが必死にこらえる。さきほどの様な怒鳴り声を受けたなら確実に腰を抜かすだろう。だからこそ、漏らすわけにはいかなかった。

麻耶は授業中だと認識していないのか小さく息をつくだけで済む。

「そういえば、優奈ちゃんだったよね。お兄さんについた女の子」

「お兄ちゃんがシスコンだけじゃなくロリコンだったなんて」

「お兄さんがいれば全力で否定するところだよね。お兄さんは麻耶のことが大好きだよ」

その言葉に麻耶は頬を染めながら体をくねくねさせる。

「どうせ、年下が大好きなだけだよ。私とか、優奈とか、リズィさんとか」

口ではそうは言っているがまんざらではないみたいだ。

シノンは小さく息を吐いた。

「リズィ先生は見た目幼女だもんね」

「あんなのロリババアだよ。はっ、周囲にリズィさんはいないよね」

そう言いながら周囲を見渡す麻耶。ただ、その時の目が少しというより尋常じゃなく怖かったのでクラスメート全員が引いていた。でも、そこにはリズィの姿はない。

「はあ、お兄ちゃんは何をしているのかな？」

「ロード！」

僕はすかさず塞がれた道を熱戦で焼き払った。そして、そこに優奈の手を引いて飛びこむ。だけど、飛び込んだ先にあるのは大小様々な銃口。

「ライド！　『地縛失星』！」

放たれる弾丸の雨に僕は優奈を守るように立ち塞がった。そして、掌を前に突き出して能力を発動させる。

『地縛失星』は絶対防御があると同時に防御膜を形成する能力がある。ただし、その能力を使えば動けなくなるけど。でも、今回はそれを使うしかない。

放たれたのはＡＭランチャーの弾頭。対魔術に考案されたものだ。たとえ、いくら頑強な防御魔術を纏ったところで受け止められない。弾頭が爆発する。それは、魔力を破壊させる粒子を含んだ爆発。ふつうなら即死。でも、『地縛失星』にそんなものは効かない。

爆風が止んだのを見計らって僕は走り出した。そして、道を曲がる。そこには先ほど銃口を構えてきていた集団。

「厄介だよ」

僕は防御膜を展開しながら放たれた弾丸を受け止める。さっさと抜けないと挟まれる。

この場で人は殺したくない。優奈の前で殺すなんて出来ない。

「あれを、使うしかないか」

人の前では使ったことのない究極の一人一軍（ワンマンアーミー）の能力。あれならこの状況だったとしても切り抜けることが出来るだろう。

でも、これはある意味最終決戦を早めるもの。本当は使いたくはない。

どうすれば切り抜けれるかを考えたらあれしかない。それに、優奈を守るためならその力を使う方がいい。

「『地縛失星』。オーバードライブ」

その瞬間、僕の身につけている服装から色が消えた。純白になるというわけじゃない。色をどう表せばいいかわからない色。見た目は灰色に近いが、灰色とは違う。

直感的に見るなら無の色。自然界じゃありえない無の色。

「最終通告だ。どけ。さもなくば、腕は最低一本折る」

その声は自然と響き渡る。だけど、銃撃は止まない。

僕は小さく息を吐いた。そして、力を使う。

鈍い音と骨が折れる音が響き渡ったはずだ。そして、服の色が元に戻っていく。僕は優奈の手を掴み歩き出す。

優奈が何かを言っているが僕には聞こえない。この能力の弊害だ。強力な力の代わりに機能の一部を失う。

僕は優奈の手をしっかり握る。離さないように。もう、あの時みたいに失わないように。

もう、大切な人を失うのは嫌だから。

リズィは穏やかにコーヒーを飲んでいた。ただし、受け皿の周囲にはコーヒーが零れた後がある。

あの瞬間、京夜の服から色が失った瞬間、京夜達に銃口を向けていた兵士の全てが壁から現れた腕によって右腕を確実に折られていた。

今までの京夜を知るリズィからすれば初めて見る力。

リズィはキーボードを操作してあの瞬間の映像だけを砂嵐にする。もし、あの力が無制限に使えるなら、最終決戦は一気に早まるだろう。だから、悟らせるわけにはいかない。

「それにしても、昔から何も変わっておらぬの」

全く変わっていない。昔から京夜は誰かを守るためなら平気で軍すら敵に回す。しかも、殺しは必要最低限。今回は優奈を助けるためだけに京夜は敵に回した。

世界すらも。

優奈のことはリズィも知っている。知っているからこそ、京夜に優奈を託したのだ。京夜なら必ず優奈を救うと。

それがいいことか悪いことかはわからない。ただ、リズィからすれば京夜の行っている反逆行為は予想以上に嬉しいものだった。

「そなたがもし、我の力を借りず、誰も殺さずに地上に出れたなら、我はそなたに力を全て貸す」

それはリズィが出来なかったことだから。

リズィは近くにあった魔術書を手に取った。名は、

アル・アジフ。

「では、外にでも」

立ち上がったリズィに通信を知らせるランプが灯った。しかも、色は赤。緊急用のランプだ。

リズィはすぐに通信機を掴む。

「こちらリーズイット・エレナント」

『リズィ殿、緊急連絡です』

「京夜のことなら大丈夫じゃ。我は今から外での防御網を」

『特異点が現れました』

その言葉にリズィは総毛立つのがわかった。

特異点。

それは、アフリカ及びユーラシアの大半が異形に呑み込まれた始まりの現象だったからだ。特異点から異形達の城が生まれ、異形達が溢れ出した。

その特異点がここにある。

『出現位置は狭間学園高校上空』

「全軍に戦闘準備。日本近海にいる護衛艦も集合させるのじゃ。ペンウッドとレイナスをこの部屋であれを取るように連絡を。白百合京夜への連絡は我が行う。我は京夜と共に出撃する。優奈は試作型『悠遠』に乗せるように。翼は一本で。準備が揃った部隊からまとめて向かうように。学園への避難指示も頼む」

リズィは部屋から飛び出した。狭間学園の大きさは桁違い。それに、いくつもの研究施設がある。

何より、これからの未来を生きる者達がいる。

「あの時の後悔はせぬ。アル・アジフ、我に力を貸せ」

「っく」

その瞬間、シノンの目の前で麻耶がうずくまった。

「麻耶！」

シノンはすかさず駆け寄る。そして、すぐに手首を触って心拍数を計る。速度は若干ながら速くなっていた。

麻耶は苦しそうに窓の外を見ている。

周囲にいた生徒は何事かと囲むように二人を見ていた。

「何、これ？」

麻耶が驚くように声を上げる。そして、ふらつく足取りで窓際まで歩いた。

「無理をしたら駄目だよ。急にうずくまって」

「違う」

シノンにしか聞こえないような声。だけど、シノンはその声を聞い

ていなかった。見ているのは麻耶の表情。

麻耶は空を見上げながら怯えている。

「来ないで。お願いだから」

麻耶が両手を組んで祈る。それはまるで何かが来ないことを願っているような祈り。

シノンは空を見上げた瞬間、シノンの携帯が震えた。これはメールだ。シノンがすかさず携帯を取り出してメールを開く。

内容は本当にシンプルだった。

特異点発生。場所、狭間学園高校上空。

「お、おい。あれを見ろよ」

見上げた先にあったもの。それは黒い渦を巻く雲。見ただけでは完全に嫌悪感しか与えない。

シノンは唇を噛み締めた。

こんなことは想定していないし、起きるとは思っていなかった。だけど、一つ言えることがある。

もう、シノンは普通の日常に帰ることは出来ない。

「くっ、麻耶、ちゃんと逃げてね」

「のん、ちゃん？」

「今までありがとう」

シノンは走り出す。特異点が発生した以上隠してはいられない。シノンはすかさず携帯を取り出した。そして、とある番号を打ち込む。

「日本国特殊機動部隊（ファントム）のシノン。特異点発生の真下にいるため武器の使用許可を要請します」

『許可する』

聞こえてきた声にシノンは小さく頷いた。

もう戻れない。それはシノン自身がよくわかっている。わかっているからこそシノンは戦う。戦わないと、大好きな親友を守れないから。

「もっと、お兄さんと仲良くなりたかったな」

それはシノンの本音。だけど、それ以上話すことは許されない。もう、ありえない未来だから。

シノンは玄関まで降りた。そして、靴箱が並ぶ端にあるロッカーの一つに鍵を差し込み捻る。

ロッカーを開けたそこに入っていたのは一本の槍。真っ赤な柄と輝きを放つ刃。それを手に取るシノン。

「待って！」

その声にシノンは肩を震わせた。何故なら、その声は麻耶のものだったから。

「どうして」

「それはこっちのセリフだよ。のんちゃんがいきなり」

麻耶の言葉が止まる。シノンが麻耶の目の前に槍を突き出したからだ。

「私はもう、のんちゃんじゃない。シノン。私のコードネームはシノン。もう、のんちゃんは存在しない」

「っく」

急に感じた感覚に僕は壁に倒れかかるように寄りかかっていた。この感覚は覚えている。

異形との戦いの最中、大型以上の異形が出て来た時に感じる感覚。

「京夜さん？」

「こんな時に」

優奈を助けないといけないのに異形が出て来る。この平和な日本で

異形が出て来たならそれは大量虐殺を意味する。

「エレベーターを」

「こっちじゃ！」

道を曲がった瞬間、リズィがこっちに向かって手招きしていた。僕は優奈の手を握ったままリズィに近づく。

「リズィ！　異形が日本に現れる！」

「そなた、特異点を感じ取れるのか！？」

「特異点！？」

その言葉に僕は驚いていた。特異点なんてあの日、異形が現れた時くらいにしか現れなかったはずなのに。

もしかしたら、あの時も特異点だったのかな？

僕達は三人で走り出す。そして、エレベーターに乗り込んだ。

「優奈は試作型『悠遠』に乗ってもらいたい」

「えっ？　あの機体に？」

「そうじゃ。我と京夜は特異点発生位置、狭間学園高校に向かう」

その言葉に拳を握りしめる。特異点が、狭間学園だなんて。

「わかりました。京夜さん、麻耶さんを」
「うん。リズィ。僕は先に」
「落ち着くのじゃ」
エレベーターが止まる。そして、ドアが開いて優奈が降りた。すぐさまドアが閉まり上昇する。
「そなたの最速を出せばそれだけで被害が出る。この意味がそなたにもわかるの」
だけど、早くしないと麻耶達が危険だ。
「まずは落ち着くのじゃ。そなた、誓ったのじゃろ？　失わないと」
「リズィ、ごめん。ちょっと、頭が煮詰まっていたみたい」
「仕方ないことじゃ」
エレベーターが止まる。それと同時に僕とリズィは走り出していた。
「ライド。『疾風迅雷』」
加速する。加速して加速してさらに加速する。今はまず、周囲に被害が出ないような速度で狭間学園に向かう。話はそれからだ。
「これがそなたの速度か。ふむ、すごいの」
その言葉に僕は振り向いた。そこには本の上に座って浮いたまま平

行して動くリズィの姿があった。明らかに物理法則を無視している。
僕がそれを見つめていると、ものの見事にぶつかった。電信柱に。
もちろん、加速を緩めたり『地縛失星』を限定的に発動したりとしたのでただ痛いだけで済む。

「京夜、無事か？」

「そんなことより、どうしてついて来れるの？」

今の速度は遅くないし十分に早い。だけど、リズィはそれについて来る。

「そなたの『疾風迅雷』を使わさせてもらっておる。これが自動書記魔術器のアル・アジフじゃ」

「便利だね」

それなら空も飛べるのは納得出来た。魔術器だから何をされたって肝を抜かすほどじゃない。

僕達は屋根の上を跳び移る。もっとも、リズィは文字通り飛び移るだけど。

「ヤバいの」

空を見上げたそこには巨大な黒い塊が出来上がっていた。僕が知っているものよりもはるかに大きい。

ここからあの時みたいな現象が起きたならどうしようもない。

最悪、神化を使うしかない。

「リズィは避難誘導を。僕は落ちてくる異形を」

その瞬間、黒い塊に穴が開いた。たくさんの何かが降り注ぐ。それは異形だ。異形が大量に空から落ちている。

僕は加速する。この場で一番いい手段は異形の殲滅だ。異形を被害を少なくするために。

優奈は走っていた。目的地は試作型『悠遠』が整備されている場所に。

試作型『悠遠』はオーバーテクノロジーである悠遠の翼の内の一つを搭載することで動くことが出来る機体。

これなら何度も優奈は動かしたことがあった。

試作型なので戦闘能力は極めて低い。低いけれど、今はほとんど博物館にある戦車などに比べたらはるかに高性能でもあった。

「優奈ちゃん！　準備は出来てるよ！」

整備員の人達の声を聞きながら優奈は必死で駆け上がる。そして、試作型『悠遠』のコクピットに乗り込んだ。

シルエットはまさに笹かまぼこに手足をつけたような形。背中にオーバーテクノロジーのエネルギー体を埋め込むことで動かす。

コクピットは頭部にありお腹は少し膨らんでいる。背中にはエネルギー自体を吹き出すことで行動できるバーニアがついていた。

「試作型『悠遠』を出撃させます。滑走路は二番の使用許可を」

『使用許可は出せない。今すぐ試作型『悠遠』の起動を止めろ』

「リズィさんから話は言ってないのですか！？」

『口答えするな！　貴様は我らの飼い犬として大人しくしていろ！』

「いや」

優奈は口を開く。少しだけ俯きながらもその顔は何かを決めるようだった。

「装備はエネルギーライフル。カートリッジは背中の左側に大量に付けてください。右側にはレンジソードを」

『貴様は世界のためにいれば』

「戦っている。京夜さんもリズィさんも戦っている。だから、私も戦う。もう、守られながら生きるのは嫌だから！」

その瞬間、試作型『悠遠』についていた悠遠の翼が眩いまでの輝きを示す。人の顔を模した頭部の目が光を放ち完全起動したことを周

囲に伝える。

『まさか、レベル１０だと』

「私も、みんなを守るために戦いたい！」

優奈はコクピット内にあるレバーを握りしめた。右のレバーは出力の調整と試作型『悠遠』の右手の動かす。左のレバーは出力の調整が無い分細かい動きや稼働範囲が大きくなっている。

「試作型『悠遠』、行きます！」

試作型『悠遠』は動き出す。それと同時に目の前で空間がねじ曲がり試作型『悠遠』が通れるような渦が出来上がっていた。

優奈はそこに向かって試作型『悠遠』を動かす。そして、渦を突き抜けた先は、外だった。

「力を貸して。リズィさんを手伝うために。京夜さんと共にいるために！」

バーニアを吹かして試作型『悠遠』が飛び上がる。目的地は狭間学園高校。二人が向かった場所に。

麻耶は真っ直ぐ突きつけられた槍を見ていた。麻耶の前にいるシノンはもう覚悟を決めたのか、少しでも動けば攻撃する意志を目に宿

している。

「のんちゃん、ううん。シノンは、もう覚悟を決めているんだ」

「私はもうこの学園にはいられない。異形を倒し、そして、消える。ただ、それだけの存在だから」

「異形？　異形が来るの？」

シノンは静かに頷いた。

「特異点が現れた。もうすぐ避難が始まるから、麻耶は生き残って。戦うのは私の役目」

「じゃ、私も戦うね」

その言葉はまるで遊びに出かけるかのような軽さがあった。だから、シノンは思わずまばたきしてしまう。

麻耶はシノンの前に拳を突き出す。

「これでも白百合だからね。特殊能力くらいはあるよ」

「くらいって。だめ。異形は普通じゃない。麻耶が死ぬかもしれないのに」

「死ぬ？　そんなことはないよ」

麻耶はそう言って笑った。そして、拳を近くの壁に叩きつける。たったその一撃で壁は見事に大きなひびが入っていた。

「異形ということはお兄ちゃんが来る。世界最強の一人一軍（ワンマンアーミー）が。それまで二人で持ちこたえたらいいんだよ」

「だめ！　麻耶が死んだら、お兄さんが悲しむ。そんなことさせない。だったら、この場で麻耶を」

「私はね、怖いことがいくつかあるんだ」

そう言って麻耶は笑みを浮かべる。そして、自分の胸をトンと叩いた。

「まずは戦場に行くこと。戦うのは嫌いだから。嫌でも、私はみんなとは違う異能があるんだって」

「だったら」

「それ以上に、親友を見捨てたくない。そして、お兄ちゃんだけを戦わせるわけにはいかない。お兄ちゃんはずっと戦って来たんだよ。ずっと、ずっとずっとずっと。たった一人で、一人一軍（ワンマンアーミー）という実物があるから、死ぬことの恐怖を隠して、必死に戦っていた。倒れたら人類が滅ぶと自分を追い詰めてアフリカでの殲滅戦まで決行した。お兄ちゃんはね、孤独なんだよ」

力がありすぎるというのも誰も寄せ付けない。麻耶にはそれを感じたことはないが、京夜の姿を見ていれば何となく察することが出来た。

一人でたくさんの敵と戦わなければいけない恐怖。囲まれれば死ぬかもしれない。誰にもわからず死ぬかもしれない。だけど、京夜は

戦い続ける。

「だったら、私はお兄ちゃんの彼女としてお兄ちゃんを支える。それはシノンにものんちゃんにも否定させない。だから、向かう」

「はぁ。のんちゃんの負けです。その代わり、絶対に私のそばから離れないで。麻耶の指示はこののんちゃんが出します」

「うん」

「じゃ、校庭に」

その瞬間、玄関のガラスを突き破って異形が飛び込んでくる。形は巨大なカマキリ。シノンは動いた。

体を回転させながら正確に槍を上から叩きつける。

だが、その槍はカマキリの異形の背後から放たれた何かに弾かれた。すかさずステップで後ろに下がりながらカマキリの鎌を避け、頭に向かって槍を突く。

槍は簡単に突き刺さりそのまま頭部を完全に割った。

その場にカマキリの異形が崩れ落ちる。その後ろにいるのは巨大な蜂。槍が弾かれたのは針を飛ばしたから。

シノンはすかさず槍を投擲しようとして、何かが蜂の頭を吹き飛ばしていた。ちょうど玄関口にあった初代校長の銅像。それが放たれたのだ。麻耶によって。

シノンが槍を振りかぶった体勢のまま固まる。

「のんちゃん、どうかしたの？」

「えっと、麻耶って何者？」

「力持ちの人間だよ」

たったそれだけで銅像を一直線に投擲なんて出来ない。シノンは諦めたようにため息をついて槍を下ろした。

「考えても仕方ないか。のんちゃんについて来て。多分、今のは第一陣だから校庭にたくさん降りて来ると思う」

二人は玄関から飛び出した。そして、すぐさま校庭に出て、考えが甘かったことを悟る。

そこにはひしめく異形の姿があったからだ。まるで、整列しているかのような校庭を埋め尽くす異形の影。その視線が一斉に二人に向く。

異形との戦いは一対一じゃない。異形の数の比率が大きすぎる。真っ正面から戦うのは愚策だと最前線では伝えられているが、こんな日本でそんなことが伝えられているわけがない。

「えっと、やっちゃった？」

「のんちゃん、今言う言葉じゃないよね」

麻耶が小さくため息をつき異形を見つめる。異形はこちらを向いて

いるが動く気配はない。まるで、何かを待っているかのような。

「来たか」

その声は二人の背後から聞こえてきた。二人が振り返った先にいるのは金色の肌を持ち灰色の瞳をした鬼。

その鬼が二人を見つめている。

「これが、人間」

鬼が笑みを浮かべる。その笑みに二人は一歩後ずさった。

「どんな味がする？」

鬼が一歩を踏み出した瞬間、シノンは槍を振り切っていた。だが、その槍は鬼に簡単に掴まれる。

「刃向かうか。ならば、お前から」

「今！」

麻耶が一歩を踏み出した。鬼の腕を捻りながら足を払い投げ飛ばす。槍は腕を捻った瞬間に手放しているからシノンも一緒じゃない。

鬼は簡単に着地しと笑みを浮かべた。

「これが人間か。いいだろう。行け！」

鬼の言葉と共に異形が動く。数はわからないけど空からどんどん振

ってくる。

二人はお互いに身構えた。そして、

「オーバーロード。ライド。『地縛失星』」

熱線が一瞬にして異形達の半分を焼き尽くす。それと同時に『地縛失星』の京夜が二人の前に降り立った。

「間に合ったかな」

京夜はそう言って身構えた。

金色の姿をした灰色の瞳を持つ鬼。それは、灰色の姿をした金色の瞳を持つ鬼とはちょうど正反対のように僕から見えた。

おそらく、強さの桁が他の異形と比べてかなり違うだろう。

「今ので。ほう、お前が一人一軍（ワンマンアーミー）か」

その言葉に僕は内心で驚いていた。何故なら、鬼が日本語を話したかろだ。灰色の鬼とは違う。

「噂は聞いている。我らの同胞を殺し回る史上最悪の魔王だと」

確かに、アフリカでは目に付く異形を全て倒してきた。確かに相手

からすれば恐怖の相手だと思われたかもしれないが、魔王？

「お前がいるために世界の浄化が遅れている。新たなゲートを作り出して良かった。まさか、今から殺せるとはな」

「麻耶、のんちゃん、下がって。こいつはヤバい。今まで戦った異形の中でトップクラス」

「トップクラス？　我に並ぶ同胞などいない」

いない？　あの灰色の鬼はどうなんだ？　色が反転しただけだから同じだと思っていたけど、それ以上だとでも言うのか。

二人を守っていられる状況じゃない。せめて、軍さえ来てくれれば。

「おっ、クライアントからの連絡を受けて来てみれば京夜だけじゃなく麻耶がいるとはな」

「ベストタイミング」

やって来た大和に対して僕は笑みを浮かべていた。大和の周囲には武装した男達がいる。

「はっ？」

「麻耶、のんちゃん、大和の方に。実力だけなら保証出来るから」

「おいおい。いきなり何だよ。異形の集団とか金色の鬼とか子供のお守りとか。俺は何でも屋じゃねぇぞって、来るんかい」

僕が鬼と向き合っている間に二人が大和の場所に向かう。大和は結構麻耶を気に入っている。麻耶も大和は嫌いじゃないらしい。

まあ、麻耶もいる時の大和って本当に子供みたいだからな。

「人間がいくら集まろうと我ら同胞」

「だったら」

僕は地面を蹴る。『地縛失星』の全力を使って鬼との距離を詰める。そして、全力で空に蹴り飛ばした。

「ロード！」

右腕だけ『疾風迅雷』を纏い、空中に蹴り飛ばした鬼の頭を掴む。部分展開をした場合、ちょっとした違う能力が使える。『疾風迅雷』の場合は、焼き尽くすくらいの紫電。それを手のひらに展開したまま鬼の頭を掴んだ。

鬼の頭を焼き尽くす。

「ライド。『爆炎光波』。オーバーロード！」

そして、炎を全力で叩きつけた。最大出力のオーバーロード。それを至近距離で受けた鬼は地面に叩きつけられ焼き尽くされる。その熱波は校庭にいた異形も焼き尽くした。

「ライド。『地縛失星』」

服装を変えて地面に着地する。膨大な熱量によって溶解した大地であっても『地縛失星』の防御力なら全然耐えられる。

「全力で叩きつけたから、普通は生きていられないけど」

僕は麻耶達の方を見た。二人共無事らしく普通に立っている。

「ははははっ、ふはははははっ！　まさか、まさか、これほどだとはな。まさに、魔王に相応しい能力だ！」

生きていた。しかも、無傷で。その能力はまさにあの鬼と同レベル。

相手が魔王二人だなんて悪夢だ。

「ならば我ら勇者はお前を滅ぼすしかないな。さあ、出でよ」

その言葉と共にさらなる異形が降り注ぐ。今は異形を先に倒すことに専念すべきじゃないのに。特異点を閉ざすことに集中しなければ。降り注ぐ異形は大きい。小型や中型が少なく大型が主流だ。厄介にもほどがある。

「魔王を、殺せ」

異形が動き出す。数が多いし囲まれている。『爆炎光波』になる時間はない。

その瞬間、何本かのエネルギーの塊が何体かの異形を貫いた。

僕はそちらを振り向く。

そこにいたのは見たことのないロボット。だけど、あれはフュリアスだ。そして、あれには優奈が乗っている。直感的にわかった。

「待たせたの！」

校庭にリズィの言葉が響き渡る。それと同時に大量の人の気配を感じた。

「米軍及び自衛隊の全力を持って、異形を殲滅する！」

リズィの言葉は高らかに戦域に響き渡った。

第七話　新兵器（前書き）

久しぶりの、久しぶりの更新です。「新たな未来を求めて」の更新に専念していたらこうなりました。５ヶ月以上空くなんて。
待っていた人がいるかはわかりませんが、この話は全部戦いの話です。新たな登場人物やら武器やら兵器やら、「新たな未来を求めて」に関係するようなものがたくさん出てきています。
次はいつになるのかは心配ですが、とりあえず、主人公は最強とは必ずしも言い切れないという話でもあります。

第七話　新兵器

「ライド。『熱風緋槍』！」

僕の叫びと共に服の色が変わる。赤からピンクに。そして、それと同時にその手には渦巻く炎から形成された一本の槍があった。

それを掴み全力で振り払う。

次に現れた光景はまさに地獄というべきだろう。

槍を振り払うことによって僕の前を扇状に灼熱の熱風が駆け抜けて異形達を焼き尽くしたのだから。いや、焼き尽くしたというのは語弊がある。

焼き尽くしたというより水分を蒸発させたというべきか。もちろん、異形の体中には火傷が出来上がっている。

「よし、これで」

「それでこそ、貴様は魔王を語る資格があるというものだ！！」

「『地縛失星』！！」

金色の鬼がその拳を振るってくる。その拳に纏われているのは土塊。

僕はすかさず『地縛失星』でその拳を受け止めた。

「目障りな敵は多数いれど、ここまで心躍る存在は今まで出会った

ことは無かった。礼を言うぞ、魔王！」

「僕は魔王じゃない！」

振るわれた土塊を受け流し、鬼の腹に手のひらを押しつける。そのまま衝撃を鬼の体内で爆発させた。

鬼の体が後ろに吹き飛んだ瞬間に僕は拳を握りしめる。

「ライド。『熱風緋槍』！」

すかさず手のひらに渦巻く炎の槍を作り出す。そして、それを鬼に向かって投げつけた。鬼はそれを真正面から受け止めてさらに弾き飛ばされる。

この威力じゃ足りない。あいつを倒すには、さらに強力な力が必要だ。

僕は頭の中で使える手札の中で火力の高いものを思い出す。だけど、その大半が周囲で戦っている軍にも被害を及ぼすものだ。だから、使えない。

「それが魔王の武器か！　面白い機能だな！」

鬼の持つ土塊を渦巻く炎の槍で受け止めた。そして、力任せに弾き飛ばす。

「炎ならば我も炎を行くとしよう！」

その言葉と共に土塊が炎の塊に変わる。いくら『熱風緋槍』が僕の

持つ一人一軍（ワンマンアーミー）の中でもかなり強力なものだとしても、あの炎だけは防ぐことはできないと考えることは出来た。

本当ならあれを使いたいけど、ここには周囲に人がいる。せめて、半径３０ｋｍ以内に誰もいない場所さえ作り出すことが出来ればよかったけど。

すかさず『地縛失星』に着替えて真正面から鬼とぶつかり合った。鬼の拳ははっきり言うなら遅い。だけど、相手に攻撃しても全く通じていないのが問題。

せめて、相手に真にダメージを与える攻撃があればいいのだけど。

「魔王を倒し、我こそが救世主になるのだ！」

「救世主？　ふざけるな！！　そんなことはさせない。だから、力を貸せ！　僕の力！　オーバーロード！！」

その瞬間、周囲の大地が鳴動を開始した。その鳴動は周囲の大地を砕きながら一つの形となる。それは、巨大なゴーレム。

『地縛失星』のオーバーロードは周囲の大地を操る力。それを使えばこのようなことだってできる。

「お前が救世主となろうとするなら、僕はお前が言う魔王として、お前を倒す。僕にだって、守りたいものがあるんだよ！！」

そのまま鬼に向かって僕は殴りかかった。ゴーレムは周囲の異形を蹴散らすために動き出す。

鬼の僕に向かって殴りかかってきた。向かって来た拳を肘で打ち払いながら甲で鬼の頬を勢いよく叩いく

鬼の体は見事に回転して打ち上がる。すかさず飛び上がって膝を叩き込んでさらに打ち上げた。

「ライド。『緋炎天翔』！」

炎の色の服装に着替えてその手に握る炎の車輪を握り締め、それを鬼に向かって投げつける。そして、投げつけながら背中の翼を展開した。

『緋炎天翔』は飛翔の能力と共に背中の翼から炎弾を打ち出すことが可能なもの。炎を操ることが飛び抜けていて炎に関することなら何でも出来る。

ただし、極端に近接戦闘に弱くなる。

巨大なライオンの姿をした異形が飛びかかってくる。僕は反応が出来ない。だからこその『地縛失星』のオーバーロード。

異形が大地の拳によって打ち払われた。

このゴーレムは最大３０分間やられるまで勝手に動く。だからこそのこの形態。

「ライド。『漆黒一閃』」

鬼が地面に落ちてくる。その鬼に対して僕は小さく呟きながら拳を握り締めた。

服装が変わる。光り輝く服装に。冗談ではなく光を放っている服装。この手に握るのは漆黒に染まる一本の刀。

かなり恥ずかしい姿だけどその一撃のみだけで言うなら最強。ただし、一撃だけ。

鬼が落下してくる。それに向かって僕は刀を振り上げた。

「鬼一文字」

漆黒の刃が鬼の体を飲み込んだ。

「せいやっ！」

その言葉と共に異形が数十単位で吹き飛び、さらには数十の異形がそれに巻き込まれて地面を転がる。

その群れに向かって銃が一斉に放たれた。

麻耶が小さく息を吐いて肩から力を抜く。

「麻耶はすごいね」

討ち漏らして突っ込んでくる異形を華麗な槍捌きでシノンが倒す。

麻耶はともかくシノンは無傷じゃない。シノンの体中いたるところに切り傷があって息は荒い。

「のんちゃんは大丈夫？　怪我が心配なんだけど」

「大丈夫。のんちゃんはまだ大丈夫。これが、異形との戦い」

異形は倒してしばらくしたら消えて行く。だが、消えた以上に異形は向かいかかってくる。

異形は強くはない。強くはないが数だけはある。だからこそ、こちら側の被害は少なくなかった。戦線を支えているのは麻耶と大和の二人。

麻耶は人間離れをした力で近づいてきた異形を吹き飛ばして動きを止めている。対する大和は華麗な剣捌きで向かってくる全てを切り裂いていた。

「ちっ、子供のお守りの必要はなくなったが、異形がここまでうざいとはね。自衛隊はそれほど使いものにならないし」

自衛隊は完全に腰が引けている。アメリカの軍隊が何とか戦線を支えているという状況だ。

「大和、そうは言ってられないと思うけどね」

まがそう言いながら拳を握り締める。そして、小さく息を吐いて腰を落とした。その姿を見たシノンと大和の二人や一部の人が一歩後ろに下がる。

麻耶の手はまるで刀を抜刀する体勢で止まっている。ただ、その手には何かの揺らぎがあった。それに異形は気づかない。

「全力全開。それが普通だよね！」

その言葉と共に腕を振る。それはまるで刀を地面に叩きつけるように。

それと共に、

前方にいた異形全てがまるで叩き潰されたかのように轟音と共に潰されていた。

もちろん、その中には金色の鬼や京夜の姿もあった。京夜はとっさに『地縛失星』にしていなければ近くの異形と共に同じ潰れていただろう。

金色の鬼は地面に叩きつけられただけで目立った怪我はない。

麻耶は自分の手を見つめる。それは、自分が何をしたのかわからないとでも言うかのような行動だった。

「こいつはデカい掘り出し物だな、おい。まさか、異形に対する最終兵器が義理の兄妹かよ」

大和の声に麻耶は自分の拳を握り締める。

今まではずっと京夜の背中を見ることしか出来なかった。ずっと京夜が戦っている姿を、様子を、報告を、見て聞いているだけだった。

でも、今の力を使いこなせるようになったなら話は違う。

「戦える」

麻耶は小さく呟く。呟いて空を見上げた。空では宙を飛ぶ数少ない異形に対してフュリアスが攻撃を仕掛けていた。

「お兄ちゃん。私は必ず、お兄ちゃんの隣で戦うから。だから」

一足先に動き出した金色の鬼が麻耶に向かって地面を蹴った。だが、地面を蹴った鬼の足を京夜が掴み、そのまま反対側の地面に叩きつける。そして、そのまま蹴り上げながら空中で服装を変えつつ炎の槍で殴り飛ばした。

異形達はまだまだ生まれている。でも、こちらも兵はどんどん増えている。

いつ終わるかなんて麻耶は考えなかった。何故なら、京夜がいるから。京夜ならどんな数でも倒してくれると信じているから。だから、麻耶は向かってくる異形に向かって一歩足を踏み出した。

「ライド。『地縛失星』！」

鬼の拳を手のひらで受け止める。そして、上手く捻ってそのまま関節を力任せに逆に曲げた。

だが、折れる感触はしない。まるで、ゴムのようにしなっている。
僕は小さく舌打ちをして鬼を蹴り飛ばした。
「やはり、魔王の配下としては相応しい者達が集まっているようだな。我ら勇者及び勇者の仲間でもここまで苦戦するとは。シナがハイゼンベルクなるものを正面突破出来ない理由が理解出来た」
「シナ？　お前達は仲間もいるの？」
「何を当たり前のことを」
鬼の蹴りが僕の体を５０ｃｍほど後ろに下がらせた。僕は足に力を込めて逆に蹴り返す。
鬼の体は３ｍ程度下がるが、このまま殴り合っても完全な不毛な戦いになるだろうね。
僕は拳を握り締める。本当ならあまり使いたくない服装をいくつも使っている。切り札は残してはいるけど、やはり、危険だとは思う。せめて、『失落楽園』さえ使える環境になってくれれば良かったけど。
「そろそろ終わりにしようか。我が力の前に魔王はひれ伏す運命にある。それは当たり前のことだろ？」
「当たり前？　なら、言わさせてもらうよ魔王」
僕は拳を握り締める。僕の魔力に反応するように栄光が光り輝いて

いく。

「僕は勇者だ。勇者は、負けない」

一歩目から全速力。拳を叩きつけながらすかさず鬼を蹴り上げる。例えガードされていても打ち上げる。打ち上げて蹴り飛ばす。地面に着地をしたらさらに追い討ちをかける。

止まってはいけない。全力で、全速力で、全開でひたすら攻撃を加えていく。『地縛失星』を身につけたまま最大の攻撃力で拳を振り下ろす。

だけど、その拳は受け止められた。青色の鬼によって。

「えっ？」

僕が反応するよりも早く、青色の鬼の拳が僕の体を抉り込んだ瞬間、僕は胃の中にあったものを吐き出していた。

ダメージが抜かれた？　『地縛失星』で？

『地縛失星』は物理的な攻撃とあらゆる攻撃に対する防御力を見るなら最強と言ってもいい近接型の服装。でも、今の痛みは、完全に抜かれている。

『地縛失星』の力を破壊することなく。

「無事か。器のジェガン」

「レザリウスか。勇者は我だろ？」

「器ごときでは相手にはならない」

何かによって首を掴まれる。そして、そのまま持ち上げられた。持ちあげれらて青色の鬼と同じ高さになる。ただし、両足は着いていない。

これには『地縛失星』効果が表れているからかダメージは無い。でも、痛みのあまり動けない。もしかしたら、骨を何本も折ったのかもしれない。

青色の鬼が笑みを浮かべる。奴らの言葉に従うならこいつの名前はレザリウス。対する金色の鬼はジェガン。

レザリウスはそのままゆっくりと腕に力を込める。だが、痛みは無い。

「なるほど。無効化か」

「だが、いつか我がその無効化を」

「無理だな。例えば、そう」

腕が離される。そして、レザリウスが勢いよく足を振り抜いた。何とか寸前で腕を動かしレザリウスの足を大きく上に弾き飛ばした。

そして、着地して走り込もうとする。

「残念だ」

だが、目の前にはレザリウスが拳を放っていた。

受け止められない。

レザリウスの拳が顎をかする。何とか後ろに下がって直撃は避けたけど、天地がひっくりかえるような感覚に僕はその場に転がってしまった。

脳震盪？

その考えに至りながらも体は上手く動かせない。

「例えば、器のジェガンが我が速度を超えない限り」

そして、レザリウスの拳が僕に落下した瞬間、僕の意識は一瞬ではぎ取られていた。

「お兄ちゃん？」

麻耶が動きを止めて青色の鬼の拳によって動かなくなった京夜の姿を見た。

一人一軍（ワンマンアーミー）がやられるような敵。そんな新たな敵の存在に誰もが完全に後ずさっている。一人一軍（ワンマンアーミー）は世界最強の存在。だからこそ、今、ここで戦っている部隊は一人一軍（ワンマンアーミー）の力によって負けていないと言っても過言ではなかった。

だが、一人一軍（ワンマンアーミー）は負けた。新たに登場した。鬼によって。

「お兄ちゃん」

麻耶は前に一歩を踏み出す。それに気付いたシノンが麻耶に近づこうとするが、異形の群れが襲いかかってきたため自分の戦いに専念するしかなかった。

大和も麻耶を守ろうと前に出ようとする。だが、異形の勢いが強すぎる。

「お兄ちゃん」

麻耶にカマキリの異形が飛びかかる。だが、麻耶が無造作に放った拳によってカマキリの異形は吹き飛ばされ、５０ｍほど他の異形を巻きこんで後方に吹き飛んだ。

それは完全におかしな光景。そんなおかしな光景の中で麻耶はさらに前に踏み出していた。

「ちっ。おい！　麻耶！　せめてお前の獲物の剣でも持ってけって、聞こえてんのか！？　おい！」

大和の声は今の麻耶には届かない。麻耶が見ているのは京夜だけ。だから、その前を塞ぐ障害はなんであろうと叩き潰す。それが今の麻耶だった。

レザリウスやジェガンですらも。

「死ね」

麻耶の認識ではいつの間にか目の前までやって来ていたレザリウス。実際は歩み寄ったのだが、京夜しか見ていない麻耶とっては一瞬で来たようにしか思えなかった。

だから、振るわれた常人では見きれない拳の速度に麻耶は反応する。

パシッと音が響き渡った。それは、麻耶の手がレザリウスの拳を弾いた音。レザリウスが目を見開いた瞬間、レザリウスの体に麻耶の拳が突き刺さった。

レザリウスは体をくの字に折り曲げてたくさんの異形を吹き飛ばしながら転がっていく。その姿に異形の侵攻が止まった。

そう。止まったのだ。まるで感情が無いかのように突撃してくる異形の全てが完全に動きを止めた。それは完全に麻耶の力を恐れているようだった。

もちろん、シノンや大和達も動きを止めている。

あの一人一軍（ワンマンアーミー）が負けた相手に対して麻耶は圧倒的な力を見せて勝ったのだ。それは特筆に値するどころか恐れを抱くには十分だった。ただし、シノンは違う。シノンだけは嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「それが、麻耶の力なんだね。お兄さんの隣に立つための力なんだね」

近くにいた異形が飛びかかる。だが、それは一瞬にして麻耶の拳に

よって弾き飛ばされた。真正面からはクマの姿をした異形。その太い腕が麻耶を薙ぎ払おうと振られる。だが、その腕を麻耶は簡単に受け止めていた。

そして、麻耶が拳を放った瞬間、クマの異形は上半身と下半身を分離させて吹き飛んでいく。

「な、なんて力。レザリウスですた対抗できない力。面白い。本当に面白い。その力こそ、我の敵になるに相応しいちか、らぎゃっ」

麻耶の前に立ったジェガンが無造作に振られた拳いよって吹き飛ばされる。ジェガンの体はたくさんの異形を巻きこんで転がっていく。

「お兄ちゃん」

麻耶は倒れている京夜を抱きしめた。その背中を狙うように様々な異形が狙いを定める。だが、その狙いを定めた異形の全てが見えない拳によって叩き潰されたかのように潰されていた。

麻耶は顔を上げる。その視線の先には京夜を倒したレザリウスの姿。腕の中で弱々しく息をしている京夜を抱きしめながらレザリウスを睨みつける。レザリウスも麻耶を睨みつけている。

「許さない」

麻耶の言葉が周囲に響き渡る。その声に籠もっているのは怒り。

「許さない」

「その力」

レザリウスが小さく呟く。その呟きですら麻耶の耳には聞こえていた。

「お兄ちゃんの仇は私が」

「落ちつくのじゃ」

その言葉と共に麻耶の前にリズィが着地した。その手にあるのはアル・アジフ。

周囲にいる異形が一歩後ずさった。何故なら、アル・アジフの周囲にはいくつもの巨大な剣が浮かんでいたからだ。その一本一本が強大な力を持っているとわかるほどの力。

「ここからは我も戦わさせてもらおう」

その言葉と共にリズィが笑みを浮かべる。対する麻耶は驚いてリズィを見ていた。

「えっと、リズィさんって魔術師、だよね？」

「そうじゃな。魔術師じゃ」

巨大な羽虫の異形がリズィに飛びかかる。だが、剣が無造作に一閃され、羽虫の異形は塵芥となって消え去った。

その光景を見ながら麻耶は呆然としている。

「じゃが、魔術師は魔術師の戦い方があるのだぞ。例えば」
リズィが腕を振った瞬間、剣が同じように振られ、周囲にいる異形を散らす。まるで、剣がリズィの動きに反応しているようだった。
麻耶はそれをしっかり見届けて、そして、頷く。
「さ、ようやく準備は揃ったからの」
だから、リズィは笑みを浮かべた。
「援軍が到着したところじゃし、我ら人間の最終兵器の共演を始めるとしようかの。さあ、反撃の時間じゃ」

『反撃の時間じゃ』
その言葉が聞こえた瞬間、優奈は小さく頷いて握り締めていた右のレバーを大きく前に突き出した。
出力を最大から上限突破まで。全ての出力を最大限を越えるほどにまで上昇させる。
「クラスターエッジ接続確認」
そして、両手のレバーとペダルを動かして機体を安定させる。試作型『悠遠』の手に握られているのは巨大なライフル。そのライフル

にはいくつものエネルギーライフルに使われるカートリッジが接続されていた。

さらには、そのライフルはまるで地面に固定されるかのように様々な場所から放たれた杭が地面に突き刺さっている。

「エネルギー充填率９８％。目標捕捉」

しっかりと正確に狙いを定める。狙う場所は特異点である黒い渦を巻く雲の中に現れた巨大な門。そこに砲口を向ける。

それに気づいた異形が狙いを定めて試作型『悠遠』に襲いかかる。だが、それは近づく前にはアメリカ軍が横一列になって放った銃弾によって倒れて行く。

「出力安全装置解除。試作型『悠遠』のオーバードライブ起動。出力１３０％まで上昇」

レバーを握る優奈の手が汗ばむ。この出力までは理論上出すことは可能だが、それを実際にやったことはない。そもそも、試作型『悠遠』は実戦を初めて経験する機体でもある。

だから、優奈は怖かった。失敗することが。でも、この武器が届き、援軍と共に準備が整った時、京夜がレザリウスに負けたシーンを目にしてしまった。だから、優奈は憎しみの目で睨みつけながら巨大な門に狙いを定めた。

「上昇限界１３３％。上昇停止。全安全装置解除。クラスターエッジ射出２０秒前」

ライフルの中でエネルギーが収束するのがわかった。微細な振動が試作型『悠遠』襲っているから。その微細な振動を感じながら優奈は小さく息を吐く。

「１９」

異形が前に進もうと動いている。でも、銃弾の壁が完全に道を塞いでいる。

「１８」

ハリネズミのような異形が前に跳び出した。どうやらその背中にある針が銃弾を防いでいるらしい。

「１７」

その異形は凄まじい勢いで距離を詰めようと動いている。

「１６」

軍の動きに動揺が走る。

「１５」

ハリネズミはさらに加速する。

「１４」

そして、異形は軍に飛びかかった。それと同時に攻撃が弱まる。

「１３」

ハリネズミの異形が軍に傷つけようとした瞬間、軍の中から伸びてきた剣が針を砕き異形に突き刺さった。

「１２」

剣を握り締めた一人の少年が前に出る。そして、ハリネズミの異形を叩き斬った。

「１１」

それと同時に軍の攻撃が再開する。だが、相手もバカじゃない。

「１０」

ハリネズミの異形を盾にするように異形は動く。ハリネズミの後ろを走るように異形は走る。

「９」

だが、その頼みの綱であるハリネズミの異形が空から飛来した光の矢によって撃ち抜かれた。

「８」

空にあるのは滞空しているヘリ。その中に弓を構えた少女の姿がある。

「７」

その少女が弓の弦に手を触れた瞬間、そこに魔力が収束して矢となった。

「6」

その矢を少女は異形に向かって放つ。

「5」

異形は空を見上げるだけで何もできない。飛べる異形は全て試作型『悠遠』の構えるライフルの先にある巨大な門の前を守るように展開したからだ。この門だけは体を張ってでも守るかのように。

「4」

だから、地上の異形の動きは総崩れになる。空からの射撃と連携の取れた攻撃。その中を進む者がいたとしても少年とその手にある剣がどんな鎧も斬り裂いて倒している。

「3」

だから、異形はただ単にやられているだけだった。

「2」

そんな様子を見ながら優奈は最後のカウントを行う。

「1」

すでにライフルの振動は大きくなっており、照準を合わせるのに優奈は神経を集中した。

「クラスターエッジ、第一波、射出！」

その瞬間、方向から溢れんばかりの光が放たれた。光は空を舞う異形を砕き、そして、道半ばで複数の弾丸に分裂する。

轟音。

分かれた弾丸が異形に突き刺さった瞬間、巨大な爆発となって門への道を塞ぐ異形の大半を薙ぎ払っていた。

「第二波、射出！」

続いて光が放たれる。放たれるごとに試作型『悠遠』は大きく後ろに下がっており、それをするごとに優奈は照準を正確に合わせている。

放たれた第二波は轟音と共に異形を呑み込む。そして、道を塞ぐ異形の姿は完全に消え去っていた。

「第三波、射出！」

優奈は門に狙いを定め、引き金を引いた。方向から放たれたエネルギーは道半ばで分裂し、門に突き刺さった瞬間、巨大な爆発を起こす。

それと同時に門が震える。まるで、門から何かを吐きだすかのように。だが、それは門が最後の力を振り絞っていることと同じだった。

すでに、門はひび割れている。

「私達を、人間を、舐めるな！」

だから、優奈は最後の引き金を引いた。放たれるエネルギーの塊は同じように分裂して爆発する。そして、何かが砕けるような大きな音が鳴り響いた。

それと同時に門があった場所から何かが飛び散っている。それは門の破片でもあった。

「やった」

優奈が小さくつぶやいた瞬間、爆煙の中から何かが飛び出してきた。それはまるで、伝説上にしか存在しないとされている幻想の種、ドラゴン。

それが試作型『悠遠』狙って急速に近づいていた。

「今はクールダウン中なのに。シークエンス全破棄。強制起動、きゃっ」

試作型『悠遠』が横倒しになる。強制的にクールダウン期間を無くしたためによる機体のオーバーヒート。だが、そんなことは焦っている優奈にわかるわけがなかった。

ドラゴンが一目散に試作型『悠遠』を狙う。優奈はそれを見ながら必死に再起動を試みている。

間に合わない。

優奈がそう感じた瞬間、無数ともいえるエネルギー弾がドラゴンの体に直撃し、そして、穴を穿つ。

「誰？」

ようやく再起動が起きたものの、オーバーヒートによりいくつもの回線が焼き切れた試作型『悠遠』をg子ちない動きで振り返らせながら優奈は尋ねた。

そこにいるのは蒼鉛の色をした機体。試作型『悠遠』よりも人型に近く、ストライクバーストよりも小さいような気がする。ただ、その背中には数十にも及ぶ砲口を持ったいくつもの機械の翼があった。

まるで、天使をイメージしたかのような機体。

『どうやら、間に合ったようですね』

その言葉と共に通信が開かれる。画面に映ったのは柔和な笑みを浮かべる少し年を取った女性。

「あなたは？」

優奈は尋ねた。女性は笑みを深くして答える。

『私はフローラ。フローラ・アストラル・エヴァールン。このフュリアス、イグジストアストラルのパイロットです』

頭上で今まで異形を吐き出していた門が破砕される。その様子をリズィは笑みを浮かべながら見ていた。前にいるのは金色の鬼であるジェガン。

ジェガンは信じられないような表情で空を見上げている。

「まさか、ゲートが破壊されただと！？」

「そなたらの武器である物量。その物量は今途絶えた。さらには、アメリカ本土から凄まじい額の予算をつぎ込んで作られたフュリアスも到着した。そなたらに勝ち目はないぞ」

「ぐぬぬぬっ。だが、我らは負けたわけではない」

「そうじゃな。我も勝ったとは思っておらんぞ」

ジェガンは前に踏み出せない。踏み出したなら確実にリズィの周囲に浮かんでいる剣によって叩き飛ばされるのはすでに何度と経験しているからだ。

リズィの周囲にある剣は周囲の異形を斬り裂いている。だからこそ、その威力は尋常じゃなく高いと言うのは目に見えてわかっていた。

「魔王すら倒すことが出来ないとは。これも勇者の力が未熟なばかりに」

「ふむ、勇者か。そなたらにも文化というものがあるようじゃな」

「当り前だ。我らこそがこの世界を救うための存在。だからこそ、我らは負けられるのだ」

だが、とジェガンは言葉を続ける。

「あのもう一人の魔王はなんだ？」

ジェガンの視線の先には京夜を背負ったままレザリウスを簡単にあしらいつつ、迫りくる異形を倒している麻耶の姿があった。

確かに、異形からすれば魔王ではあると思いながらリズィは笑いを堪えるのを必死に答える。

「我らの秘密兵器じゃ。そなたら、我らに勝つということはあの二人に勝たねばならんのだぞ」

「ぐぬぬぬっ。ここは物量で押すしか」

「では、そろそろ幕引きとしようかの」

リズィがアル・アジフのページを捲る。そして、笑みを浮かべた。

「断罪の剣よ、今ここに。全てを破壊し創生の道を作り力をここに来い！」

その言葉と共にリズィを中心に魔力が集まる。そして、それが形となった。

「ジャッジメント！」

光の嵐が異形を砕く。広大な範囲内にいる異形の全てがアル・アジフの力によって再現された魔術によって跡形もなく砕かれていた。その威力はまさに魔王という名にふさわしい力。

ジェガンが一歩後ずさる。

「さ、三人目の魔王だと」

「ふむ。京夜と同列か。いい気分じゃ」

「くっ。レザリウス！　ここは撤退だ！」

ジェガンが走り出す。走り出す先は麻耶の攻撃によって吹き飛ばされるレザリウス。ジェガンはレザリウスを受け止めてさらに走り出した。それを見ながらリズィは小さくため息をついた。

「何とか、一発限りの魔術で引いてくれたの」

周囲の異形は我先にと逃げようと道を探っている。だが、その異形に自衛隊とアメリカ軍がともに襲いかかっていた。

その光景を見ながらリズィはアル・アジフを閉じる。

「我の出番も終了じゃな。さて、京夜と麻耶の二人を助けに行くとするかの」

周囲に浮かぶ剣を従え、リズィはひたすらに戦っている麻耶の下に急ぐのであった。

第七話　新兵器（後書き）

主人公が負けちゃいましたが魔王が二人ほど降臨。さらにはイグジストアストラルまで登場と物語はだんだん混沌となる予定です。ついでに「新たな未来を求めて」の第七章以降で意味を成す言葉も出ています。ネタバレではないので強行しました。

というか、第七章にたどり着くまで後何年かかるのだろうかと思いつつ。

次は戦闘は無い予定です。どうなることやら。というか、いつ更新出来るだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3763q/

ディバインナイツ -the origin-

2012年1月10日00時49分発行